はじめに

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
理事長　　坂　田　裕　一

震災後４年が経過した。

昨年１２月に、津波で被災した市民文化会館を修復オープンさせた宮古市では、やっとJR山田線の着工が決まったばかりで、防潮堤の修復も道半ばである。陸前高田市にいたっては未だに浸水地のかさ上げの途上で、市街地の復活はまだまだ先のように見える。

本書で紹介する文化復興にかかるアンケート結果では、文化復興の前に生活復興と訴える声も聞かれる。同時にコミュニティの再生や子供たちの心の復興に、文化振興が必要であるという意見も少なくない。

震災直後、文化芸術は打ちのめされた心に癒しを届け、被災地域では祭り芸能の復活にかける熱い思いが大きなうねりとなった。しかし、刻々と変化する被災地の状況に文化芸術は充分に対応できたであろうか、日々、これでよいのかと自らに問いかけ続けなければならなかった。

私は、阪神淡路大震災の１年後、神戸で行われた震災をテーマにしたアートマネージメントフォーラムに招かれ、パネラーを務めた。他のパネラーが文化による復興を語っていたが、唯一、遠く離れたところから参加した私は、リアリティを持って語る言葉を探しあぐねていた。しかし、フォーラム終了後に新開地の仮設飲食店で行われた交流会で、参加者同士が交わす激論の熱さだけは覚えている。それから１５年後、東日本大震災が発生した。瞬時にあのフォーラムのことを思い出した。何をするかではなく、何かをするために立ち上がらなければならないと思った。文化芸術活動でつながっていた仲間たちも、動機の違いはあったものの「何かをなすため」に立ち上がった。

それから４年。そして阪神淡路大震災から２０年。私たちは、あらためて文化芸術の役割を論じる必要がある。近年、急激に進行する地方の過疎化が問題視されている。少子高齢化、後継者不足は、被災地の文化状況と何ら変わりはない。被災地では徐々に進行してきた過疎化が、震災により瞬時に１０年先の過疎状況、コミュニティの破壊を生み出した。

また、震災によって一挙に現出してしまった心の喪失感は計り知れない。

急激な過疎化と心の喪失感に対する文化芸術の役割を論じ行動することが、今後の１０年の文化復興活動に他ならない。

3月11日に開催された文化復興フォーラムで、ゲストの作家＆ジャーナリストの外岡秀俊さんは、被災者が心的なストレスにめげず立ち上がるためのストーリーが必要であり、そのストーリーを作り出していく役割として、文化芸術が大切である、

と述べられた。

アンケートでは、被災地自らが文化復興に立ち上がるために中間コーディネートの役割の必要性が語られるとともに、NPO の自己満足への戒めの声もあった。

本年３月、１年間の調査と議論を経て、岩手県では第二次の文化芸術振興指針が定められた。勿論、強く震災からの文化復興を意識したものであり、コーディネーターの役割の重視や、子どもの文化芸術体験の重要性が第一次指針より強く打ち出されている。

この指針が、県や市町村、あるいは文化芸術関係団体の諸施策に反映されることを切望するとともに、本書で報告するアンケート結果や関係者の提言もまた、文化復興のため諸活動の参考に供されることを強く願う。

おわりにアンケートにご協力をいただいた皆さん、文化支援の諸活動に参加協力された方々、フォーラムに参加したパネラーの皆さん、本書に提言を寄稿された関係者の皆さんに厚く感謝申しあげ、巻頭の挨拶としたい。

第一部

文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査

～文化復興による１０年計画を考える～

報　告

調査の概要

【調査方法・対象】アンケート方式
　被災地に居住する文化活動関係者及び地域活動者
　または内陸に避難している被災市民を対象にアンケートを郵送で依頼。依頼者は併せて 400 名程度

【回答者】
◆岩手県被災地に居住する方(5 市 4 町 3 村)　…84 名
◆内陸部に居住する方(盛岡市居住／沿岸被災地からの避難者)　…50 名

文化芸術活動に興味を持つ
市民意識調査

文化復興による10年計画を考える

1

調査の概要

【調査方法・対象】 アンケート方式

被災地に居住する文化活動関係者及び地域活動者。また内陸に避難している被災市民を対象にアンケートを郵送で依頼。
依頼者は併せて400名程度。

【回答者】

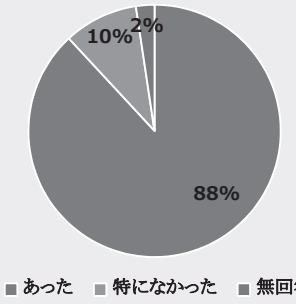
- 岩手県被災地に居住する方　　84名
  （洋野町～陸前高田市、5市4町3村）
- 内陸部に居住する方（盛岡市居住）　50名
  （沿岸被災地からの避難者）

2

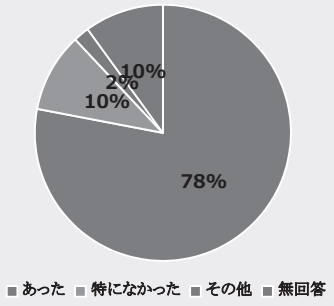
質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

- 問1. あなたが震災前に住んでいた地域には、継承されている祭り芸能がありましたか？

沿岸居住者



内陸避難者

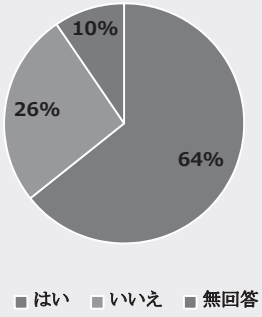


3

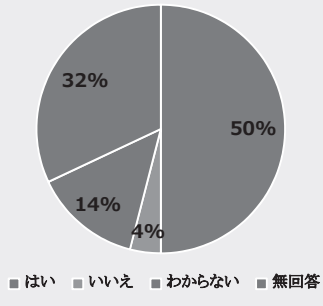
質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

- 問2.＜問1で①と答えた方のみ＞その祭り芸能は、震災の影響を受けましたか？

沿岸居住者



内陸避難者



4

質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

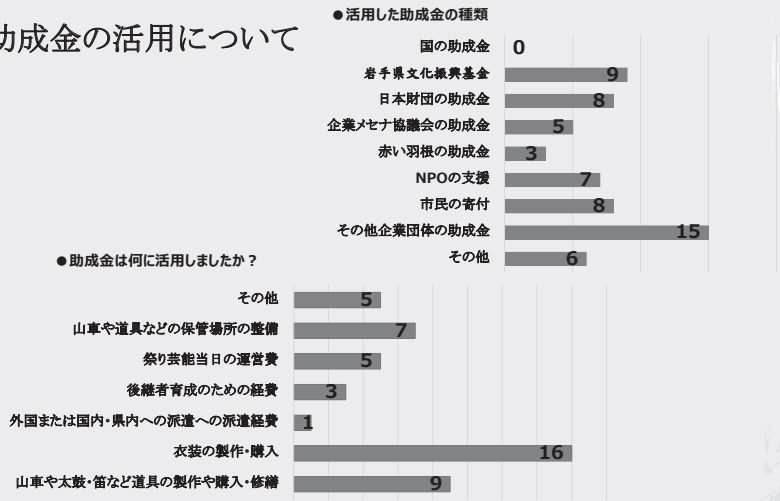
- 問3.祭り芸能の今後の活動に必要なものは何だと思いますか？(自由筆記)

地域の再生、地域の復興、練習場所・道具置き場の確保、
資金と人手(急激な人口減が祭りの担い手を失う)
地域コミュニティの再生(定住地が定まらない)
定住できる環境(特に内陸部避難者から)
祭りの簡素化も必要
後継者・指導者の育成、若者や子供への伝承
活動費の財源の確保、発表の場の確保
記録保存と他地域との交流促進

5

質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

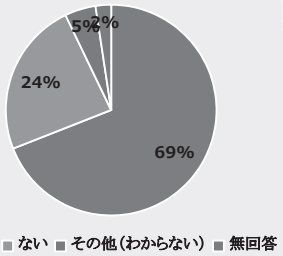
- 助成金の活用について



6

質問Ⅱ　子どもたちの文化芸術体験について（沿岸被災地居住者のみ対象）

◆ 問1.震災前と震災後に、子どもたちの文化芸術体験に変化はありましたか？



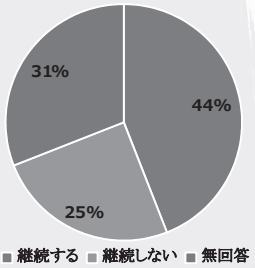
生の表現に接する機会が増えた
震災前より選択肢が増えた
学校での活動がしにくくなった（仮設住宅からの移動で時間的制約）
集まる場所、道具がなく夜は危険が増した
都市部、他地域との交流が増え、青少年の刺激となっている
絵など表現に変化がみられる
子どもはまだまだ被災のことを引きずっている

質問Ⅱ　子どもたちの文化芸術体験について（沿岸被災地居住者のみ対象）

◆ 問2.＜問1であると答えた方に＞その変化は今後も継続されると思いますか？

◆ 継続する（させたい）理由

震災で悲しい思いをした子供たちのためにも継続
文化会館が再オープンし、支援の継続に期待
体験が今後の人生に大きく影響
継続して文化支援もあるが、減少するだろう



◆ 継続しない理由

支援の補助も3年～5年に切れる
震災の記憶は風化し、大人になれば感受性もかわる

質問Ⅱ　子どもたちの文化芸術体験について（沿岸被災地居住者のみ対象）

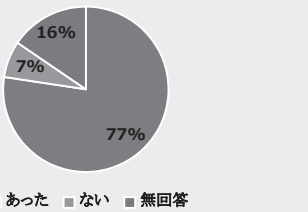
- 問3. 震災後の子どもの文化芸術体験について、おとなの役割や対応、支援のあり方等について（自由筆記）

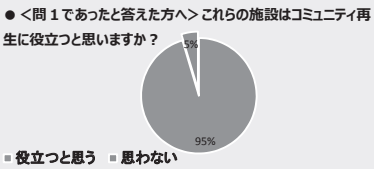
【支援のあり方】
継続的な体験が必要。参加人数の指数より、人材育成につながる支援
文化施設の早期復活
【今後の文化芸術体験】
見る機会も大切だが、やりたい子どもたちが一歩踏み込める環境づくり
都市部に比べ、芸術文化に接する機会が少ない、継続システムの構築を
【大人の役割】
子どもたちを積極的に参加させること、親の理解
物質だけで人は生きられない、文化芸術で子どもの心を満たしてあげる
のびのび活動できるようにサポート、ボランティアも必要

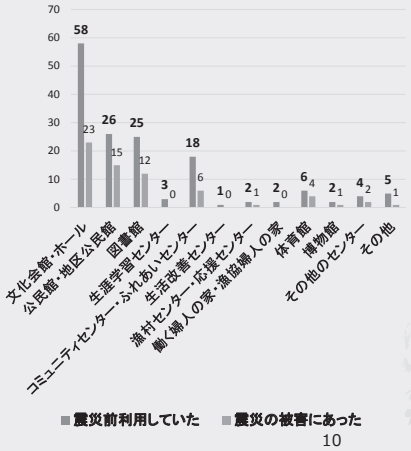
9

質問Ⅲ　文化施設・生涯学習施設のあり方について

- 問1. あなたが震災前に住んでいた地域には、よく利用していた文化会館・ホール、図書館、公民館コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設がありましたか？







10

質問Ⅲ　文化施設・生涯学習施設のあり方について

◆ ＜文化施設等がコミュニティ再生に役立つと思う理由＞

人が集う場所は欠かせない（同意見8名）
住民の集いの場であり、コミュニティ再生に必要（同意見7名）
発表・練習の拠点（同意見4名）
今、大勢が集まる場がない、必要（同意見4名）
市民の学習の場として必要（同意見3名）
いろいろな情報を知る場所
出会う場所

◆ ＜文化施設等がコミュニティ再生に役立つと思わない理由＞

利用時間に制限がある
使用時の手続きが面倒

11

質問Ⅲ　文化施設・生涯学習施設のあり方について

◆ 問2.＜役立つと答えた方に＞これからのコミュニティ再生に必要と思う文化施設や学習施設はどんな施設と思いますか？（自由筆記）

文化芸術を問わず、いつだれが行っても気軽に集まれて、指導者がいる
鑑賞事業と体験することをベースにした継続した事業ができる
安い利用料で様々な団体が活動できる

◆ 問3.被災地の地域の文化交流、あるいは文化拠点としてこれからの施設に期待することは何ですか？（自由筆記）

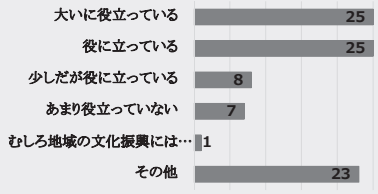
心の復興
ハードとソフトの両面に期待だが、どちらかというとソフト
心のケアには集まる場所（交流）が必要
生の催物が体験できる
自ら考え行動しながら喜びや楽しみを見出すような事業の展開
維持管理には、行政だけではなく住民も責任をもつこと

12

質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

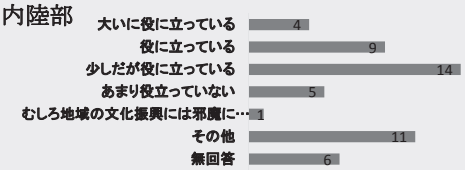
◆ 問1. 文化振興に**NPO**活動は役立っていますか？

沿岸部



<その他の回答>
1)プラス面、マイナス面あるかと思う…同3人
2)活動が見えない…同2人
3) 地域にNPOはない…同2人
4)NPOはない…同2人
5)詳しくは理解していないのでわかりません
6)そもそもそういうNPOが存在しているのか分からない…同2人
7)町術文化協会が活動しているが事務局は町教育委員会が担っている

内陸部

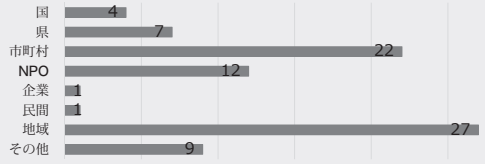


13

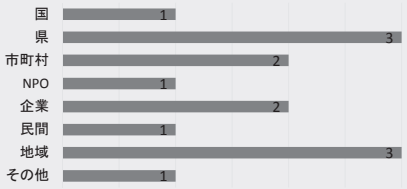
質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

◆ あなたの活動で協働するパートナーは誰ですか？（複数回答有）

沿岸部

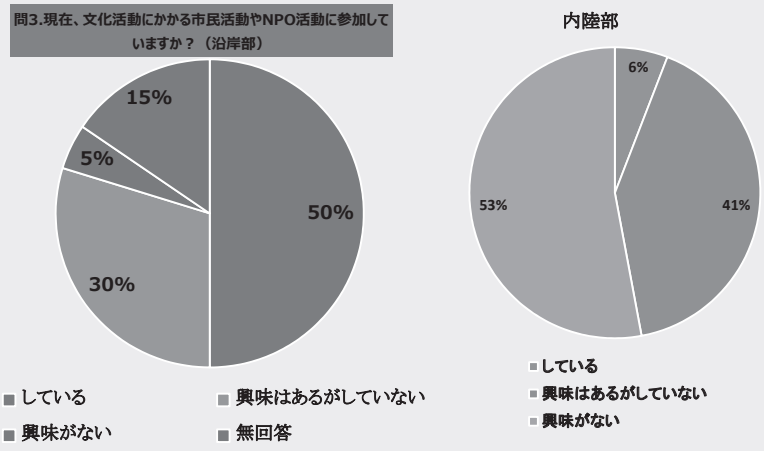


内陸部



14

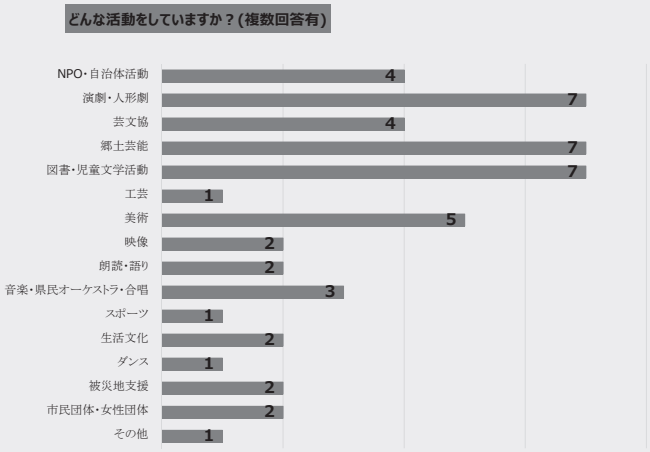
質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について



15

質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

◆ 沿岸部



16

質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

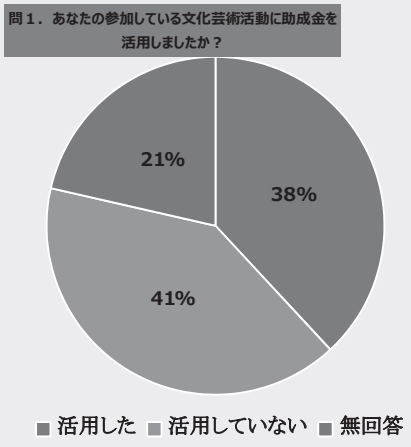
- 東日本大震災で、文化活動にかかるNPO,市民活動が果たした役割は何？

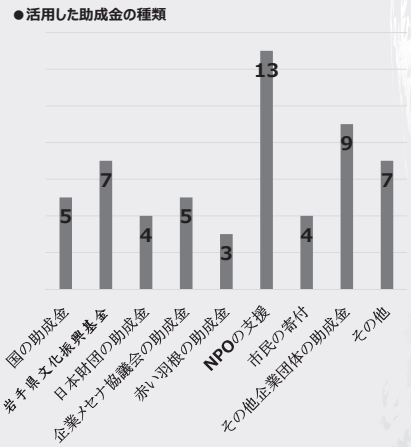
柔軟でスピーディな対応
被災者に寄り添ったニーズに応じた活動
仲間がいること、地域を見直したこと
震災で停滞しつつある活動を食い止めた
行政の手のまわらないところを手助けしてもらった

批判的意見
市民活動は必要だが、よそからきたNPOは役立たず
NPOの功績をたたえるイベントは・・・

17

質問Ⅴ　文化芸術活動への助成と評価について





18

質問Ⅴ　文化芸術活動への助成と評価について

◆ ＜助成金を活用していない方へ＞理由をお聞かせください

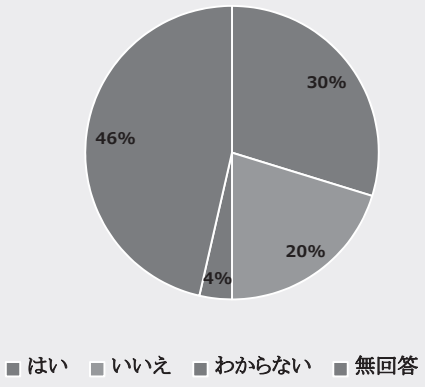
助成制度を知らない、情報がなかった
書類を作成する体力がない
活用方法がわからない
民俗芸能以外は助成できないと断られた
団体に属していないため

【浮かあがる課題】
コーディネート機能の弱さ
制度の告知とニーズとのマッチング

19

質問Ⅴ　文化芸術活動への助成と評価について

問2.あなたの活動ニーズと助成制度はマッチングしていますか？



＜マッチングしていないと答えた方の理由＞

きちんとした組織活動がないと助成できない制度設計になっている
活用方法がわからない
助成制度がわからない
利用限定があり、事務処理が大変
用具助成がほとんどであり、活動の継続や団体運営に資するものが少ない
説明会場や申請が県庁で不便

20

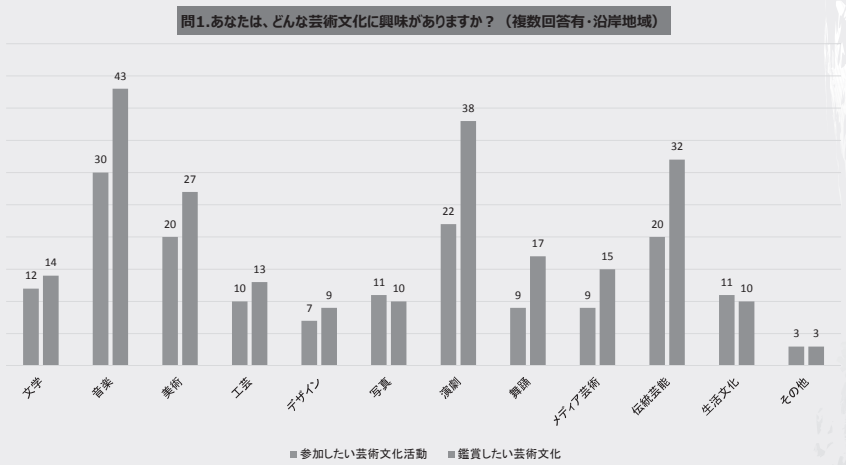
質問Ⅴ　文化芸術活動への助成と評価について

- 問3.今後の文化芸術活動の復興に向けて、必要とする支援は何ですか？（自由筆記）

項目	内容
資金	活動資金が必要 入場料だけでは補いきれない 市民団体のホール利用料金を安く
場所	活動場所、発表の場の確保 会場へのアクセスと駐車場
ひと・人材育成	専門の指導者 後継者育成の研修等 指導者の育成
その他	助成金申請のコーディネート 支援内容が一覧となった団体リスト

21

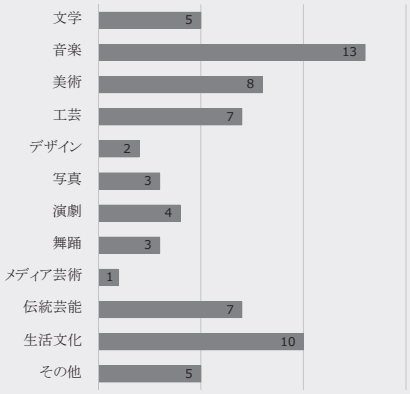
質問Ⅵ　地域文化・芸術について



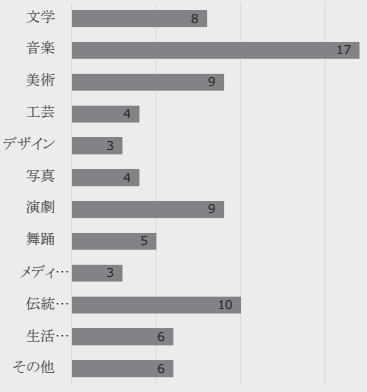
22

質問Ⅵ　地域文化・芸術について

あなたは今後どのような芸術文化活動に参加したいですか？（内陸）



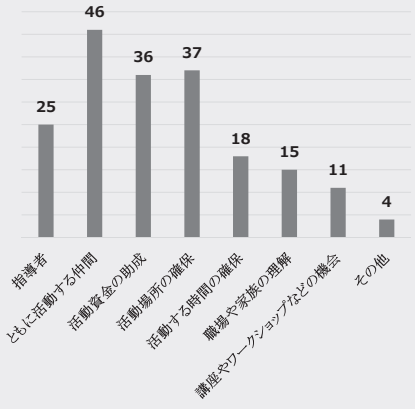
あなたは今後どのような芸術文化を鑑賞したいですか？（内陸）



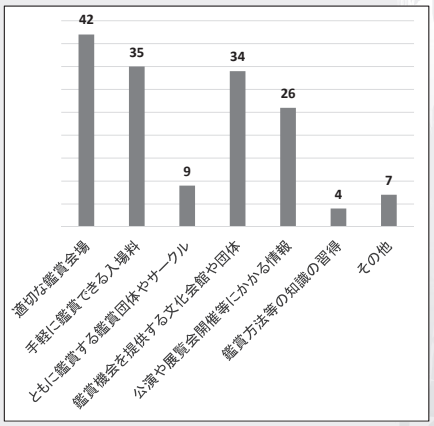
23

質問Ⅵ　地域文化・芸術について

あなたが回答した芸術文化活動について、実際にあなたが活動する上で、これから何が必要と思いますか？



あなたが回答した芸術文化について、実際にあなたが鑑賞する上で何が必要と思いますか



24

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で大切なことは何だと思いますか
（自由筆記・主な意見を抽出）

沿岸被災地

項目	意見
基盤整備・復興	伝統芸能は地域の「生活」そのもの。しかし、責任感、使命感、ある意味で余裕のある人しか参加できない。 復興は文化復興というくくりだけではなく地域の総合的復興を 地域コミュニティの維持発展が不可欠だが、人口減少が続いている。若い人がいて子どもたちが賑やかな町に
経済・くらし	文化復興の前に経済の復興を 一日も早く仮設から出て、震災前にもどらないと回答できない コミュニティの再生、人材育成、そのための生活保障（ゆとりある生活）と活動場所の保障 暮らしが成り立つこと 人口減少の歯止めになる政策、経済活動の確保
地域・街づくり	専門家のこまめな導入 伝統も新しいものも全て受け入れる風土づくり 未来を担う子供たちが活動できる基盤作り 誰もがここにいたいと思う魅力的な文化環境

内陸避難者

項目	意見
基盤整備・復興	行政の働きかけによる教育の場の建設 地域の早い復興、市民会館の再建 文化復興に情熱をかけるエキスパートが必要
経済・くらし	ある程度の経済的ゆとり 文化復興の財源 個人が互いに自由に研鑽、発表できる場と多少の資金援助
地域・街づくり	住宅再建に併せて公共施設を含めた町づくり計画を 盛岡に住んでみて、自分たちが住んでいたところは文化的に遅れているとき気づき、残念

25

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で大切なことは何だと思いますか
（自由筆記・主な意見を抽出）

沿岸被災地

項目	意見
文化	市民の文化度を育てる（無料に慣れ過ぎた） 文化復興のため、中心になって活動している人が大切 震災から逃げないで常に震災を意識し、防災をからめた芸術文化の推進を 無料公演の常態化は、被災地の文化振興は長期にわたって不振に陥る 都市部でソウルドアウトするイベントの招致で、交流人口の増加を 文化施設、担当者の充実と資質
子ども・若者	震災を風化させない、次の世代への伝える 子どもたちへの文化的教育 若者たちがいきいきと活動できる団体づくり、時間・場所の提供 自分たちの活動が地域の文化であるとの自覚・コミュニティ再生の正念場が今後10年
継承・人材育成	学校教育で郷土芸能の継承を 郷土芸能の継承のため、他地区や市外からも受け入れる 多くの文化団体が後継者難で悩んでいる 継承者・育成者への支援が必要

内陸避難者

項目	意見
ひと・交流	人口を増やすこと 地域と地域の交流促進 交流の密にすること
子ども・若者	世代を超えた交流が必要 若者が文化に触れる機会が必要。 魅力的なまちづくりで、若者がその町にとどまる工夫が必要
伝承・伝統	祭りや芸能は昔から意味のあること。次世代に引き継ぐのは当然。 高齢者の増加と人口減による参加者減、後継者の育成が必要

26

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で大切なことは何だと思いますか
(自由筆記・主な意見を抽出)

今後、内陸部と沿岸部の文化交流を構築する上で課題は何ですか？(内陸部居住者)

項目	意見
基盤整備	地域格差をなくす沿岸部への予算強化 交通の利便性(時間がかかりすぎる)＝多数 沿岸の活動資金や施設整備の助成 交流人口の減少、内陸部の被災地への関心の薄さが課題
交流	文化交流の窓口はどこだろう？ 交流の場に行って環境まるごと文化に接したい 文化交流ではなく、普段の生活、暮らしにおいて交流が必要。相互交流 交流を続ける コミュニケーション技術を高める
その他	岩手県内の祭りと芸能、食ルーツをマップにすることもできるのでは。 内陸・沿岸の交流には多少課題もある。オール岩手の視点を持つべき。

文化交流を構築する上で望むことは何ですか？(内陸部居住者)

項目	意見
基盤整備	県土の均衡発展と言うが、沿岸部は施設そのものが不足 施設整備をすすめ、町づくりに力を入れないと文化交流の段階にすすめない
教育・交流	子どもは大切な宝物、格差のない文化・教育の充実を いろいろな世代が楽しめる文化交流を 発表者・鑑賞者相互の声が反映される交換会
意識・その他	震災をきっかけに多くのボランティアのイベントがおこなわれ、そこからの交流がさらに交流を生み出した。それが続くことが大切 支援を続ける、参加すること 意識の差をなくする 内陸中心に考えるのではなく、別々に独自の道を

27

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？
(自由筆記・沿岸被災者)

要望先・国へ
1)地域再生の事業・人が集まる事業を地方で重点的に実行
2)文化会館の早期着工。早期に集会施設の建設。
3)(活動者)地元での自由度のある財政支援
4)文化の継承も地方分権としてしっかり理解し認めること
5)地域の特性を大事にして欲しい
6)助成制度のうち、出演団体の謝金が補助対象であれば、イベント開催が継続できるし、盛んになると思う
7)20年程前、郷土芸能等に関する法律が出来たはずだが活用が見られない
8)伝承芸能保存に対して長期の支援
9)各学校で民俗芸能にかかわる子どもたちを一緒に育てていける体制をとって欲しい
10)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする。心のケアは一番大切

11)学校教育で郷土芸能を考えて欲しい(指導については私たちが協力致します)
12)文化復興に対して紋切り型でなく各地域を理解したうえで支援して欲しい
13)被災地での文化芸術活動を長期的に支援して欲しい
14)文化復興への予算措置をお願いしたい
15)活動の励みにもなる無形文化財への指定促進
16)生活再建及び市町村、芸文協、民間団体への助成等財源保障
17)芸能を次世代に伝えるにあたり、まだ最低限の道具しか揃っておらず数年先が見えないため、土地などの盛土など早めの計画
18)公共の交通機関の整備を進めて欲しい。人の移動手段があると活動も活発化すると思う

28

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？
（自由筆記・沿岸被災者）

要望先・県へ
1)職務として実施していただける文化コーディネーターを配置していただきたい
2)文化会館の早期着工。早期に皆が集まる施設の建設。施設の充実
3)（活動者）地元での自由度のある財政支援
4)使い道を限定しないで市町村に一任できる体制
5)国の顔色ばかり伺わず文化多彩な岩手の誇りを持ってもらいたい
6)市町村の個性を大事に。地域の特性をもっと外のPRすべき
7))地域間の芸能の交流の場の提供。地域の芸能についてのライブラリーやアーカイブの作成
8)もっと子どもたち同士が発表できる場所を作って欲しい
9)有形、無形文化財をもっと掘り下げてもらいたい
10)伝承芸能保存に対して長期の支援

11)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする。心のケアは一番大切
12)学校教育で郷土芸能を考えて欲しい
13)ハードの復興も大事ですが、ソフト（地域文化）の復興も大事です。一日も早い復興
14)芸術文化協会に対する助成が少ないのではないか
15)文化芸術振興基本条例が策定されたものの沿岸＝被災地市町村には効果が見えない。具体策を提示して欲しい
16)活動の場、鑑賞の機会を作って欲しい
17)活動の励みにもなる無形文化財への指定促進
18)生活再建及び市町村、芸文協、民間団体への助成等財源保障
19)指導者の派遣や講座の開設、楽器の支援など
20)文化振興事業団から出る補助金の範囲を広げて欲しい

29

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？
（自由筆記・沿岸被災者）

要望先・市町村へ
1)若者を中心に支援をする仕組み・づくりが進んでいるので、このまま継続していただきたい
2)文化・芸術の興味関心をもたせること
3)（活動者）地元での自由度のある財政支援。助成金
4)文化施設、地域のコミュニティの充実。早期に皆が集まる施設の建設
5)地域の伝統文化の研究をもっと詳細に、そしてアーカイブス化
6)10年先、100年先を見据えて、芸術文化の復興は心の復興になると思う。自由な気質が育まれる土壌づくりが必要
7)発表の場の提供、イベント等の周知広報への支援。備品購入の支援
8)市民へ文化の持つ意味をもっとお知らせすべき(広報紙だけではダメ)
9)職員、担当者の資質の向上をお願いする
10)伝承芸能保存に対して長期の支援

11)学校の先生の文化復興、民俗芸能に対する考え方をもう少し良いものにして欲しい
12)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする
13)早く市民会館、図書館等を建設して。市民会館を市民が使いやすい会館に
14)文化協会への助成金を考えて
15)被災した郷土芸能が残るための方法を考えること。学校教育で郷土芸能を考えて欲しい
16)コミュニティの再構築するための人材育成
17)若い世代への文化の浸透
18)文化振興に地域に対し指導力を発揮して欲しい。文化復興に関心のある職員を養成して欲しい。文化復興の実現
19)コミュニティの再構築するための人材育成
20)七夕保管用の建物、または製作用の建物が必要

30

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？（自由筆記・沿岸被災者)

要望先・県や市町村の芸術文化協会へ
1)所属団体の利益だけでなく、文化団体の組織が無い若者が自主的に行う文化活動にも支援できるような仕組みを構築していただきたい
2)文化・芸術の興味関心をもたせること。地域内外への活動状況の広報、PR活動
3)支援交流を多くして欲しい。発表機会の設定。活動団体支援
4)芸術文化（郷土芸能）を盛り上げるようにロにはしても、この団体には資金がない。芸術・文化で活気づけようとするならば助成が必要
5)国・県からの情報を一般住民にこまめに周知して欲しい。情報共有
6)芸術文化は遊び心を持って
7)どういう活動をしているかわからない。より開かれた活動と情報発信を心がけて欲しい。存在を知らないのでアピールして欲しい
8)いつまでも被災者ではなく復興者として前に進んでもらいたい
9)文化芸術活動の復興
10)親身になってサポートする。手助け

11)企画の窓口
12)活動も以前に戻りつつあり、頑張ってもらいたい
13)指導者を増やす。後継者育成。地域住民に対する指導が大切では
14)芸術文化活動をしている団体同士の情報交換、交流の場を設けて欲しい
15)みる人、みる目を養う活動
16)現役の活動中の若者に多くの機会を与えて欲しい
17)県芸文協によるNPO法人化に向けた研修を実施して欲しい
18)今までの芸文協主催の音楽活動は場当たり的で芸術とは程遠い。もっと計画的に。レベルアップを！
19)異なる分野であっても横のつながりを保ち刺激しあう関係

31

文化復興によるこれからの10年について

10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？（自由筆記・沿岸被災者)

要望先・文化支援NPOや民間団体へ
1)支援が必要な小さな団体は手を上げることすら出来ないので、足を使って苦しんでいる団体の情報を各種機関に伝えていただきたい
2)地域内外への活動状況の広報、PR活動。イベント周知
3)沿岸は3～4年でないと落ち着かない、それまで支援を願う（目標到達点設定と達成までの支援）
4)国の理解が不足しているのでは。アピール度引き上げを
5)今まで通りの活動を継続して欲しい。「3.11絵本プロジェクトいわて」には継続して活動して欲しい
6)一緒に活動してくれるのは良いが、単発で実際やってくる人たちに迷惑することもある
7)高い志の持続力が必要、財政面の強化。人材育成
8)支援の内容を具体的に知らせた上で活動して欲しい
9)文化芸術活動の復興。いろんなところで活発な文化活動がなされている
10)市民と行政ほかをつなぐ仲立ち役。各種団体の連携支援

要望先・地域の会社や住民へ
1)どこの地域にも優れた文化はあるので、あきらめずに地域の文化を盛り上げていっていただきたい
2)復興に関して経済活動のみが優先される傾向が見られるが文化面も含めて様々の面で総合的なバランスをとりながら考える心構えが必要
3)参加意欲と元気になれる様、発展に頑張ろうという気持ち。イベント周知、参加要請。会社や地域ぐるみでの参画
4)地域を盛り上げ活性化させるためには他人事ではない住民一致団結である。そこに団体組織も協力することであると思う
5)中央文化に依存が濃いのは否めないがお互いもっと話し合う場が必要
6) 全国展開している企業はなかなか地域の活動へ力を貸してくれることが少ない。せめてチラシを置くとかポスターを貼らせてくれるとか何かしら支援して欲しい
7)自分が動く、関心を持って努力する。他人まかせではだめ
8)たくさんの人に参加して欲しい。もっと仲間を増やしたい…同4人
9)いつまでも被災者ではなく復興者として前に進んでもらいたい。共に頑張りましょう…同3人
10)互いの理解。興味関心を持ってもらいたい

32

アンケート結果から

被災地の課題

・生活基盤の整備は道半ば
・人口の減少と高齢化の加速
・後継者難
・指導者・専門家不足
・移動時間の長さ（交通）
・無料慣れした公演
・文化施設整備の遅れ
・文化芸術活動団体の弱体化
・助成事業等のコーディネート
・支援活動が継続されるか不安

今後への期待

・復興推進（住居・施設・就労）
・観光＆文化で交流人口増へ
・若者定住への魅力あるまちへ
・指導者・専門家派遣へ
・交通網の整備
・自ら負担へ（緩和対策も必要）
・新施設や職員への期待
・資金支援の必要性
・中間NPO等への期待
・支援団体への継続支援も必要

33

■「文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査」報告

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長　坂田裕一

この「文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査」は、いわて文化支援ネットワークが「文化復興による10年計画を考える」ということで実施しました。→「調査の概要」＜パワーポイント資料P2参照＞

質問Ⅰ「祭り芸能の復活と今後について」

＜パワーポイント資料P3＞　これは沿岸居住者と内陸避難者の二つに分けています。沿岸被災者では88%の方が、内陸避難者では78%の方が「震災前に住んでいる地域には伝承された祭り芸能がある」。両方とも非常に高い比率で回答しています。多くの被災地にはきちんと「祭り芸能があった」というふうに思っていただきたいと思います。

＜パワーポイント資料 P4＞　「地域に伝承された祭り芸能があった」という方に、「その祭り芸能は震災の影響を受けましたか？」という質問です。沿岸居住者の方は 64%が受けた、内陸避難者は50%です。特徴的なのは、内陸避難者に無回答 32%がいます。これは地域から離れているために、リアルな形では状況が受け取られていないのではないかというふうに思います。

＜パワーポイント資料P5＞　「祭り芸能の復活と今後について」自由筆記をお願いしました。内陸避難者からは「定住できる環境」「祭りの簡素化」「後継者・指導者の育成」「活動費の財源確保」「記録保存」ということが主に上げられていますが、「資金と人手」の中に「急激な人口減が祭りの担い手を失う」とあります。震災後の急激な人口減が課題になってきています。

＜パワーポイント資料P6＞　「助成金の活用」について、どんな助成金を活用したか。意外に多かったのが「岩手県文化振興基金」ですね。これは、震災前から民俗芸能に助成金を出していましたが、震災後は一部負担なし 100%出していくということで、基金の取り崩しをしてまで出しました。これの効果はすごく大きかったのではないかと思います。

それから「日本財団」の助成金、地道な「NPOの支援」「市民からの寄付」というのがあります。「国の助成金」がゼロというのは意外でした。

「助成金は何に活用しましたか？」ということで、「山車や道具などの保管場所の整備」「衣装の製作」「山車や太鼓・笛などの製作や購入・修繕」、こういったものは概ね日本財団や岩手県文化振興基金、その他の企業の基金が使われたと思うのですが、祭り芸能当日の運営費とか後継者育成のための経費は、恐らく NPO とか市民の寄付に頼っていたと思います。寄付によって使途も違ってくる、というふうに見てください。

質問Ⅱ「子どもたちの文化芸術体験について」

＜パワーポイント資料Ｐ７＞　これは沿岸被災地居住者のみを対象にした調査です。

「震災前と震災後に子どもたちの文化芸術体験に変化はありましたか？」という問いに対して69%、７割の方が変化があると答えています。

どういった変化かというところで「生の表現に接する機会が増えた」「震災前より選択肢が増えた」等、これは表現活動の選択肢になっています。

逆に「学校での活動がしにくくなった」とういう回答がありました。これはどういうことかというと子どもたちが住んでいる仮設住宅と学校の間をシャトルバス（スクールバス）で送り迎えをするんですが、たくさんの仮設住宅がいろんなところにあるものですから一台のバスが何回も往復し

ます。歩いて家に帰るんじゃなく、バスで帰らなければならない。そういった活動の制限が出てきました。

それから良いこととしては「都市部、他地域との交流が増え、青少年の刺激となっている」、「絵など表現に変化がみられる」、これはちょっとどちらにも言える回答かなと思います。それから「子どもはまだまだ被災のことを引きずっている」という回答がありました。

＜パワーポイント資料 P8＞ 「変化があったと答えた人に対して「その変化は今後も継続されると思いますか？」と尋ねたところ「継続する(させたい)理由」がいくつかあります。

→＜パワーポイント資料 P8 参照＞」

＜パワーポイント資料 P9＞ 「震災後の子どもの文化芸術体験について」、大人の役割や対応、支援のあり方等」について自由筆記で書いていただきました。主な意見をここに挙げております。「支援のあり方」「継続的な体験が必要。参加人数の指数より」。

よく補助金では、参加人数により「効果があった」というような評価をします。けれど、そういう評価ではないんだ。人材育成につながる支援が必要なんだ。内容で評価して欲しいっていうような希望だと思います。

→＜パワーポイント資料 P9 参照＞

実は、いわてアートサポートセンターは去年の 11 月から新しく再建になった宮古市民文化会館の指定管理を受けているんですが、宮古市役所や市民の方々に、「文化会館に何を期待するか」と尋ねると「心の復興」と言われるんですね。「心の復興のために頑張って欲しい」「子どもたちのために頑張って欲しい」ということはよく言われます。子どもたちの癒し、あるいは傷ついた心を満たしてあげられるために必要な文化芸術体験というものを充実させなければならないというふうに思います。

質問Ⅲ「文化施設・生涯学習施設のあり方について」

＜パワーポイント資料 P10 ＞ 「あなたが震災前に住んでいた地域には、よく利用していた文化会館・ホール、図書館、公民館、コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設がありましたか？」77%の方があったと答えています。「これらの施設はコミュニティ再生に役立つと思いますか？」95%の方が「役に立つ」と答えているんですね。本当に地域の方々は文化施設、生涯学習施設に大きな期待を寄せているというふうに思います。

＜パワーポイント資料 P11＞ 「文化施設等がコミュニティ再生に役立つと思う理由」についてお答えいただきました。同意見はまとめています。

→＜パワーポイント資料 P11 参照＞

「役立つと思わない理由」、これは文化施設は本来はこうあって欲しいという期待というか希望だと思います。「利用時間に制限がある」「使用時の手続きが面倒」。いろんな書類を書かなければ利用できないとか、何かそういうことなんだと思います。それから時間が決められているとか、もっと自由に使いたいという希望だと思います。

＜パワーポイント資料 P12＞ 問 2「役立つと答えた方に、これからのコミュニティ再生に必要と思う文化施設や学習施設はどんな施設と思いますか？」ということで、これはソフトのことも書いていますね。

→＜パワーポイント資料 P12 参照＞

問 3「これからの期待」、ここでも「心の復興」という言葉が出ています。「ハードとソフトの両

面に期待だが、どちらかというとソフト」。とにかく、立派な施設も必要なんだけれども、そこでいったいどんなことが行われているのか。「いつ誰が行っても気軽に相談できる指導者がある」とか「鑑賞事業と体験事業が両方行われている」とか、そういったことだと思います。

「心のケアには集まる場所（交流）が必要」「生の催物が体験できる。自ら考え行動しながら喜びや楽しみを見出すような事業の展開」「維持管理には行政だけではなく住民も責任をもつこと」。

ここでも住民の参加意識というのが出てきていますね。行政にお願いをするだけではなくて、自らも運営の主体になっていく。勿論、このことが私もコミュニティ再生の大きな力になっていくんじゃないかなと思います。

質問Ⅳ「文化振興における市民協働と NPO が果たす役割について」

＜パワーポイント資料 P13＞ これも沿岸部と内陸部を分けて記載させていただいております。

沿岸部「大いに役立っている」「役に立っている」を合わせて 50 人ですから、いずれ多いなと思います。「あまり役立っていない」「むしろ地域の文化振興には邪魔」というのが 8 人います。それから内陸部は逆に「大いに役に立っている」「役に立っている」というのが少なくなっています。沿岸被災地の方が文化振興に NPO が役割を果たしているということでしょうか。ということは、積極的に支援活動に NPO が沿岸被災地では参画しているということの証ではないかなというふうに思います。

＜パワーポイント資料 P14＞ 「文化振興における市民協働と NPO が果たす役割について」。

今、実際に被災地で活動している被災者の方が「協働しているパートナーは誰ですか？」という質問です。国が 4 、県が 7 、一番多い 22 が市町村です。その次が NPO、次が企業、民間。地域っていうのが 27 ということでやっぱり市町村とか地域とか NPO が沿岸では大きな役割を担っている。内陸部では逆に数字が少ないのですが県というのも出てきています。

＜パワーポイント資料 P15＞ 「現在、文化活動にかかる市民活動や NPO の活動に参加していますか？」沿岸被災地では 50%が「活動をしている」、30%は「興味はあるがしていない」。逆に内陸部はわずか 6%の人しか活動に参加していません。「興味はあるがしていない」というのは 41%ということでここは大きな違いになって現れています。

沿岸被災地の調査客体が、実際にいろんな活動をしている人が中心になっているので、こういうふうな数字が出てくるのは当然だろうと思いますが、内陸部の被災者の方もやはり活動に参加する機会をもっともっと増やす環境作りというのも必要になってくるのではないかと思います。

＜パワーポイント資料 P16＞ 具体的に「どんな活動をしていますか？」というので、これは沿岸部だけに聞いています。

→＜パワーポイント資料 P16 参照＞

「郷土芸能」は地域に根ざしている文化活動ですし、人形劇とか児童文学の活動というのは子どもに寄り添う活動ではないかなと思います。そういった活動を中心に、今沿岸被災地では行われているんだなと思います。

＜パワーポイント資料 P17＞「東日本大震災で、文化活動にかかる NPO、市民活動が果たした役割は何？」→＜パワーポイント資料 P17 参照＞

「行政の手のまわらないところを手助けしてもらった」等、非常に評価の高い NPO 活動ですが、山田町のような NPO の問題を生じさせたところもありますので、一概に NPO だけがいいところという評価にはなっていないというふうなことを、私たちは肝に銘じなければいけないと思います。

質問Ⅴ「文化芸術活動への助成と評価について」

＜パワーポイント資料 P18＞「あなたの参加している文化芸術活動に助成金を活用していますか？」ということで 38%が活用した。もうちょっと「活用した」というのが出ても良かったかなというふうには思います。国の助成金とか県の文化振興基金、NPO の支援をもらっているとういうのが多いですね。これは多分大きなお金ではないと思います。小さなお金ですが、非常に手の届く支援を NPO がしてるんだろうなというふうに思います。

＜パワーポイント資料 P19＞「助成金を何故活用しなかったの？」3 割の方は活用しなかったというわけですが、「助成制度を知らなかった」「情報がなかった」「書類作成をする体力がない」「活用方法がない」「民俗芸能以外は助成できないといわれた」「団体に属していないため」、こういった回答から浮かび上がってくるのは「コーディネート機能の弱さ」、それから「制度の告知とニーズのマッチング」、これもコーディネート機能に入るわけですが、私たちも中間に位置する NPO としてコーディネート機能を中心に活動してまいりましたが、もっともっとコーディネート機能の充実、それから制度を持っている人たちにもっと告知をしていただくというふうな手立てが必要ではないかと思います。

＜パワーポイント資料 P20＞「あなたの活動ニーズと助成制度はマッチングしていますか？」ということで「はい」と答えた人が 30%、「いいえ」が 20%です。

→＜パワーポイント資料 P20 参照＞

マッチングはもとより、助成制度のニーズの把握をしながら制度の改変も必要かなと思います。

＜パワーポイント資料 P21＞「どんな支援が必要ですか？」という答えをいくつか上げました。

→＜パワーポイント資料 P21 参照＞

「ひと、人材育成」で「専門の指導者」「後継者育成の研修」「指導者の育成」、その他ここでも出てくるのが「助成金申請のコーディネート」ということです。「支援内容が一覧となった団体リスト」というのは、これは助成制度をきちんと告知して欲しいということだと思います。

質問Ⅵ「地域文化・芸術について」

＜パワーポイント資料 P22＞「あなたはどんな芸術文化に興味がありますか？」左が参加したい芸術文化活動、右が鑑賞したい芸術文化活動。一番多いのは音楽、続いて演劇、次に多いのが伝統芸能。これはやはり、岩手県の大きな特色ではないかと思います。意外に少なかったのは生活文化が少なかったなあと思います。ここではお茶とかお花を言います。

＜パワーポイント資料 P23＞「あなたは今後どのような芸術文化活動に参加したいですか？」

→＜パワーポイント資料 P23 参照＞内陸避難者では、茶道や華道であるとか書道であるとか、そういった生活文化に接したいという回答が多い。逆に「どんな芸術文化を鑑賞したいか？」では、伝統芸能という回答が多いのは被災地に対する思いではないかと思います。

＜パワーポイント資料 P24＞「地域文化・芸術について」

「実際にあなたが活動する上で、何が必要だと思いますか？」という中で一番多いのがともに活動する仲間」ですね。「活動資金の助成」とか「活動場所の確保」、それから「指導者」というよりはともに活動する仲間が欲しいというのが大きなウエイトを占めています。私たちはどうしても支援をすれば、活動の場所を確保すればということを上げるんですが「仲間作り」が大きなポイントというのがこの中で分かってくるんじゃないかなと思います。

→＜パワーポイント資料 P24 参照＞

逆に「ともに鑑賞する団体・サークル」は少ない。観るのは個人でいいんだけど、やるのは仲間でやりたいという流れかなというふうに思います。

「文化復興によるこれからの 10 年について」

＜パワーポイント資料 P25 ＞ ここからはずっと自由筆記でいきますので主なお話しをしたいと思います。

→＜パワーポイント資料 P25 参照＞

暮らしが成り立つことというのが「経済くらし」では本当に切実な思いではないかなと思います。それから「地域や街づくり」においては「専門家のこまめな導入」とか「未来を担う子どもたちが活動できる基盤作り」というのが上げられています。

＜パワーポイント資料 P26＞

→＜パワーポイント資料 P26 参照＞

「無料公演の常態化は、被災地の文化振興が長期に渡って不振に陥る」無料公演が非常に多かったですね。そのことが逆に被災地の文化振興を妨げることになるんじゃないかっていうことですね。自分たちも、ある程度負担していくということも必要なんでしょう。「交流人口の増加」ということがあります。それから「子ども・若者」ではやはり「子どもたちへの文化的教育」というのが出てきます。「自分たちの活動が地域の文化であるとの自覚・コミュニティ再生の正念場が今後 10 年」。5 年で復興期間を終わるわけですが、子ども若者のためには今後 10 年が本当に正念場というふうに思っているのです。それから内陸避難者の中で「子ども若者」については、「魅力的なまちづくりで若者がその町にとどまる工夫が必要」と書いていますし「世代を超えた交流が必要」。それから「伝承、人材育成」等、次にあげている通りです。

＜パワーポイント資料 P27＞ 続いて内陸部に聞いていますが「地域格差をなくす沿岸部への予算強化」「交通の利便性」「時間がかかりすぎる」、これが非常に多かったです。

内陸に避難している方が「今後沿岸との文化交流に何が必要か？」。宮古まで 2 時間ですからね。近いとはいえ 2 時間では、東京へ行くのと同じにかかるわけですから、そういうことだと思います。

→＜パワーポイント資料 P27 参照＞「相互交流」「交流を続ける」等、本当に交流については内陸の居住者の方は厚い思いを持っているというふうに思います。

＜パワーポイント資料 P28～P32＞ 次は、沿岸被災地の方々の要望を自由筆記で尋ねました。

「アンケート結果から」

＜パワーポイント資料 P33＞ こうしたアンケート結果から見えることをちょっとまとめてみました。

→＜パワーポイント資料 P33 参照＞

今後への期待としては復興支援、住居、就労、これをまず頑張って欲しいという意見が多かったですね。それから「観光＆文化で交流人口増へ」「若者定住への魅力あるまちへ」「指導者・専門家派遣へ」「交通網の整備」。それから無料慣れした公演については自ら負担するということ。それからそのために緩和対策ですね。一気に無料から 5,000 円の入場料を払うのではなくて緩やかに払えるような体制を作っていく。それから「新しい施設や職員への期待」「資金支援の必要性」「中間 NPO への期待」そういうものが上げられています。長くなりましたが、ここで一応報告という形で終わらせていただきたいと思います。

第二部

私たちからの提言

「三陸沿岸地方の郷土芸能・祭りと東日本大震災」

東北文化財映像研究所代表　　阿部　武司

「市民参加型による文化芸術復興について」

沿岸北部担当支援コーディネーター　　小室　好司

「子どもたちによる文化復興についてー再び、宮古市を音楽の町にー」

宮古市民文化会館芸術監督　　寺崎　巖

「継続活動に必要な市民理解と NPO の覚悟、ファンドの課題」

（株）ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室　大澤　寅雄

「舞台環境の復興と舞台技術の人材育成について」

（株）アクト・ディヴァイス代表取締役　水野　美砂

「復興の『核』としての文化」

ジャーナリスト、作家　外岡　秀俊

三陸沿岸地方の郷土芸能・祭と東日本大震災

東北文化財映像研究所
代表　阿部武司

現在、三陸沿岸の郷土芸能は、一見元気です。この元気がどこから来ているのか、又元気の陰にどんな情景が有るのか、元気になれない団体は無いのか、震災後４年経っても明確な答えは有りません。そもそも郷土芸能（民俗芸能）は、地域がある程度元気でなければ成り立ってこなかった伝承文化でも有ります。

東日本大震災、巨大津波によって岩手県陸中沿岸地方は、甚大な被害を受け、郷土芸能の担い手も犠牲になり、住まいや生業を失っています。沿岸だけには限りませんが、郷土芸能は決して手厚い保護を受けてきたわけでは有りませんし、自発的な地域や個人の思いで継承されています。その意味では、個人や地域の様々な要因で浮き沈みを繰り返してきました。

津波で肉親や暮らしと生業の場を失った多くの人々が、失意のどん底にある中で郷土芸能が思わぬスピードで行われ始めた事には、どんな背景が有ったのだろうか、未だ検証段階ではないのだろうが気になる事象です。

３．１１の後、津波の悲惨な現状に途方に暮れながらも内陸に暮らしている私は、直ぐに気にかけたのは今までお付き合いした民俗芸能関係者でした。次第に連絡が取れるようになったものの芸能の復活など及びもしませんでしたが、３月下旬、東京の友人から東京地方版新聞夕刊の記事が伝えられ驚きと感慨に浸りました。

「陸前高田市の大石地区の虎舞の頭がガレキの中から見つかり、関係者が踊った」という記事でした。踊り手は「いろんなものが流されたけれど、地域の絆は残っている事を確かめたい」と述べていました。これは郷土芸能が地域のなんたるかをひと言で言い表していると思えました。

大船渡市門中組虎舞

その後直ぐに２月にお付き合いがあった大船渡市の門中組虎舞の代表が電話をよこし、「避難所も少し落ち着いたので虎舞会館に行ったら海水に浸かったものの頭や太鼓が無事だったので被災者を何時か虎舞で励ましたい。しかし個人の装束がないので揃えたい。何とかならないか」という事でした。同じような発想がほぼ同時に出たことに民俗芸能が持っている機能が垣間見えてきました。

岩手は４月になると普通なら春に沸く季節、しかし沈鬱な空気は決して晴れませんでした。しかし、郷土芸能は桜前線のように避難所で花開いていきました。陸前高田市気仙町では寺境内に避難している人達が境内で花見を計画し地元の気仙けんか太鼓や共鳴した内陸の芸能が参加しました。

共鳴は各地に広がり、不自由で不安な避難所での暮らしに潤いをもたらす郷土芸能の公演が連鎖的に行われました。大槌町の虎舞の人は後に「あの時は本当にやって良いものか迷ったし避難所の方々の反応が怖かった。観客が乗りに乗ってくれた姿を観た時、やって良かった思い踊り手がドンドン加わって気分が明るくなった」と述べていました。演じる方も見る方もそこには共有できる同じ想いが有ったからに他なりません。この様に郷土芸能は、あの悲惨な状況の中で多くの方々の心に灯火を焚かしていました。暮らしの中で生きてきた芸能であったからでしょう。

平成１１年７月１日山田町関口祭礼

平成１１年８月１７日吉里吉里まつり

３月１１日から４９日、１００日と経過する中で、自粛していた芸能も供養の儀を持って息を吹き返してきました。そして被災地支援という形の公演に沿岸各地の郷土芸能が内陸にも招聘される様になりました。中尊寺は、被災地支援のキャンペーンとして境内で沿岸の芸能公演を行うと、多くの観光客が高い関心を示したことを受け秋には連続公演を企画した程です。

一方、春に予定されていた被災地での祭礼は、式年祭も含めて中止を余儀なくされていましたが、７月上旬に山田町関口で祭が行われました。参加した郷土芸能のほとんどが被災しおり犠牲になった方々もいましたが、用具を借りたり、拾い集めた装束を修繕したりしながら意気盛んに宵宮、本祭りと住民と融合した祭を行いました。避難所から仮設住宅に移り終わると夏から秋にかけて盆行事や祭礼が執り行われて行きました。被災地の郷土芸能の県内外での活躍は、マスメディアでも頻繁に取り上げられ一般の関心も増して行きました。

２０１１年は、内外からの大きな支援が被災地に寄せられ、民俗芸能にも大型の支援が民間団体から行われる様になりました。その感謝の気持ちを芸能団体は、要請に応えて各地に出かけて行きました。しかし一方で被災地は復旧復興に忙殺される状況で、当然様様な矛盾が有ったようです。

郷土芸能には、様々な年中行事があり、住民との深い関わり合いが有りました。暮らしの節目で行われてきた行事にも芸能団体には躊躇いながらも行いました。

しかし、受け入れる側もむしろ積極的な部分も有り時間と共に各地で行われて行きました。大船渡市赤崎地区は海辺の集落は失われ仮設暮らしを余儀なくされていましたが、２０１２年元旦には獅子舞の悪魔祓いが行われました。住民からは一切お花を頂かないという鉄則で挙行しました。そこにはこの様なときだからこそ悪魔を祓って明日への希望に導こうという共通の想いがあったからです。

大船渡市赤崎中赤崎権現舞元旦悪魔祓い

黒森神楽　田老での神楽念仏

被災から２年３年と過ぎましたが、仮設暮らしはほとんど解消していませんでした。一方郷土芸能の関わる行事やイベントは各地で復活され住民の喜びにも繋がって行きました。

郷土芸能発表会のアンケートやインタビューでは「郷土芸能を観て仮設から出るまで頑張ろうと思った」「命が延びた」「久々に晴れ晴れした」など前向きの言葉が戻ってきました。仮設暮らしや遠方に居を構えて

しまい時間の経過と共にむしろふるさとが遠のいてしまっているのが現状なのではないかと思える状況です。
　被災地の方々だけではなく郷土芸能等ふるさとの香り豊かな文化は、郷愁以上の感情に訴えるものでしょう。

　東日本大震災は、多くの尊い命を奪い暮らしを奪いました。芸能には慰霊や鎮魂、供養を行う意味合いも大きいのですが、この間の民俗芸能（郷土芸能）を行っている方々を観ているとむしろ自らの魂を振るわし明日への力としている気配を感じます。

鵜住居虎舞の笛吹き

　とある虎舞の笛吹きの人は、最愛の娘さんと母親を失い死まで覚悟したと言います。
　しかし娘さんの好きだった笛を吹くことで心を落ち着かせ自らの魂を鼓舞しています。本来虎舞の笛は歓喜の笛であったが、供養の笛に変わったと述べています。被災地の人々の心が完全に癒えることは更に時間のかかることでしょう。しかし、共有していた音色やリズム、踊りなど民俗芸能の持ち得た機能が生き続ける限り、ふるさとで生きる力になるに違い有りません。

市民参加型による文化芸術復興について

沿岸北部担当文化支援コーディネーター
小室　好司

○意識調査の分析

　今回の調査に関しては、沿岸部全市町村の多方面の方々から回答を得ることができたことは大きな成果である。
　これは、被災地沿岸部の方々に、調査した団体が信頼してもよい団体だという認識を得ることができているからに違いない。
　そのような観点から見れば、調査を行った団体が一定の評価を受けたということが今回の意識調査の大きな成果の一つではないかと考えられる。
　この調査回答者の居住地の内訳をみると、被災沿岸部をくまなく網羅する形で回答を得ることができている。地域によって多様な意識の差が有る沿岸部にとって、この回答の状況は被災地全体を把握する上で効果的なものといえよう。

一方、年代的なもので見ると、回答者の２２．４%が７０代以上という数字になる。その一方２０代と３０代の回答者が全体の９．７％である。20 代で見れば、実に５．９%にしか過ぎない。この回答者の割合からすると、１０年先の被災地の文化復興についての設問については、当事者というよりは、次世代に託す思いという観点で記述した方が多いのではないかと思われる。

これらのことを踏まえて、アンケート調査の結果から導き出される結果について、現状と課題を考えてみることとする。

○意識調査から導き出される現状と課題

（1）優先される復興支援の視点

アンケートの回答を見ると、とにかくハード面の整備を望む回答が多く見受けられる。

これは、回答者の４５．２%が６０代以上であり、建設が国の成長に直結していた高度経済成長の中を暮らしてきた方々であることに由来するものであると考えられる。ハード面（建物等）を整備することができたとして、その後、それを使用する若い世代がまず優先して要望しているものであるかといえば、そのように言い切れるものではない。

現に若い世代の回答と思われるものには、集客力のあるアーチストの招聘を願うものもある。これは、同じ予算を使うのであれば、ハードではなくソフトに力点を置いた文化復興を願うものととらえられる。

陸前高田市や釜石市については、まずハードの整備が最も優先すべき課題であることは言うまでも無い。ホールのある大船渡市や久慈市、ホールが再建された宮古市では、また違う課題が優先されるべきものであるとも考えられる。

沿岸地区を一つと考えずに、その被災状況、立地条件、住民の意識等を考慮したうえで、それぞれに適合した文化復興を模索していかなければならないだろう。

また、もっと配慮すべきは、各市町村も一つのくくりとして考えてはいけないことである。例えば、宮古市は、田老地区と、宮古市中心部、そして内陸部の新里地区・川井地区と、そのいろいろな条件は大きく異なっている。その文化的な素地も違えば、被災の度合いも全く違うのである。

本来的な文化復興の支援を行うのであれば、市町村のくくりよりも更に細分化してそれぞれの地域を十分に把握し、その土地その土地に必要な文化復興の支援を検討していくべきである。

アンケートの結果を受けとめながら、その回答がどの地域のどの年代の声であるかを十分に検証したうえで施策に反映させていく必要があると思われる。

（2）助成金等による支援の功罪

助成金等による支援に対する反応も様々である。全国から寄せられた募金や助成金への感謝の気持ちも多く記述してあった。

一方、補助金等に頼ることによって、骨抜きにされて自分たちで立ち上がる地力が無くなることを危惧する声も散見した。

金銭的な支援が、全て文化支援に役立ったかといえばそうであるとは言えない。

集計したアンケートの中に『地域の祭りに、国・県・企業の助成をあてにする馬鹿がいるのか。』というものがあった。

文化復興のために、お金がかかることは勿論のことだ。津波被害で全てが無に還った地域では、金銭的な支援によりいち早く復興復旧を遂げることができたことは言うまでも無い。

しかし、金銭や物品を多量に投入することにより、支援が無ければやって行くことができない環境を作っ

てしまったのでは、地域の立場に立った支援とは言えない。

住民力を引き出し、自分たちで立ち上がることができるよう、必要な分量だけの支援をすることを考えることはとても重要なことである。

『必要なところに必要な分だけの支援を』という考えがなければ、活きるはずの人材や地域力を潰してしまうことにもなりかねない。

何より大事なことは、地域の人間が、自分たちの力で復興・復活させることであり、自分たちが成し遂げることができたという誇りと自信を持ってもらい、活動を未来につなげることではないかと考える。

そのような意味で、地域の文化を支える人材育成の視点が無いままに、お金だけを投じる支援は長期的にみて本当に支援となりえたのかを検証しなければならない。

（3）ＮＰＯの立ち位置

震災後、多くの沿岸被災地でＮＰＯの支援を受けて、住民力を取り戻し活性化した地域がある。しかし、ＮＰＯを名乗る団体にひどく心を傷つけられた人や地域も存在するということが、アンケート結果から見てもよくわかった。

『市民活動は必要だが、ＮＰＯ（特によそから来る者）は、役立たずばかりだ。単なる自己満足のために来ているだけ。』

この記述は、被災した人間の心を踏みにじるような行為を行ったＮＰＯが居たことを物語っている。

ニーズを把握して、そのニーズに合った行為をしなければ、支援は押し付けにしかならない。これは、ＮＰＯ団体で無くても、外部から支援に入るときには留意しなければならないことである。良かれと思ってしたことが、被災地の住民にとってはかえって重荷になってしまったというケースが少なからずあったことは事実である。

また、様々な状況の沿岸被災地を『被災地』とひとくくりとすべきではないことと同じように、それぞれのＮＰＯも『ＮＰＯ』とひとくくりにしないことが大切だと感じた。

被災地に寄り添った献身的な活動をしているＮＰＯもあれば、助成金が取りやすいという理由で被災地に入ったＮＰＯも無いとは言えないだろう。

それを、『ＮＰＯ』というくくりでひとまとめにしてしまわず、団体名でそれぞれの功績を評価できるようにすることが、行政やＮＰＯサイドとして重要ではないかと思われる。

○岩手が持っている可能性

岩手はコンテンツが豊富であることを、我々、岩手県民は十分理解しなければならない。神楽や虎舞等の民俗芸能など、他の地域では見られない独自の文化が多く育まれ継承されている。

この、地方の独自性を継承した優れた文化に誇りを持って全国に発信していく道筋を作ることこそが、最大の文化支援になるのではないかと思われる。

その視点から考えれば、民俗芸能と同様、岩手には市民参加型の市町村民劇場がある。市町村民劇場はある意味、現代の民俗芸能といっても過言ではない。

市町村民劇場は、それぞれ開催される市町村に置いて、有名アーチストがコンサートを開くのと同等かそれ以上の集客を毎年達成している。

この点について見れば、岩手は発信型の文化振興に力点を置くことへの素地ができていると考えても良いのではないかと思われる。

本年度、久慈市では、高校生の地元アイドルグループ『あまくらぶ』が活躍した。彼女たちのライブを見

るために、関東地区からも多くの方が毎月久慈市を訪れていた。

彼女たちが、テレビ出演や東京でのライブをこなしている姿を見て、地元の住民は、『都会に出て行かなくてもできることが有る。』と、勇気と希望を与えられていた。

発信型の文化振興は交流人口を生むだけでなく、地元の住民が地域にも自信と誇りを持つことにもつながり、その効果は計り知れない。

これは、若者中心のサブカルチャーの面での、岩手からの発信型の文化振興の成功例だと言っても過言ではないだろう。

○　今後の展望

総じて考えると、岩手への文化輸入をする視点だけではなく、岩手全県や被災地沿岸部の文化を価値づけて全国に発信していく、文化輸出を重視する視点も取り入れることで、地域住民が今まで以上に自分たちの文化に自信と誇りを持つ結果につながることが予想される。この視点での取り組みにより、豊かな文化を更に育み文化の香り高い地域として被災地を含む岩手全体の文化が今まで以上に醸成されていくのではないかと考える。

これは、岩手として今後検討していかなければならない、文化支援の重要な軸足となりえるものであると考える。

そして、この独自の文化を創造し発信できる地域になることこそが、岩手が真の意味で宮沢賢治も目指した文化立国イーハトーブに近づくことになるのではないかと思うのである。

今回の意識調査を受けて、地域住民、行政、ＮＰＯ、表現者が想いを共有して、更に一歩進んだ文化振興に取り組んでいくことになることを強く願っている。

2015年（平成27年）3月23日（月曜日）岩手日報

仮設生活リアルに

釜石市在住者や復興支援で他県から来ている社会人らで2月に結成した同市の劇団もしょこむ（小笠原景子代表）は29日、同市内で旗揚げ公演を行う。仮設住宅で暮らす姉妹が東日本大震災で亡くなった両親を思い、それぞれの苦しみを抱えながら懸命に生きる姿を描く。

釜石の劇団もしょこむ

2人芝居、29日公演

タイトルは「平行螺旋（らせん）―へいこうスパイラル―」で、久慈市在住の劇作家こむろこうじさんが脚本を担当。「被災地の現状を現地から発信したい」との思いを込めた。

姉妹が仮設住宅に入居する場面から物語が始まる。4年の歳月を描き、家族とのつながりの中に小さな幸せを探し求める。姉役を劇団代表の小笠原さん（31）＝釜石市鵜石町、妹役を本紙釜石支局の菅野結花記者（24）が演じる。

市民劇場に3回の出演経験がある小笠原さんは、震災前から市内の閉店した喫茶店や商店などを活用し、小規模な演劇ができないか模索していた。「少しでも支局を身近に感じてほしい」との思いから劇団を結成し、8人のメンバーで活動する。

演出は自身も被災した同市甲子（かっし）町の主婦小笠原梓さん（29）が担当。「ある日突然、狭くて知らない場所で暮らさなければならない状況がリアルに描かれていると思う。困難の乗り越え方は人それぞれだが、前を向き進む力を感じてほしい」と呼び掛ける。

同市平田の平田第6仮設団地内平田パークホールで。午後2時、同5時開演の2回。チケットは前売り400円、当日500円。問い合わせは小笠原代表（090・7078・5543）へ。

岩手日報
2015年３月２３日付

子どもたちによる文化復興について（再び、宮古市を音楽の町に）

宮古市民文化会館芸術監督
寺崎　巖

○すべてを愛する精神

宮古小学校の体育館のステージには乗り切らないので、仮設ステージを設置し、その上で演奏する子どもたちは約１００名。子どもたちの視線はいつも優しく私たちを導いてくれる功二先生に注がれました。そして、子どもたちの「育ちあい」が培った生徒たちの人間関係は４０年経っても色あせることはなく、その教えを受けた皆さんは、多くの地で活躍を続けているのです。

先生の教えは、「上手くなっても奢らないで・・・」「決して威張ってはいけません」、父の形見の剣道の鍔（つば）を出して、「人間丸くあれ」、「つばのように柔らかく柔軟であれ」「この白さのように潔白であれ」・・・・というもので、人生の教訓をいつも諭すように教えてくださいました。

戦争での体験で音楽によって命を救われた体験をした先生は、音楽の素晴らしさを子どもたちに伝えることをライフワークとし、子どもたちを育て続けました。

残念ながら一時期の隆盛はやがて影をひそめ、ここ２０年低調といわざるを得ない沿岸の音楽環境は、震災大津波によって更に深刻となってしまったのが現実です。

このことは、少子化や地方の過疎化などの問題や震災の影響にのみ集約されることなく検証が必要と言わざるを得ません。

そういった現状はありますが、環境如何によっては希望も見いだせない訳ではなく、震災後多くの支援によって一流演奏家の演奏に直に接する機会を得られたのも事実です。多くの子どもたちは、親や地域が疲弊する中、無意識にのうちに「我慢」し、感情を押し殺して生活してきたと言えます。だからこそ、多くのいい環境を与えていくのは私たちの責務であり、子どもたちの才能を伸ばす選択肢をたくさん提供していくべきだと思われます。

子どもたちに音楽を学ばせることはまず「大変」です。最初に楽器を揃えたり、送迎をしたり、暫くは「ギーコー・ギーコー」という雑音にも耐えなくてはなりません。しかし、コミュニケーションが苦手と言われる現代っ子には、成長に欠かせない多くのことを学ばせるとてもいい機会となるのは疑いの余地がありません。

また、技術を習得するという事は困難さが伴います。耐性が失われてきているという子どもたちにより現実的な体験活動を通してスキルを獲得して成長していくという経験は何事にも替えがたい貴重な体験となります。

○「心の復興事業」と教育プログラム

震災から４年が経過し、これまでの支援から地元の力を復活し、「心の復興事業」とともに次世代への育成プログラムが大きな課題となっています。

宮古市民文化会館の事業展開として「教育プログラム」は最大の柱と位置付け、ジュニア・アンサンブルみやこ」というジュニア育成の活動を始めます。

これまでは、初期の物質的支援に始まり、訪問して支えたり、与える支援が中心でした。これからの支援は、地域の子どもたちに活動の場を与え、才能を伸ばしていく環境を整えていくという地域密着型の活動に

転換していく必要があると思われます。

指導にあたるのは「いわてフィルハーモニー・オーケストラ」のメンバーです。いわてフィルハーモニー・オーケストラは、震災後、被災地からの支援要請に基き結成された岩手県在住のプロ奏者を中心とするオーケストラです。被災県に暮らし、二次被害も深刻に受けた音楽家が力を結集し、在京楽団の有名な演奏家の協力を得て、多くの音楽を県内に届けてきました。

私たちいわてフィルハーモニー・オーケストラは、岩手の地元楽団であり、地域での演奏活動や教育指導、そして中央や世界で活躍する演奏家との繋ぎ役も担っています。地元ならではの継続指導が可能で、しかもハイレベルなスキルを持っています。

すでに奥州ジュニアオーケストラスクールやもりおかジュニアオーケストラで成果を上げています。

○宮古の子どもたちが輝く場づくり

宮古市民文化会館での子ども音楽劇「どんぐりと山猫」（トヨタ子どもとアーティスト支援）はすでにスタートしており、参加する子供たちがみるみる成長をしていく姿が印象的です。こうして、音楽や演劇など芸術に出逢った子どもたちは、大人が考えるよりも多くの事を吸収し、急成長します。私が指導している岩手県内の弦楽を学ぶ７０名を超える子ども達は、日々進化を遂げ、数多く指導者を追い越していきます。早いお子さんでは、小学校半ばでその域に達します。子どもたちの才能は本当に驚くべきものです。今思い返してみると、出来立ての宮古市民文化会館のステージで、先生から指示されて弦楽オーケストラを指揮して感動した覚えがありますし、私の前に指揮台に立った伊藤奏子さんは、アメリカのカンザスシティ交響楽団のコンサートマスターを１０年務めた後、現在は、イギリスＢＢＣスコティッシュ交響楽団という名門の副コンサートマスターに就任しました。

奥州ジュニアオーケストラスクール

環境を整えると、必ずや第２の伊藤奏子さんとなる人材が育ってくるに違いありません。

宮古の子どもたちが輝くと、大人も元気をもらい、多くの波及効果が期待できます。国際交流もその一つです。昨年、もりおかジュニアオーケストラと奥州ジュニアオーケストラスクールの子どもたちが、さくらホールで「ウィーンフィル」のメンバーの指導を受けました。ザルツブルグでジュニアオケを指導しているというクリストフ・コンツさんの指導で、とても盛り上がり、多くの事を学び取りました。音楽に国境がなく、共演できる素晴らしさも体験できた出来事でした。

小澤征爾さんとロストロポーヴィチさんが宮古を訪れた２００５年から１０年が経ち、2015 年から再びキャラバンの活動を推進する活動を始めます。世界最高のチェリストであった故ロストロポーヴィチ氏の提唱する教育プログラム「コンサート・キャラバン」は、子どもたちに世界一流の音楽を届けるだけでなく、地元の人々と触れ合い、参加した若い音楽家を教育するという企画です。リニューアルした宮古市民文化会館を拠点に、地域の子どもたちに音楽を贈り、岩手の弦楽を学ぶ子どもたちと交流し、岩手の音楽家も育てていただくという本格的な教育プログラムを、沿岸の音楽教育の柱として位置付け、より良い環境づくりを進めていければと考えています。

継続活動に必要な市民理解とＮＰＯの覚悟、ファンドの課題

(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室
大澤　寅雄

○調査について

いわて文化支援ネットワーク事業として平成26年11月から12月に行われた「岩手県被災地に居住、または内陸避難者の文化活動についての意識調査」の結果を受けて、現状と今後の課題・展望について考察したい。

調査の対象は、岩手県沿岸部を中心とした被災地に居住しながら文化活動を実践している方々（以下、「被災地調査」、回答者84人）の対象としたアンケートと、震災前は被災地に居住していたが、震災後、内陸部に移住した方々（以下、「内陸部調査」、回答者50人）で、回答者の合計は134人なっている。調査項目は、「祭り芸能の復活と今後」、「子どもたちの文化芸術体験」、「文化施設・生涯学習施設のあり方」、「文化振興における市民協働と NPO が果たす役割」、「文化芸術活動への助成と評価」、「地域文化・芸術」、「文化復興によるこれからの10年」、以上6つの大きな項目と、さらに分岐設問による小項目や自由記述による回答を求めている。

以下、項目別の調査結果について考察を進めたい。

○祭り芸能の復活と今後

震災前に住んでいた地域に、継承されている祭りや芸能が「あった」と答えた回答者は84．3%となっている（全回答者134人のうち113人）。

祭りや芸能が「あった」と答えた回答者に、どのような震災の影響を受けたかを尋ねたところ、練習会場の被災、道

具や楽器等の流出だけでなく、祭りや芸能が行われていた地区そのものが壊滅し、活動者が死亡や行方不明となっているとの回答もあった。また、震災後に住民が離散したことで、活動の継続ができなくなっている場合も見られる。着目したいのは、震災の影響によって祭りや芸能を行う「気力がなくなった」という回答もある一方で、人員不足の中で鎮魂のために続けた」という回答があり、個人の余暇や娯楽だけではなく「鎮魂」を目的としている祭りや芸能の側面が見られる。

震災の影響を受けた祭りや芸能の活動で、国・県・企業あるいは民間の助成制度を活用したかを被災地調査で尋ねたところ、31人が「はい」と回答している。活用した助成金で最も多いものは「その他企業団体の助成金」が15人、次いで「岩手県文化振興基金」が9人、「市民の寄付」と「日本財団の助成金」は8人となっている。その活用方法としては、「山車や太鼓・笛など道具の製作や購入・修繕」が19人、「衣装の製作・購入」が16人、「山車や道具などの保管場所の整備」が7人となっている。一方、助成制度を活用しなかった回答者に理由を尋ねたところ、活動できる状況にないという回答以外に、継承する人材の不足や、助成制度を認知していなかったなどの理由が挙げられる。また、地域の祭りに、国・県・企業の助成に依存することに疑問を感じる回答も見られた。

祭りや芸能の今後の活動に必要なものを尋ねたところ、生活基盤の復興、地域コミュニティの再生、祭りや芸能を継承する人材の育成、住民の意欲の回復や理解について言及するものが多い。中でも人材の育成に関しては、学校教育で子どもたちが祭りや芸能に触れる機会を求める意見が挙げられている。

○子どもたちの文化芸術体験

被災地調査では、震災前と震災後の子どもたちの文化芸術体験に変化について伺ったところ、変化が「ある」との回答が69．0%（84人中の58人）となっている。

具体的な変化の内容や様子について尋ねると、震災後の支援によって、文化芸術の鑑賞や体験活動に触れる機会が「増えた」との意見がある一方で、鑑賞や体験の場所を失ったことや住民の転出によって機会が「減少した」という意見もあり、機会の増減に関しては回答者の認識が分かれている。ただし、「増えた」という意見は地域外部から与えられる慰問等の機会に言及しているものが多く、「減少した」という意見は地域内部で継承してきた芸能等の参加機会に言及するものが多いことから、子どもたちの文化芸術体験の量だけでなく、内容の変化が伺える。

また、子どもたちの文化芸術体験において、心の変化を指摘する意見も見られる。「震災が子どもたちの感受性にどのような変化を与えたかは真に知る由はないが、ある体験がなんらかのフィルターになっていることは間違いないと考える」、「まだまだ被災にあったことを引きずっている。ふと黙ることがある。心の底からはまだ笑顔が生まれていない」など、文化芸術体験を通して子どもたちの精神的なケアの必要性を感じている意見が見られた。

子どもたちの文化芸術体験の変化が今後も継続されると考える回答者は、「震災で悲しい思いをした子どもたちのため、大人は続けてやらなければだめと思う」といった支援の継続を訴える声や、「ハード及びコミュニティの再生、再開が軌道に乗らない限り、以前の形に戻ることは困難」といった文化芸術の環境整備の必要性、「相当長い期間、PTSDのような影響は残り続けると思うので、絵などの感情表出の際は変化が見られると思う」といった、震災による精神的な影響に中長期的に向き合う必要性についての意見もある。

○文化施設・生涯学習施設のあり方

震災前に住んでいた地域で、よく利用していた文化会館・ホール、図書館、公民館コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設が「あった」とする回答は73．4%となっている（全回答者134人のうち99人。また「震災被害により（現在は）ない」とする回答は47人となっている）。「あった」とする回答者に、利用していた文化施設の種別を複

数回答で尋ねたところ、「文化会館・ホール」が72人で最も多く、次いで「公民館・地区公民館」が49人となっている。

被災地調査で、よく利用していた文化施設が「あった」とする回答者に、そうした施設がコミュニティの再生に役立つと思うか尋ねたところ、「思う」という意見（63人）が多く、その中では「住民が集まる場所」としての文化施設を求める意見が多い。それに続いて、文化活動や生涯学習活動の場を求める意見が挙げられた。一方、コミュニティの再生に役立つと「思わない」という意見（3人）には、「『コミュニティ再生』が何をさすかによると思う」、「公民館使用時の手続きが面倒。多くの団体が使用するので時間を取るのが大変」といった意見が見られた。

内陸部調査では、震災前に住んでいた地域の施設、または現在利用している施設に対して感じていることを尋ねたところ、施設利用に消極的であることや周辺住民との関わりが希薄な状況が推察される。また、震災前に住んでいた地域に比べて恵まれた環境であることが伺える意見もある。

○文化振興における市民協働とＮＰＯが果たす役割

地域において、文化振興に NPO 活動が役立っているかどうか選択肢で尋ねたところ、「大いに役立っている」、「役に立っている」、「少しだが役に立っている」という肯定的な意見は55．2％（全回答者134人のうち74人）となっている。なお、「むしろ地域の文化振興には邪魔になっている」という回答は2人で、「その他」の回答には「プラス面、マイナス面あると思う」という意見や、「そもそもそういう NPO が存在しているのか分からない」といった認知不足などの意見が見られた。

現在、文化活動にかかる市民活動や NPO 活動に参加しているか尋ねたところ、「している」は32．8％（全回答者134人のうち44人）となっている。活動に参加を「している」回答者の活動内容は「郷土芸能」7人、「演劇」5人、「芸文協」4人、以下、多種多様な活動が続いている。一方、「興味はあるがしていない」という回答が29．1％（全回答者134人のうち39人）で、その理由として生活面の時間や経済的・精神的な余裕のない状況について言及する意見が多く、活動の認知や情報の不足を訴える意見も見られた。文化活動にかかる市民活動や NPO 活動に参加している回答者に、活動で協働するパートナーを複数回答で尋ねたところ、「地域」30人、「市町村」24人、「NPO」13人、「県」10人となっている。

東日本大震災で文化活動にかかる NPO、あるいは市民活動が果たした役割について自由に記述していただいたところ、「心の癒し、友との交流」、「元気づける。支える」といった精神的な支えとしての役割が数多くの意見となっている。また、行政とは異なる NPO や市民活動ならではの役割に言及する意見も見られる。しかし、市民活動と NPO を区別した上で、とくに地域外から訪れた NPO の活動に対して「自己満足のために来ているだけ」といった厳しい意見も見られる。

○文化芸術活動への助成と評価

被災地調査では、参加している文化芸術活動に助成金を活用したかどうかを尋ねたところ、助成金を「活用した」は38．1％（84人中の32人）となっており、活用した助成金は「NPO の支援」が13人、「その他企業団体の助成金」が9人、「岩手県文化振興基金」と「その他」が7人となっている。助成金を「活用していない」は40．5％（84人中の34人）で、その理由を「助成制度を知らなかった。情報がなかった」など、制度そのものや活用方法についての認知不足といった意見が見られる。また、「対象外だったため」、「被災地で被害がないと受けられないから」など、参加している文化芸術活動と助成金の制度との不一致を挙げる意見も少なくなかった。

活動ニーズと助成制度がマッチングしているか尋ねたところ、「はい」が29．8％（84人中の25人）、「いいえ」が20．

2%（84人中の17人）となっている。「はい」という回答者では、助成制度が備品購入面で役立った意見が多い。一方、「いいえ」という回答者は、助成制度の情報が行き届いていないことや、制度設計が活動の実態に見合っていない側面が伺える。

今後の文化芸術活動の復興に向けて、必要とする支援を自由に記述していただいたところ、多くの意見は「資金」、「場所」、「ひと・人材育成」などの意見に集約できる。その他の支援の中には、震災後、地域内外から提供される文化芸術機会が無料で提供されていた状況が続いたあと、有料を基本とする機会の提供への移行が困難となっている状況を訴える意見が見られる。また、「支援など当てにせず自立すること」といった、文化芸術活動への支援と自立のバランスを意識している声も少なくなかった。

○地域文化・芸術

今後、どのような芸術文化活動に参加したいかを尋ねたところ、「音楽」が32．1%（全回答者134人のうち43人）で最も多く、次いで「美術」20．9%（28人）、「伝統芸能」が20．1%（27人）、「生活文化」が14．9%（20人）となっている。自身の回答した芸術文化活動について、実際の活動上にこれから必要となるものを尋ねたところ、「ともに活動する仲間」が48．5%（65人）、「活動場所の確保」が33．6%（45人）、「活動資金の助成」が31．3%（42人）となっている。

今後、どのような芸術文化を鑑賞したいかを尋ねたところ、「音楽」が44．8%（60人）で最も多く、次いで「演劇」が35．1%（47人）、「伝統芸能」31．3%（42人）、「美術」26．9%（36人）となっている。自身の回答した芸術文化を実際の鑑賞する上で必要となるものを尋ねたところ、「手軽に鑑賞できる入場料」が44．0%（59人）、「適切な鑑賞会場」が39．6%（53人）、「公演や展覧会開催等にかかる情報」が32．1%（43人）、「鑑賞機会を提供する文化会館や団体」が30．6%（41人）となっている。

地域の文化・芸術環境における「芸術文化活動への参加」と「芸術文化の鑑賞」の両面についての設問だが、どちらにも必要とされているのが「場所」であると同時に、「仲間」や「情報」、さらには「経済的負担の軽減」も求められていることが分かる。

○文化復興によるこれからの10年

文化復興によるこれからの10年について自由に記述していただいたところ、被災地調査と内陸部調査に共通して、「復興」、「経済」、「地域・まちづくり」、「子ども・若者」といった観点で多くの意見が共通している。それ以外に、被災地調査では「文化」、「継承・人材育成」、「市民（住民）意識」といった観点の意見が多く、内陸部調査では「ひと・交流」という観点の意見が述べられている。

内陸部調査では、今後、内陸部と沿岸部の文化交流を構築する上での課題を尋ねたところ、「地域格差をなくす沿岸部への予算強化。職場を増やす、定住しやすい環境をつくる」といった基盤整備への意見や、「内陸部の人は現状沿岸部に行きたいとは思わないと感じるので、沿岸部は安全面やその他のアピールが必要だと思う」といった意識面の意見、「交流を続ける。内陸、沿岸で協力できることがあればお互い助け合いたい」といった交流面の意見などが挙げられた。

最後に、被災地調査では、10年先の被災地の文化復興を考える上での要望を尋ねたところ、多種多様な要望が数多く寄せられている。傾向としては、「国」や「県」に対しては、大きな視野での地域の再生や復興と、文化・芸術領域での助成制度や支援の仕組みづくりの要望が多い。「市町村」に対する要望では、施設の建設、あるいは使いやすい施設となるような改善を求める声や、より具体的な文化活動のニーズが挙げられている。「県や市町村の技術文

化協会」と「文化芸術活動支援NPOや民間団体」には、情報交換や交流、人材育成、積極的なPR活動などへの要望が多く、「地域の会社や住民」には、文化に対する理解や意識の向上、興味・関心の喚起、仲間づくりなどを求める声が多く挙げられている。

○調査結果の総括

最後に改めて、アンケート調査の結果を短く振り返りたい。

1. 祭り芸能の復活と今後について：震災によって、地域における祭りや芸能の存在意義が再確認された。震災の影響は大きく、助成金は活動の再開に少なからず役割を果たしたが、現在も、活動を継承していくための基盤整備や人材育成の必要がある。
2. 子どもたちの文化芸術体験：子どもたちの文化芸術体験は震災前と震災後で大きく変化し、地域外部から与えられる慰問等の機会の増加の一方で、地域内部で継承してきた芸能等の参加機会の減少が推察される。また、震災による子どもたちの心のケアの必要性は中長期的に向き合う必要がある。
3. 文化施設・生涯学習施設のあり方：被災地では、文化施設や生涯学習施設がコミュニティの再生に役立つものだという認識が強く、文化活動や生涯学習活動の場である以前に「住民が集う場所」としての性格を重視していることが伺える。
4. 文化振興における市民協働とNPOが果たす役割：震災後の文化振興における市民活動やNPOが果たした役割を評価する意見が過半数であり、活動分野も大きな多様である。また、市民活動やNPOが、文化振興において精神的な支えとなり、行政とは異なる市民主導の役割を果たしていたという認識が見られる。
5. 文化芸術活動への助成と評価：被災地での文化芸術活動において、助成金の活用は必ずしも多いわけではなかった。助成制度の情報が行き届いていないことや、制度設計が活動の実態に見合っていない側面が伺える。また、文化芸術活動への支援と自立のバランスを意識する意見も見られる。
6. 地域文化・芸術：地域の文化・芸術環境における「芸術文化活動への参加」と「芸術文化の鑑賞」の両面で、活動ジャンルに対するニーズは多様であるが、共通して必要とされているのは、「場所」と同時に、「仲間」、「情報」、「経済的負担の軽減」が求められている。
7. 文化復興によるこれからの10年：文化復興によるこれからの10年では、「復興」、「経済」、「地域・まちづくり」、「子ども・若者」といった観点で多くの意見が共通しており、行政だけでなく、芸術文化協会、文化芸術活動支援NPOや民間団体などに対しても、多種多様な要望が数多く寄せられている。

最後にアンケート調査の全体から伺えることは、東日本大震災から4年を経過した現在も、まだ地域の文化芸術環境の復興は遂げられていないということである。その一方で、文化芸術環境の現状課題について、改善の手立てが具体化されながら、行政への一方的な要求だけでなく、自らの役割についても自覚が深まっているようにも見受けられる。

そこで今後の担い手の核となるのは、文化芸術活動支援NPOだろう。なぜなら、行政による文化施策と一般市民との間を仲介するとともに、地域外部とのネットワークを活用しながら、多種多様な活動分野の団体の関係を広い視野で調整できることが、NPOという立場の意義でもある。ただし現時点では、NPOがその役割を担うための経済的基盤が整っているわけではない。そのため、今後は官民が一体となって地域文化の支援を目的としたファンドを整備することが求められる。それと同時にNPOには、文化芸術活動に対する公共的な支援を、持続的に行い続けていく「覚悟」が求められている。

そして今回の調査結果で、多くの回答者が各設問で、地域文化に対する「市民の理解」や共感を求めていることがアンケート調査の結果からも明らかである。大震災以降の地域における文化芸術活動を継続していくためには、何よりも市民の理解こそが必要となっているのである。震災前と震災後で最も変化したことは、その点に尽きると言っても過言ではないだろう。

舞台環境の復興と舞台技術の人材育成について

（株）アクトディヴァイス代表取締役
水野美砂

文化芸術や文化施設に関わる仕事をしている者の視点より述べさせて頂きます。
「ハコモノ」といわれ必要性を問題視されていた文化施設の多くが、東日本大震災で被災しました。その中には、取り壊し、復旧工事のため長期休館、避難所として使用したために復旧工事を延期し、しばらく閉館をした施設がありました。震災から４年が経ちますが、いまだ取り壊しになった施設は建て直しにはなっておりませんが、自治体と市民とが意見交換を行ないながら、確実に再建に向かっていると思います。

一方、市民の方々は、自身の心の余裕を取り戻すため、他の人の心に余裕を提供するため、また自身の心の空白を埋めるためにと、震災後まもなくから芸術鑑賞をしていたと思いますが、徐々に鑑賞からワークショップ、発表活動へと目的は同じでも方法は変わってきていると思われます。

文化芸術はどんな場所でも出来ると考え、代替施設を求めそこで練習をし、発表をしていると思いますが、今出来る最大の成果を披露するためにと、がんばっている方たちには相応の場所が必要になっていっているのではないでしょうか。鑑賞や発表するために必要な舞台環境には、ただ鑑賞や発表をするための会場のみならず、練習の場所も必要となります。練習をする場所を含めた、文化施設の早期の復興を望みます。

ですが、まだ生活に滞りがある状態で、一分野の復興に多額の資財を投じなければいけないことは大変な事だとを理解しながら、市民の皆さんは待っているのではないでしょうか。そこで、その時間を活用し、今後どのような施設運営をしてゆくのか、建て直しをする施設に対しては、次世代のためにどのような施設が必要かを自治体と市民で考えていってほしいです。自分の地域の施設が一番と思うには、客席数が多いことや総工費が大きいことではなく、常に住民が集い発表や鑑賞を行い、文化芸術の拠点であり殿堂であると住民自身が誇れる施設ではないでしょうか。大きすぎるコンセプトを打ち出し、内容がぼやけてしまい、市民の活用が年々落ち込んでしまっては、とても残念です。是非、自治体が先導して市民と目的を達成できる意見を出し合いすばらしい施設にしていただければと思います。

復旧工事をする施設は、ハード面が変わるわけではありませんが、これを機会に、ソフトの面が市民の目線に応じた施設運営されることによって、震災以前より市民が利用しやすい文化施設は出来ると思いますし、一管理者だけで運営をするのではなく、市民を巻き込んでいく方法を期待したいことです。そのためには芸術文化に携わっている方々だけではなく、鑑賞に行く方々も運営に参加していただきたいです。

意識調査の結果には、開館時間の拡大や使用料金減額など今後も文化施設を利用するに当っての意見がありました。多様化した市民の生活を見据えた今後の運営をしなければならないと考えさせられました。維持管理費の大半を税金で賄わなければいけない現状をふまえて、臨機応変な対応することで、受益負担を理解していただき、より利用しやすい施設になっていかなければなりません。

文化芸術の舞台環境を考えたとき、指導者、後継者、観客という人の減少の問題もあります。居住地に指導者がいない、観客がすくないとなれば、宿泊や交通の手段を整わせて人の移動を考慮しなければなりません。そして、芸術文化の発表会を開催することによって観客していた方々が感動して、憧れることによって後継者となる道があると思います。そのためにも多方面の舞台環境の整備をお願いいたします。

私は、文化芸術は特別なことではなく、ごく普通に生活の中に取り組まれているものだと思います。ですから、舞台環境の不十分さとは生活環境の不十分と同等だと考えます。復興を考えるとき、切り離さずに考えてほしいです。そしてコミュニティーの舞台環境の復興を考えたとき、市民の手で継続できるよう、人、物資、資金と時間を自治体の側面支援、外部からの後方支援を望みます。

自治体、コミュニティー双方向から考える事によって、より良い舞台環境の早期復興に繋がるのでないかと思います。

次に、舞台技術の人材育成について、述べさせていただきます。

東日本大震災は舞台技術職員にとって、予想外の行動が必要になったと思います。どこの施設でも防災訓練は行なっております。がしかし、大多数の施設では、貸し出しを行なわない、休館日に訓練を行っていると思います。

災害は、３６５日２４時間いつでも起こりうるわけですが、職員も再確認をしながらの訓練ですから、利用者の方々を交えての訓練は大変だと思います。また、訓練は観客がホール内にいるという想定で行なう、避難誘導が多いと思います。

しかし、２０１１年3月１１日は金曜日でした。一般的には年度末が近づいており、文化芸術の催物が最盛期という時期ではありませんが、春休みの期間や週末ですので催物の準備や保守点検、市民創作劇の稽古とう利用が多い日でした。

ホール内に観客や職員が集まっている大きな集団状態とは違い、各々がそれぞれの行動をとっている時間帯であったため、利用者の安全確保、安否確認、避難誘導等順序だてた行動とは行きません。

如何にして、臨機応変な行動が必要かと思い知らされた状況でした。そして今回の震災で経験したことは公の施設には避難者が来ると言うことです。避難所指定になっていなくても、まずは公の施設が安心であるという、市民の意識からだと思われます。

文化施設の職員でありながら、避難所の職員としてどのような行動をとるべきかも、育成の内容に加えて行く必要があります。現在、文化施設の運営方法に指定管理者制度を採用している自治体が多くあります。そのほとんどが、３年から５年という期間契約を結んでおります。おのずとして、その施設に関わる技術者も期間契約を結んでおりますが、なかには指定管理者は自治体と多年度契約を結んでいても、その

中で働く職員や業者とは単年度契約を採用しているところもあります。人間が何かをなしえるために学び成長するには時間が必要ですので、是非、長期にわたる指定管理者契約及び職員の長期契約が出来る環境の検討をお願いいたします。そして今後、施設を熟知した職員によって市民へ、より安全性の高い施設を提供して頂きたいと思います。

復興の「核」としての文化

ジャーナリスト、作家
外岡　秀俊

「３・１１文化復興フォーラム」に参加して、確信したことがひとつある。

大きな災害からの復興の「核」は「コミュニティ」であり、その修復と再生には「文化」が大きな役割果たす。一言でいえば、復興の「核」となるのは、「文化」にほかならない、ということだった。

今回の集いは、今年二十周年を迎えた阪神・淡路大震災（以下、阪神と略）を参照軸として、岩手の今後の復興に、「文化」がどのような役割を果たし得るかを探るのがテーマだった。いいかえれば、長い時間軸で将来を展望したとき、どのような「文化」が、復興に貢献できるのかを探るのが議題だったといえる。

阪神と東日本の違い

このテーマを考えるうえで、まず阪神と東日本大震災の違いを踏まえることが大切だろう、と私は感じてきた。１９９５年1月１７日に起きた阪神大震災は、戦後最大規模の直下型地震だった。震災初日から一年余にわたって現場を取材してみて、その復旧・復興の過程は、今後に起きる大災害に、大きな教訓を残すだろうと思えた。

その一方、今回の東日本大震災を取材してみて、阪神での体験の延長線上に今後の復興モデルを構築することは、間違いとは言わずとも、ミスリーディングになるだろうと感じてきた。条件や環境が、あまりに違いすぎるからだ。戦後最悪の犠牲者を伴ったとはいえ、阪神大震災の被害は、東西２０数キロの「震災の帯」に集中していた。それだけ被害は狭い範囲に集中し、激甚だったともいえる。他方、東日本大震災の被災地は、南北５００キロ以上の距離に広がっている。

第二の違いは、被害のありようだ。三連休後の未明に起きた阪神では、ほとんどの人が自宅や下宿、寮などで寝ており、犠牲者のほとんどは、倒壊家屋による圧死で亡くなった。一方の東日本は、平日の午後に起き、家族のほとんどが別の場所にいて、互いに連絡を取る暇もなく、津波に巻き込まれた。４年たっても、行方不明者が２５８４人を数える大災害は、戦後の日本でも稀である。その喪失感はかつてなく深く、ご家族や知人はいまだに、行方不明者を死者として悼むことにすらためらいを覚えるほど、あきらめきれない思いにとらわれている。つまり東日本では、阪神にはなかった課題、「行方不明者とどう向き合えばいいのか」

という問いかけを、内に抱えている。

第三の違いは、時代環境にある。阪神大震災が起きた１９９５年は、バブルが崩壊したあととはいえ、日本経済や社会にまだ余力があった。２０１１年に東日本大震災が起きるまで、あいだに横たわる１６年は、「失われた２０年」に、ほぼ重なっている。とりわけ被災前から、仙台市を除く東北の沿岸部では、少子高齢化や過疎化、医療施設網の弱体化が進んでいた。

阪神の場合には、「都市部の防災強化」と、「被災前の人口・経済水準の回復」という単純だが、明快な目標があった。神戸の都市開発計画や神戸空港の設置などをめぐって、市当局と住民は鋭く対立したが、それは「豊かな社会への復帰」に至るプロセスや手法をめぐる対立であり、「豊かな社会の再建」という目標に、意見の違いはなかった。

東日本の場合、「被災前の人口・経済の水準回復」は、被災前の少子高齢化や過疎化の容認につながってしまう。しかも沿岸３９市町村ではすでに人口が９万２千人も減少しており、その目標すら、実現するまでには多くの困難があると予想される。

阪神からの教訓

こうした大きな違いがあるとはいえ、阪神での体験は、その後現在に至るまで、多くの教訓を残している。その第一の教訓は、復旧・復興にあたっては、「コミュニティ」をどう維持していくのかが、最大のテーマになる、ということだったろう。残念なことに阪神は、ひとつの失敗例として、あるいは反面教師としてしか、この教訓を残せなかった。

多くの大災害と同じく、阪神でも、被災直後は避難所に「災害ユートピア」といえる共同体が出現した。生死を分かつ大災害を経た人々は、ただ救われたことに感謝し、互いを労わりあい、少ない食料や水、支援物資を分かち合った。外国メディアが驚嘆のまなざしで報じたように、被災した人々は整然と集団生活を維持し、諍いやトラブルもきわめて少なかった。

しかし、避難所から仮設住宅に移り住むころから、この共同体に亀裂が生まれた。抽選で機械的に移り住む仮設を割り振られたため、小学校や中学校区の地域の結びつきを基盤にしたコミュニティは寸断された。同じように被災したように見えても、各世帯、各人によって、失われたもの、残されたものには差がある。大切な人を失った人、家屋が残った人、家も職場も失い二重ローンを抱えた人。同じ災害を経験したという共有体験よりも、隣人との差異が前面に出て、なかなか本音で語り合うことがない。

それでも、多くのＮＰＯやボランティア団体が仮設のコミュニティを支え、その人間関係の再構築に全力を尽くした。

せっかくできた新しいコミュニティは、仮設住宅の統廃合によって再び崩され、復興住宅への移転で消滅の危機を迎える。自立できる人から自宅再建や移転に向かったため、残された高齢者の多くは、それまで気安く互の家に出入りしていた下町の環境から切り離され、高層住宅の密室で孤立してしまう。

そこでの最大の問題は孤独死だ。そう書けば、少子高齢化が進む日本のどの地域でも、孤独死はある、と反論する人もいるかもしれない。しかし、被災地での「孤独死」の意味は違うと思う。それは、何度も芽生えた震災後の「コミュニティ」を、そのつど、積み木の家のように崩され、立て続けに人間関係を奪われたあげくの「孤独」の象徴なのだ。

昨年９月に亡くなった「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」の黒田裕子理事長は、仮設住宅から復興住宅に至るまで、長い道のりでそのつどコミュニティからはじき出され、孤立する被災者に寄り添い続けた。「孤独死」を防ぐことより、被災者が孤独にとらわれ、生きる気力と体力を枯らせてしまうことを、何よりも気遣い、心身の極みまで、人々を支援することを自らに課した人だったと思う。ここでの阪神は、「反面教師」どころか、今後のすべての大災害における「希望」であり、指針なのだと思う。

「まつり」と歌碑

阪神との比較でいうと、東日本大震災の復旧・復興の過程で、文化が果たす役割は格段と大きくなる、と私は思う。

第一に、高台移転や移住によって、かつての町並みは大きく変わり、「ふるさと」の景観は一変する。都会の専門家が手がけた都市計画は、首都圏郊外の暮らしをモデルにした青写真のようにも見える。わずかの土地で野菜を育て、海の幸を得ながら暮らしを支えてきた人々には、よそゆきの町に思えるのではないだろうか。こうしたときに、コミュニティの持続性を支えるのは、文化をおいて他にない。

たとえば、三陸沿岸で長い伝統を誇る地域の「まつり」が、その核になるだろう。今回の集いを前に、私は大槌町で、「臼澤鹿子踊保存会」の会長を務める東梅英夫さんにお話をうかがった。

保存会の活動の場である「伝承館」は、ふだんからまつりに備えて百数十人が集い、技を伝承する空間として使われてきた。避難所には指定されていなかったが、震災後は自然と、被災した人々が駆け込む場となり、炊き出しをして地域の人々に食事を届けるようになった。

津波被害の実態が明らかになったころ、「せっかく伝承館で暮らしているのだから、伝統の鹿子踊りを見てもらってはどうか」という声が出た。しかし、まだ行方不明のご家族も多かった。自然と「自粛」の雰囲気が広がって、その話は立ち消えになった。さらに暮らしが落ち着いたころ、慰問で訪れたお笑い芸人の話芸に、人々が久しぶりに笑い、気持ちをのびのびとさせるのを見た。いまなら、伝統芸を披露しても、受け入れてもらえるかもしれない。

鹿子踊りを披露したとき、東梅さんらは、みんなの反応の深さに、衝撃を受けたという。みんな、泣き笑いをしていた。

「この四百年、飢饉もあれば、冷害もあったろう。そんなときにでも、先祖はこの踊りで苦難に耐え、伝統を守り伝えようとしてきた。ふだんは、何の役にも立たないが、こんな大災害にあったときに、私たちを支えてくれるものが郷土芸能であると気づきました」

東梅会長は震災後、大槌にある他の鹿子踊りの四つの保存会と語らって、通称ドロノキ（ヤマナラシ）を植林するプロジェクトを始めた。踊りに欠かせない「カンナガラ」という削り木片を取り出すためには、一本のドロノキがあればいい。

しかし、節のないその最良の一本が育つためには、二、三十本の群落が必要になるという。祖先から伝わる郷土芸能を、この先何百年も続けていくためには、今から、毎年植林を続けることが大切だ。

たぶん、伝統芸能を続けるだけでなく、この植林のプロジェクトそのものが、地域のコミュニティを支え、若い世代に「ふるさと」を伝える「核」になるのではないか。東梅さんの話をうかがって。私はそう感じた。

もうひとつの事例は、私が陸前高田で取材した石川啄木の歌碑だった。

ちょうど一作年の１１月のことになる。陸前高田の仮設の追悼施設の脇に、三度目になる啄木の歌碑が建立された。

「頬につたふ　なみだのごはず　一握の砂を示しし人を忘れず」

歌集「一握の砂」から取ったこの歌は、以前に二度建立された歌とは違う。１９５７年に建立され、チリ地震津波で流されたために１９６１年に再建立された歌碑は、次の歌を取っていた。

「いのちなき　砂のかなしさよ　さらさらと　握れば指のあひだより落つ」

関係者は、今回の東日本大震災のあとで、「いのちなき」「かなしさ」を刻むことはふさわしくない、と考えた。それよりも、「忘れず」という気持ちを打ち出した歌のほうが、追悼と祈念にふさわしいと感じたという。

どんなに流されても、失われても、再び碑を建てる。そこには、歴史を刻む記念碑や歌碑を主軸として、何度もコミュニティを再建し、復興してきた先祖の知恵が流れており、碑を再建するという行為そのものに、コミュニティ再興の兆しが芽生えているのだと思う。

インフラ再建が先行し、その速度についていけないという心のギャップが生まれるとき、私たちは文化がもつ潜在力を、「再発見」することになるだろう。

タイムス　2015年（平成27年）3月17日　（火曜日）

文化芸術から考える

盛岡で復興フォーラム　意識調査報告や討議

3・11文化復興によるこれからの10年について考えたパネル討論

東日本大震災から4年、阪神淡路大震災から20年が経過した。文化芸術活動の面から復興を考えようという「3・11文化復興フォーラム」が11日、盛岡市鉈屋町のもりおか町家物語館浜藤ホールで開かれた。

NPO法人いわてアートサポートセンター（坂田裕一理事長）が沿岸被災者や内陸避難者に対して実施した、文化芸術活動に関する市民意識調査の結果を報告。坂田理事長の司会でジャーナリスト・作家の外岡秀俊さん、いわてフィルハーモニー・オーケストラ代表の寺崎巌さん、元神戸アートビレッジセンター職員で宮古市民文化会館チーフプロデューサーの福島史子さん、元民放アナウンサーで県立大で震災復興学を研究する坂口奈央さんがパネル討論した。

アンケートは被災地に暮らす文化活動や地域活動の関係者、内陸に避難している被災市民ら約400人に送付。沿岸被災地5市4町3村の84人と盛岡市に住む内陸避難者50人が回答した。

沿岸被災地の子どもたちの文化芸術体験について69％が震災後に「変化があった」と回答。復興支援公演など「生の表現に接する機会が増えた」と前向きな意見がある一方、仮設住宅からの移動に時間がかかり「学校での活動がしにくくなった」とマイナス面の指摘もある。

見る機会だけでなく、やりたい子どもたちが一歩踏み込める環境づくりや芸術文化に接する機会が継続するシステムの構築を求める声もあった。

半数以上の人が文化振興にNPO活動は「役立っている」と評価。ただ、NPOの自己満足的な活動への不満や「無料公演」の常態化は被災地の文化振興をかえって遅らせるとの指摘もある。

また、文化芸術活動への助成制度について「情報がなく活用していない」、「申請書類を作成する体力がない」といった声があり、被災地のニーズと支援団体、支援制度とをマッチングするコーディネート機能の強化の必要性がうかがえた。

阪神淡路大震災、東日本大震災の被災地を取材した外岡さんは「災害でつらい思いをしても、そこから立ち上がるストーリーを紡げた人は、心的外傷後ストレス（PTSD）を発症しにくいとも聞く。そのストーリーづくりに文化芸術の果たす役割があるのではないか」と提言。内陸と沿岸の意識格差は今後さらに広がる可能性があるとし「そのすき間を埋められるのが文化だ」と語った。

祭りや郷土芸能が地域の誇りを再確認する大きな力になっていることにも触れ「地域に文化資産はある。縮小を迫られている部分をどう支えていくかが問われる」と述べた。

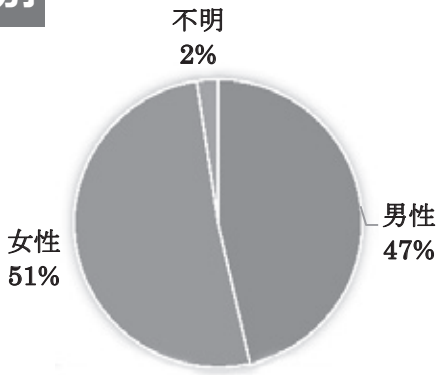
盛岡タイムス
2015年3月17日付

参考資料

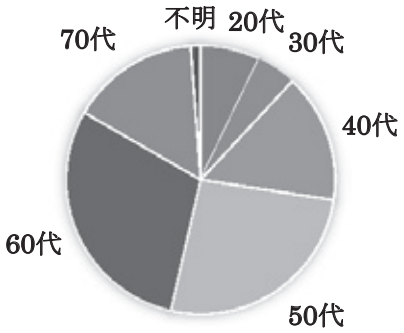
岩手県被災地に居住し文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査

回答数　84 人/配布 320 人（回収率 26%）

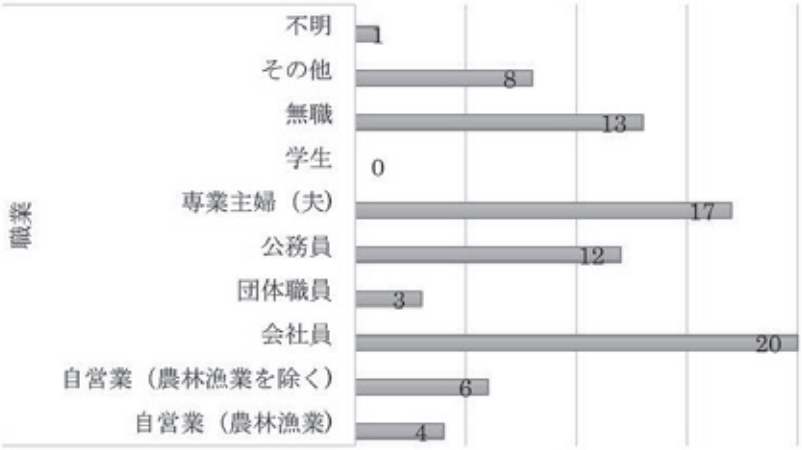
性別



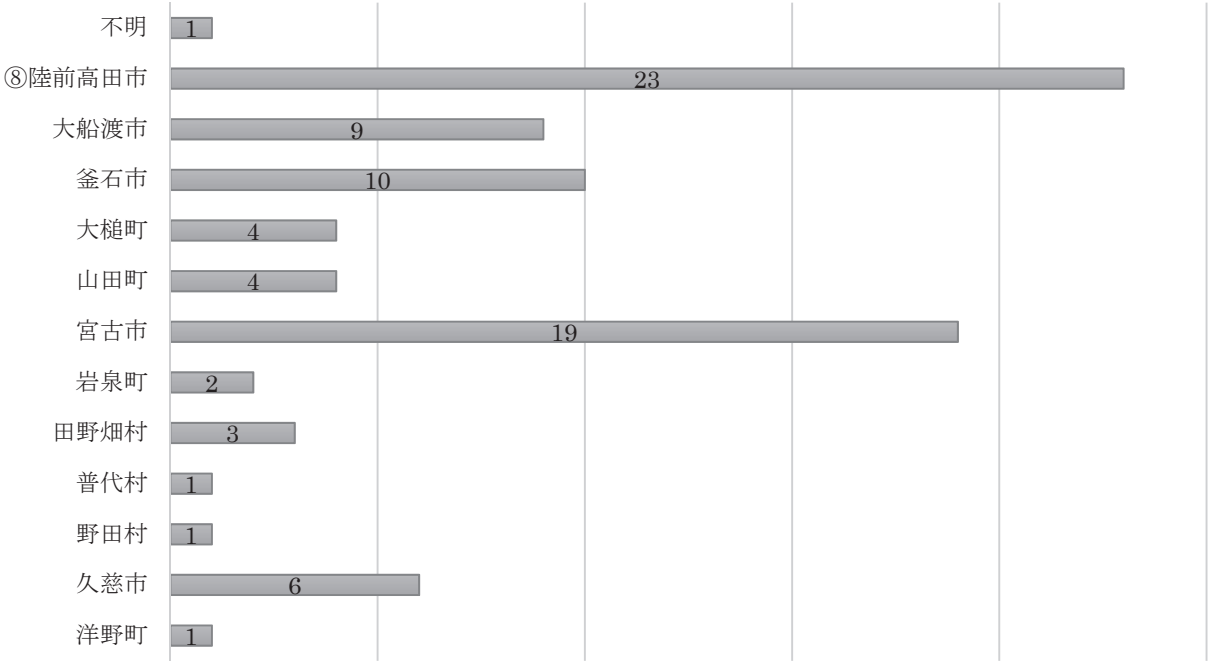
年齢



職業

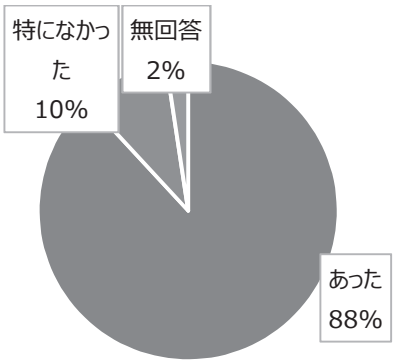


回答者居住地



質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

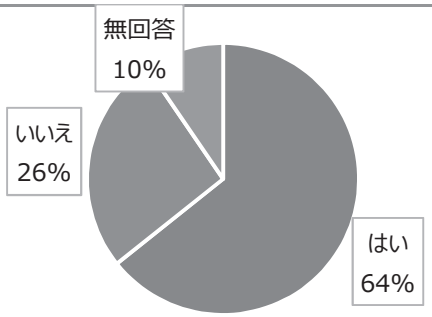
震災後、民俗芸能や祭りが被災地の心の復興に大きな役割を果たしてきたことは言うまでもありません。それは、コミュニティ再生の願いであると共に、死者への鎮魂、祈りでもあります。そこで、被災地の町利芸能の復活と今後についてお尋ねします。



問１．あなたが震災前に住んでいた地域には、継承されている祭り芸能がありましたか？

＜それは、どのような祭りですか？＞

洋野町	この地域について範囲がどこを指すのか分からないので回答しようが無いが、旧種市町には３団体あった
普代村	鵜鳥神楽、ふだいまつり
久慈市	久慈秋まつり…２人、小袖大漁唄い込み、ガタコンまつり
野田村	野田観光まつり
岩泉町	中野七頭舞、岩泉裸踊り
宮古市	熊野神社祭典(鍬ケ崎地区)、沖上げ、黒森神楽…3人、横山八幡宮…2人、みやこ夏祭り・秋祭り
	七ツ踊り、法の脇鹿踊り、津軽石さんさ踊り、田代剣舞
山田町	神楽、みこし、剣舞、虎舞、山田祭り、山田八幡宮例大祭、大杉神社例大祭
田野畑村	大宮神社みなとまつり…２人、大宮神社、菅窪鹿踊保存会
釜石市	箱崎虎舞、鵜住居虎舞、壽松院年行司支配太神楽、しし踊り、小川しし踊り、釜石祭り…2人、釜石ヨイサ
大槌町	虎舞、臼澤鹿子踊保存会、金澤神楽
大船渡市	上三区権現様、門中組虎舞、鹿踊り、権現様、赤沢鎧剣舞、虎舞、五年祭、台町道中ばやし、台町八櫛(神社五年祭)
陸前高田市	月山神社四年祭(福伏相撲甚句、要谷タルッコ踊り、湊七福神、二日市虎舞、上長部行列)
	うごく七夕…7人、けんか七夕…4人、全国太鼓フェスティバル…2人、権現様、虎舞、上三区権現様
	五年祭、あんどん七夕山車、七夕祭り、獅子舞…2人、黒崎神社5年祭、根岬はしご虎舞…2人
	八幡神社五年祭等…2人、4年に一度の祭り…2人



問２．＜問1であったと答えた方へ＞その祭り芸能は、震災の影響を受けましたか？

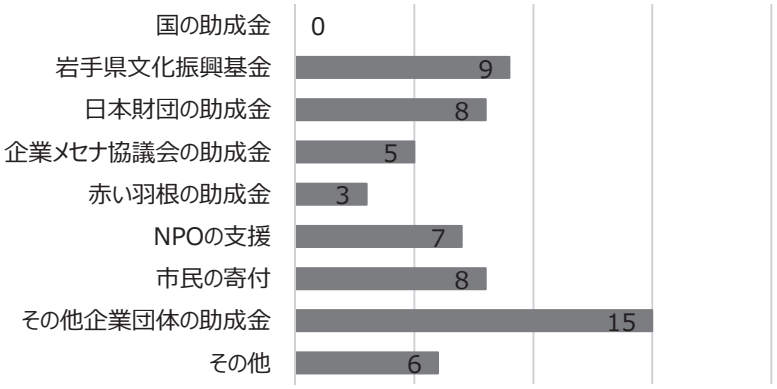
＜それは、どのような影響ですか？＞

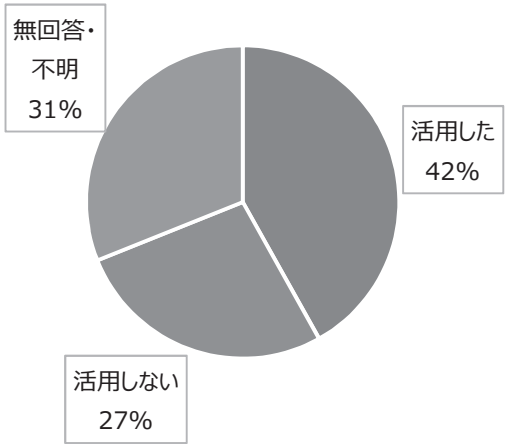
久慈市	1)久慈市小袖地区において「海女フェスティバル」があったが津波で中止。その後テレビ「あまちゃん」で復活した
野田村	2)このお祭りは愛宕神社のお祭りで、従来毎年3台の山車が練り歩くが、震災の影響で2台が失われ1台の山車で名称も「復興祭り」と改名して行われた
岩泉町	3)練習・講習会場として使用していた小学校・中学校の被災
宮古市	4)祭りに使用する社人こう中の衣装(白張など)が流出。それ以上に街が無くなり住人がいなくなった。すなわち神社を支える方々がいなくなってしまった
	5)踊り道具の流出(船、かい、網)
	6)衣裳から道具全部をなくした。また法の脇地区も住めなくなり踊り手たちもバラバラになり現在は活動していない
	7)巡業先が被災したこと(神楽宿を失ったこと)
	8)みやこ秋まつり、パレードコースの変更。参加団体の減少
	9)文化会館の建物が壊れたため、いろいろな場所を探して借りたため

山田町	10)津波で全部流された
	11)津波に流されたり、地域全体で2年程度はお祭りを控えていた
	12)参加者が減少した。神輿の巡幸ルートの大半が被災した。随行する郷土芸能団体が用具等を流出した
	13)継承するために中心になって活動してきた方がたくさん亡くなった
田野畑村	14)伝承活動の地域の半分以上が津波の被害にあったが、影響はなかったと思われる
	15)保存会員が保存していた衣装が車ごと流失した。会員の人的被害はなし
	16)参加人口の減少
釜石市	17)虎舞の虎頭や櫓が壊れた。練習場所が津波で流された
	18)鵜住居虎舞を継承する団体、鵜住居青年会の居所が津波で流失。全ての道具類、最も重要な頭を失った
	19)震災後１年は中止だったが、２年後から復活した(祭りは復興の柱になる)
	20)釜石市民文化会館が震災で使えなくなったので、現在はシープラザのテント使用して開催している
	21)神社に津波の影響はなかったものの、町がなくなり、郷土芸能の担い手の多くが町を離れてしまった
	22)獅子頭２頭、装束総て、太鼓４組、集会所流出他祭り道具や山車飾りなど。残った物、獅子頭４頭、山車のみ
大槌町	23)活動拠点となる会館、山車、太鼓、虎頭、衣裳の流出。会員の死亡。被災
	24)会員の10人ほどが家屋全流失。１名行方不明
	25)道具や衣裳を流された
大船渡市	26)虎舞伝承館に１．５ｍの津波が来て建物に被害があった。シャッター、玄関、サッシ、テレビ、冷蔵庫、建具(ドア)半纏、着物(祭り用)流失
	27)踊り手の子どもたちの中に被災者がおり、人員不足の中で鎮魂のために続けた
	28)五年祭は市内の盛町、大船渡町、末崎町など、町内毎に行われるが今回の震災で大きな被害を受けた大船渡町、末崎町、赤崎町などでは、祭りを披露する場所(商店街、街並そのもの)が流出し、なくなった。公民館などの練習場所がなくなった。山車(屋台)や装束衣裳、笛太鼓などが流出した。町内会そのものが解散したなど、多大な影響を受けた
	29)大船渡市赤崎町の上三区(佐野、澤田、赤碕中井)地域は、大船渡湾奥に位置し、東日本大震災では、平地を中心に津波の浸水被害を受け、地域公民館に保管していた地元郷土芸能「権現様、太鼓、才坊振りの衣装や扇子などの小物） が海水泥水を被り、すっかり汚れてしまうと共に、太鼓の張替えを余儀なくされた。東日本大震災の2カ月後(平成23年5月の連休期間中)に赤崎町五年祭(4年ごとに開催)が行われる予定であったが、祭典実行委員会は中止せざるを得ず、権現様の伝承活動が実質8年間行われないことになった。伝承が途絶えることを危惧して地域の有志で話し合い、地域から会員を募り、平成24年10月5日に「上三区権現様保存会」を設立して、春と秋の2回、各2週間の伝承のための練習を設けて保存に努めている。なお、今年から正月の悪魔祓いで子どもたちの練習にもきちんと伝承としての活動を行い、指導している
陸前高田市	30)山車の流出。町内中心部による規模や期間の短縮で山車を引き歩く場が減少。人口の流出…同4人
	31)震災の年が5年祭だったために中止となった
	32)部落の壊滅的被害により殆どの伝承のための道具がなくなった
	33)祭りに使用する一式が流失。屋台、車、かじ棒、機材…同４人
	34)人の命が最大の損失。備品、製作場所、殆どの物が流失、やりたい気持ちだけは持ち続けている
	35)開催できない
	36)従来のような盛大な祭りではなく神社で有志が拝むだけの形
	37)地区の消失、住民の分散。生活が変わり参加しなかった…同2人
	38)主要のメンバーが亡くなった。会場がなくなった
	39)被災された方たちのことを考えて神社の祭り事を自粛しているように思われる。また実行委員の方たちが高齢となり若い人が少ないため、祭りの盛り上がりに欠ける面もあるようだ
	40)以前は12あった祭り組のうち10団体が被災した。塩水につかり使用出来ない。山車、太鼓が多数ある。又ほとんどが流失した。無傷は２団体

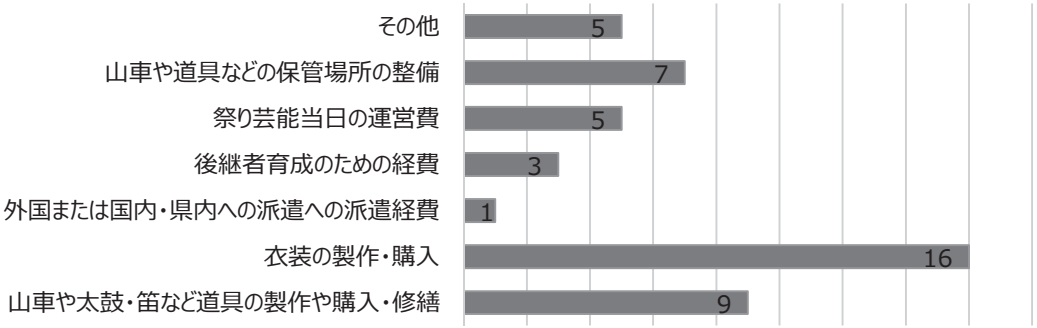
問３.＜問2ではいと答えた方のみ＞国・県・企業あるいは民間の助成制度を何か活用しましたか？（複数回答有）

●活用した助成金の種類





●助成金は何に活用しましたか？



＜活用しないと答えた方へ＞活用しない理由はなんですか？

1)地域の祭りに、国・県・企業の助成をあてにする馬鹿がいるのか
2)四年祭は来年だが部落が解散したところもあるためどのようになるか分からない状態
3)継承する若者が不足、指導する人の高齢化
4)上に立つ方が他地域に住んでいてリーダーになる方が少ない。他はやりたいのだが地区も無くなり、人もまとまらない
5)開催できる状況にない(地域崩壊、場所がない)
6)制度を知らなかった
7)自分のことで精一杯
8)よく分からないが地元の個々の寄付等で開催されてきたと思われる
9)①約200世帯中100世帯が全壊・流失し道具保管庫や公民館も流失。こちらの再建もままならない中での祭り参加はいかがなものかという風潮がある。②扱いとしてはあくまで「加茂神社式年大祭の全興の部」であり、正確には郷土芸能と呼べるかどうかといった遠慮でもあり助成申請しない
10)支援を受けたかどうか分からない
11)実行委員でないので実際のところはわからない。五年祭そのものでは国、県などの補助をもらっていなくても地域に伝わる郷土芸能は個別に様々な支援をもらっている話題は新聞等で見かける
12)津波で装束などが消失したわけではないため、海水の泥で汚れたものを洗い乾かして、再利用できると判断したことによる。しかし、一度海水に長く浸かった装束などは、ぼろぼろになりやすく、次の五年祭に向けて新調しなければならない状態となっている
13)よくわからないが祭り参加には企業・団体が独自に予算・財政措置をしていると思う
14)助成制度は活用しない。私の立場は場所を借りる人ではなく、その舞台に立って発表する一般人だから

問４. 祭り芸能の今後の活動に必要なものは何だと思いますか？（自由筆記）

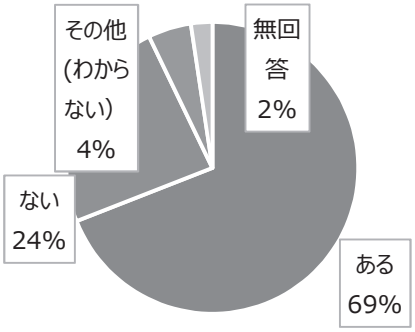
復興・暮らし	1)地域の再生、復興しなければ人口が減少し、活動する人も見る人もいなくなる

復興・暮らし	2)地域の再生、場所があること…同２人
	3)高台の造成もまだまだの状態では祭りどころではないと思うが、ばらばらになった心をひとつにまとめるのはお祭が一番だと思っている。今の生活の状態では県・市の大きな助けがないと長部の現状では何も出来ないと思っている。長部にはまとまるものがまだ何もないと思っている
	4)市民の定住と後継者の育成。文化施設の充実(安定させた生活が戻らなければ単発のお祭り騒ぎで終わる)…同3人
	5)そこで子どもを生み育て、暮らしを継続し、そばに寄り添うのが郷土芸能であり、あえて言えばそうした人々の暮らしの営み全てが必要であり、何か部分的なモノやカネの支援ではない
地域・まちづくり	6)〔練習場所の確保〕沿岸部にあった公民館や各団体の宿が被災し、全団体が内陸部に残った公民館等を練習場所として使用するため、予約の取り合いになったりと満足のいく練習が出来なくなった(活動する場）…同2人
	7)活動の中心となる街づくり。人が集まるイベント。ＰＲ
	8)祭りはその地域に根ざして育ってきたものなので、単に観光化するのではなく伝統と地域性を保って欲しい
	9)震災前のコミュニティ活動が、復活にはかかせない
	10)資金と人手が必要だと思う。震災の後、急激に人口減少(他市町村への引越しなど)がみられた。又、商店街の消滅などで街に活気がなくなったことも原因のひとつである。故に街の活性化は絶対的に不可欠なもので再興できるよう願っているところである
	11)住民がいなくなったので大変と思う。まず住む所がないので人が集まらない
	12)町内のつながり。次の世代につなげようとする想い
	13)被災地では、人がいなくなったので祭りのときにだけ集まって祭りを実施している状況なので、人集めを工夫する必要がある
	14)賑やかさが必要。誰でも参加・見学が出来る活動(特に高齢者の参加)
	15)簡素化を望む。例えば七夕。車をあんなに作ったのはいいがどう考えても存続するのは難しい。コミュニティーは大幅な再編を迎えている。新しい街づくりを前提にするにはそれなりに身のたけにあった内容にすべきだ。ボランティアだのみは続かない
	16)地元の人だけでは人口減少や高齢化で実現不可能になっていく危険があるので、地元の「外」の人を巻き込む仕組みづくり、柔軟性が必要。よく言われるが「切れ者」「馬鹿者」「よそ者」「若者」がいる組織は発展できると思う
継承・人材育成	17)後継者育成。後継者育成の指導者に対する支援…同14人(育成したくても子どもがいない)…同2人
	18)地域の人々の精神文化を引き継いでいくもの。芸能という無形文化を通し、人々のつながりや歴史等が語り継がれていくもの。日本人の心として地域に伝えていくもの
	19)人である。この地区に住み、この地区で仕事をして、この地区を支える方々である
	20)財源(活動費)の支援。発表の場の設定。活動記録(いわれ、録画、楽譜の採譜など)※人口減のため他地区からの参加者の受け入れにふみきる覚悟
	21)震災で家が流出し、町内に家がなくなり再建するにも土地の盛り土などの工事が進まず、依然住民が離散しており、人材を集めるのが大変で後継者が少ない
	22)人の数が少ない(特に若者後継者が減っていること)、教える人、観客
	23)岩手県内には多種多様な民俗芸能が伝承されている。しかし地域が違えばそこにどのような民俗芸能があるのか殆ど知らない。そこで地域間で民俗芸能に関する交流を行う動画による、民俗芸能に関するライブラリーを作成する等により、伝承されてきた民俗芸能の歴史的意義がより一般に注目されるようにするべきである。このことが伝承活動を更に活発にするものと思う。
	24)人々をつなぐ「祭り」は地域に必要。祭りは絶やしてはならない！
	25)チームワーク、団結力、みんなをまとめるリーダーの存在、祭りや芸能の活動を魅力的に発表し、みんなに私もやってみたいと思わせる人の存在が必要
	26)指導者の老齢化と少子化の問題、勿論資金の調達等多くあると思う
	27)伝統文化を受け継いでいこうという思い。地域の結束、やる気…同3人
	28)一番必要とされるものは「マンパワー」であることは言うまでもない。しかし絶対人数が減少する中では規模の適正化や準備に係る住民同士の盛り上げ等、工夫をこらして継承していかなければならない。伝承という意味では、今までの口伝や記憶だけに頼るのではなく、積極的にデータ化して残していくことも重要と考える
	29)居住人口が少なくなれば、どうしても活動は限られたものになる。今後の活動に必要なもの、それは若者の増加

継承・人材育成	30)私の住む地方では、祭り芸能は部落(町内会)単位で行われることが多く、部落民がその活動を伝承し、地域の企業や商店がその活動を下支えしている。今回の震災では、部落そのものが崩壊またはそれに近い状態になったので、その再編を待つ必要がある。再編し、部落活動が再び活発になるひとつの切り口、目標として五年祭は貴重な軸になると思う
	31)継承していく子どもたち、大人が少なくなっている。また１つの地区にいくつも民俗芸能があると、人は少なくなっていくので例えば地区で全部の民俗芸能を1つにして、いくつもの芸能をこなす形にしないと途絶えてしまう。学校の生徒がもっと関わると良いと思う
	32)子どもや若者たちにもっと参加して欲しい…同3人
	33)民俗芸能の活動に対して自治体も協力体制をとる。小中学校、高校～生徒が参加しやすい環境整備。 町、地域の文化として活動を側面支援
	34)世代交代による若者の興味が分からないのか(参加意識が低い？)参加者が少なくなっている。小、中学校での伝統、継承教育(部活etc)があれば良いと思う…同2人
	35)若い人たちに伝えてゆくこと!!少子高齢化で受け継いでゆく人が少なくなっている現状である
	36)戦前まで地元に「鹿踊り」があったと伝えられているが、戦時動乱で伝承がすっかり途絶し復活すら望めない状態となってしまい、権現様だけでも存続させなければと捕らえている。 伝承活動の提要は、踊り手も様々いる中で、伝承されてきた基本とする踊りの型をきちんと次の世代へ伝えることであり、それがいい加減になってしまうと同じような芸能団体の他所の型を簡単に模倣してしまうことになってしまう。地元に伝わる踊りの方を理解するということは、単にそれを体で覚えるだけでなく、その動作の意味するところを理解することに他ならない。 郷土芸能を伝承保存することは、簡単なようで容易ではない。特に様々な余暇が溢れている現代においては、よほど目的意識をもって望まないと簡単に廃れてしまう。伝承を真摯に考えている方がいるうちは尊属するだろうが、その意識を持った方が保存団体にいなくなってしまえば簡単に廃れてしまうだろう。 ゆえに後継者の育成に努めると共に、定期的に集い保存伝承することが不可欠となる。発表の場としては、これまで基本的に五年祭での神社への奉納及び道中、祭り広場(赤崎小学校校庭)での披露となるが、今後は、婚礼などの祝い席や福祉施設慰問など発表機会を捉え、それに向けて恥ずかしくないように練習に励むことと思う
市民(住民)意識	37)参加者本人の気持ち、やる気
	38)リーダーの執念と会員のやる気、地域の期待
	39)地域の人々の係わり合いの中で若い人たちに伝える意欲を見出すこと
	40)祭り芸能が存続していくためには市民がその意義を理解し参加協力していく必要があると思う
	41)会員の思いと地域の方々の理解だと思う。そして経済的にも助け合う必要があると思う
その他	42)行政の支援
	43)演じる機会、外部の人も集まるチャンス

質問Ⅱ　子どもたちの文化芸術体験について

震災後も子どもたちの教育支援は、学習支援、カウンセリングなど専門機関や団体、NPOによって手厚く実施されています。また、文化芸術体験についても、文部科学省、文化庁、岩手県などの行政や文化団体、NPOなどが積極的に取り組んでいます。そこで子どもたちの文化芸術体験の現状と今後についてお尋ねします。



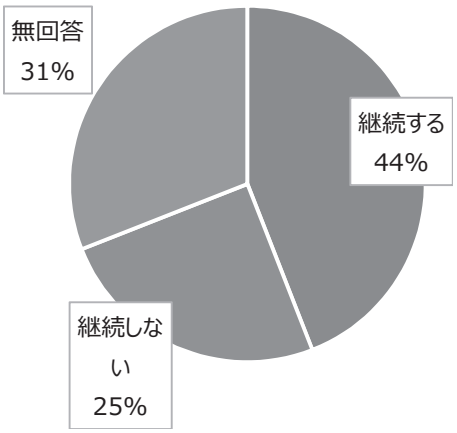
問１.震災前と震災後に、子どもたちの文化芸術体験に変化はありましたか？

＜どんな変化がありましたか？＞

支　援	1)震災後、岩手県文化振興事業団の支援が全県に広まった
	2)震災後、ﾌﾟﾛの演奏家や芸術家の方々が慰問やコンサートに訪れ、生の演奏に触れる機会が多くなった…同3人
	3)被災地支援のような形で震災以前より手厚いように感じる
	4)他からの支援により多くの文化芸術鑑賞・体験活動に触れる機会が増えた…同7人
	5)無料でバレエの鑑賞等があったが、演ずる人の足首にタトウなど、子どもたちに見せたくないものがあった
	6)みやこ映画生協では震災直後から無料出前上映会の活動をしてきた。当初は子ども向けが中心で、その後老人向けも上映している
	7)被災地の小学校・中学校に演劇指導で成人アマチュア団体が教えに来てくれたという話を人づてに聞いた
	8)被災前にはふれあいセンターなどがあったが、とにかくばらばらになった。集まる場所がない。新しい場所は例えば(やる気商店街)では大学生などが家庭教師ボランティアをしている
	9)震災後は、多くの団体が復興支援で学校や応急仮設住宅集会所を中心に、芸能文化の講演や指導を行なっており、子どもたちは震災前と比べると多くの様々な芸術文化に触れることが出来ているものと捉えている
	10)震災により市民文化会館が使えなくなり、代わりに公民館や体育館を使用することになった。音響面など、なかなかカバー出来ない問題があった。ただ、たくさんのボランティアや支援の公演があったのは子どもたちの大きな経験になった
環境の変化	11)文化芸術体験の機会が増えた。やる気も出ている…同2人
	12)震災前より選択肢が増えたと思う
	13)体験機会の減少、場の減少
	14)集まる場所や道具等が流されたりで、以前のような活動は暫らくの間は無理かと思われる
	15)発表の場が流され、活動が思うように出来なかった…同3人
	16)家の流失で他の市町村に移り住むなどで以前は参加していたが参加出来なくなった子どもが多数
	17)本来あった集落がなくなったにも関わらず、祭りのためにお囃子に借り出された
	18)学校行事として(神楽)先生が先頭に立って進めてきたが学校閉校により地域で進めている
	19)親の関係でこの地をやむを得ず去らなければならない等の事情で子どもたちの人数が減り、文化を伝えられる絶対数が減っていく様な気がする
	20)生まれ育った地域に伝わる郷土芸能を発表する場や道具がない。また継承活動が行われていない
	21)中学校の文化祭で郷土芸能の発表があり、震災前は夜とかの練習も出来ていたが「夜は危ない」とか「親が子どもの送り迎えが出来ない」とのことで、夜練習が出来なくなっている…同2人
	22)楽器(自分の持っていた)の流出や住居の移動、転居などで、通うのが難しくなった。交通が不便になり自力では不可能になっている子どももいる
	23)地方に住んでいて都市部と圧倒的に違うのは、文化情報・文化イベント(コンサート、展覧会など)、交通機会の少なさと思う。そのような意味でいえば今回の震災後、様々な分野の方々が被災地に来て下さり、被災地の青少年と交流して下さっているので間違いなく青少年を刺激していると思う
	24)ある高校では、いつも文化会館で発表していたが壊れたため学校の体育館で発表し、お客様なしでのステージとなった、生徒の気持ちも違ったと思う
心の変化	25)絵などの表現に変化が見られた
	26)音楽・芸能等、子どもたちは文化に飢えていると思う。学習支援にも参加が多くなっている

心の変化	27)自分だけ参加しても良いのか悩んでいる子もいた※仮設住宅で何処に行けば良いか分からない人もいる
	28)震災が子どもたちの感受性にどのような変化を与えたかは真に知る由はないが、ある体験がなんらかのフィルターになっていることは間違いないと考える
	29)大きな変化はあまり感じないが、子どもたち一人ひとりの文化芸術に対する意識が以前より強くなってきたように思う
	30)子どもたちが何か自分たちに出来ることはないかと大変前向きに考えている。中学生はスローガンに「野田村の太陽になろう」を掲げている。文化活動も震災前より活発化したように思う
	31)まだまだ被災にあったことを引きずっている。…ふと黙ることがある。心の底からはまだ笑顔が生まれていない

問２．＜問1であると答えた方に＞その変化は今後も継続されると思いますか？



＜継続すると思う理由＞

支　援	1)子どもたちは影響を受け易い。本当に善いものを持ってきて欲しい
	2)震災で悲しい思いをした子どもたちのため、大人は続けてやらなければだめと思う
	3)他からの支援により多くの文化芸術活動に触れる機会が増えた。支援が継続しているところもあるので
	4)興味をもって取り組んで！熱意を持って取り組んで！
	5)継続して取り組んでいる文化団体がいることがその理由だが、だんだん減少していくと思う
	6)指導側も生徒側も楽しく活動していたと聞いた。支援と機会があれば続けていくことも可能ではないかと考える
	7)よく分からないが、文化芸術体験や支援の効果はあると思う。継続して欲しい
環　境	8)地域の基幹産業が確立されれば未来は明るいと思われるが、現状ではジリ貧なので期待出来ず
	9)まだ盛り土の高さなどの決まっていないことが多く、以前の地区に戻ってくるのは数年先。地区によっては今後も復活出来ない(解散した地区がある)
	10)時間の流れと周囲の復興のあり方で変化していくと思う
	11)ハード及びコミュニティの再生、再開が軌道に乗らない限り、以前の形に戻ることは困難…同2人
	12)時間の経過と復興の状態で変わると思うが、現実の問題として住宅再建最優先の当市である
	13)(人口減少は)ますます増長すると思われる。地元にいればまだ良いが学生は都会に出たら戻ってこない
	14)今の学校は保護者の顔色ばかり気にして、指導する側の立場は考えていない。夜の練習が出来なければ指導する側が仕事等を犠牲にして昼に指導に行かなければならない
	15)遊び場所もなくなり、何処にも行けない子どもたちは文化に興味を持つと思う
	16)経済的な問題を解消するのが何年先になるのか分からない。震災を機に両親が共働きになっている場合も多いように思う
	17)復興までには時間がかかるだろう。しかし今度はふれあいセンターのような場所が建つはずなのでよいと思う(方向性としては)でも街はバラバラな計画性の中にあると思う
	18)文化施設がまだない…同2人
	19)文化会館が再オープンする。また今後も支援は続くと期待している…同2人
心	20)3.11の体験がそう簡単に忘れられるとは思わない。相当長い期間、PTSDのような影響は残り続けると思うので、絵などの感情表出の際は変化が見られると思う
	21)「今後も…」のスパンがどのくらいの期間に渡るかは難しいところだが、今回の震災により様々な刺激を受けた青少年が大人になり、さらに次の世代に「何らかのメッセージを伝える」という姿をイメージすれば50年～100年スパンで多くの影響、変化を与え続けると思う
	22)継続していくこと、受け継いでいくことへの意識が子どもたちには強くあるから
	23)体験が今後の人生に大きく影響すると思う
	24)いろいろな分野を子どもたちに見てもらったので

＜継続しないと思う理由＞

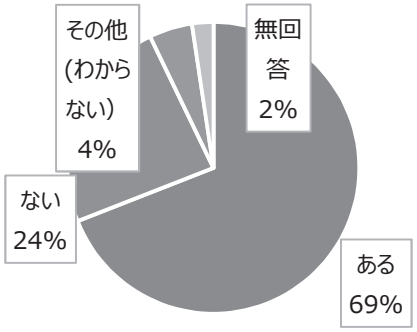
1)徐々に数(回数)は減っているし、「自立」の段階に入ってくれば変化は継続ではなく、更に進むのではと思う

2)いずれ震災の記憶も体験も風化してゆくものだし、大人になれば感受性は大きく変化するものだから
3)多くの団体が支援と称して、各々が独自に学校や仮設住宅などで公演、イベントを行っているが、その意識がいつまで継続されるか疑問
4)変化する理由が分からない
5)支援といっても一時的なもので現在でも減ってきているのでこれからも減る(震災前に戻る)と思う…同5人
10)積極的に参加しなければならないと思うようになった
11)文化会館が新しく出来上がるので発表の場が元にもどると思う

問３．震災後の子どもの文化芸術体験について、おとなの役割や対応、支援のあり方等について（自由筆記）	
支援	1)先ずポスター。ふざけた、人間をバカにしたようなポスターはお断りしたい。被災地をナンと思っているのか。心を育てる、世界観を広げるためにも作り手のまじめさが必要
	2)文化施設の早期建設
	3)継続的な体験活動をさせなければ、成果は残らない。5年・10年のスパンで同じ子どもたちに体験活動をさせていくことを考えていきたい。助成金を受け成果主義で考えると、多くの場所で何回実施したかとか、全体で何人に体験させることが出来たという指標を重視しがちだが、それでは人材育成につながる支援になることは難しい。じっくり焦らず個別への支援をすることが何より望ましい支援であると考える
	4)キーワードは大学生のボランティアである。風化して来なくなる方向かも知れない。けれど老人と遊ぶよりは大学生のお兄さんとお姉さん、つまり若い連中とのコミュニケーションを通して、あこがれみたいな心の交流を喜ぶことが出来る
今後の文化芸術体験	5)子どもが減少しているので当町の指定である和座神楽は活動出来なくなっている。支援、対応出来ない所もある
	6)子どもが興味を持ったことへの積極的参加や、学校の授業などでの告知・体験をさせる
	7)見る機会も大切だが、実際にやる機会はもっと重要なので「やりたい」と思う子どもたちが気軽に一歩踏み出せる環境づくりが必要だと思う。それもなるべく日常的に
	8)都市部に住む子どもたちと比べ芸術文化に接する機会が少ない沿岸地域に住む子どもたちには、今後も継続して体験が出来るようなシステムを構築して欲しい
	9)第一に生徒数が減っているので将来が不安(継続できるか心配)。第二に諸活動が多いので、思うように練習出来ない。第三に指導に後継者が見えてこない(育たない)
	10)文学でも音楽でも本物に触れることが一番だと思う
	11)せっかく外部からの支援で多くの芸術に触れた。興味を持つ分野を伸ばすための機会があれば良い
	12)震災がなくても都会でなくても、優れた文化芸術に触れる機会を田舎暮らししている子どもたちにも、もっと積極的に体験させるべきだ
	13)日々練習を重ねることが子どもたちの力になっている
	14)民俗芸能があることで子どもたちとの接点を持つことが出来、見守ることが出来る。声を掛け合うことにより、安心感も生まれてくると思う
	15)心の豊かさこそ文化芸術体験で培われることと思う
	16)芸術文化施設がなくてもやれることを少しずつ子どもたちに伝承していく努力をする
	17)父兄や子どもたちはスポーツ、塾などに関心があり、もう少し地域の伝統芸能を考えて欲しい
	18)大人、子どもがいったいになって出来る活動や体験が必要と思う
	19)教育委員会との連携で子どもたちと交流しながら、人材育成にも繋げていけたらと思う
	20)釜石市民劇場では、子どもたちと一般と合同で劇を構築している。公演場所がなくてもテントを利用している
	21)少子高齢化に伴い体験する児童生徒の確保が難しい
	22)子どもがいれば継承していきたい
	23)地方では一流の芸術を鑑賞する機会がめったにないので、年に一回でいいのでその筋の芸術を体験出来る機会を設けて欲しい

質問Ⅱ　子どもたちの文化芸術体験について

震災後も子どもたちの教育支援は、学習支援、カウンセリングなど専門機関や団体、NPOによって手厚く実施されています。また、文化芸術体験についても、文部科学省、文化庁、岩手県などの行政や文化団体、NPOなどが積極的に取り組んでいます。そこで子どもたちの文化芸術体験の現状と今後についてお尋ねします。



問１.震災前と震災後に、子どもたちの文化芸術体験に変化はありましたか？

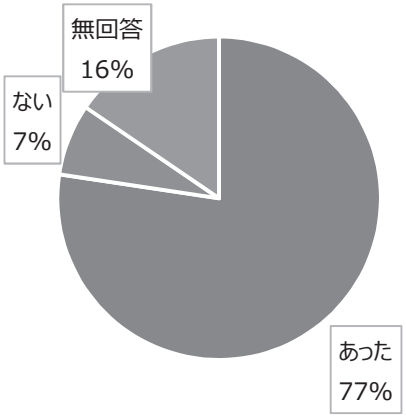
＜どんな変化がありましたか？＞

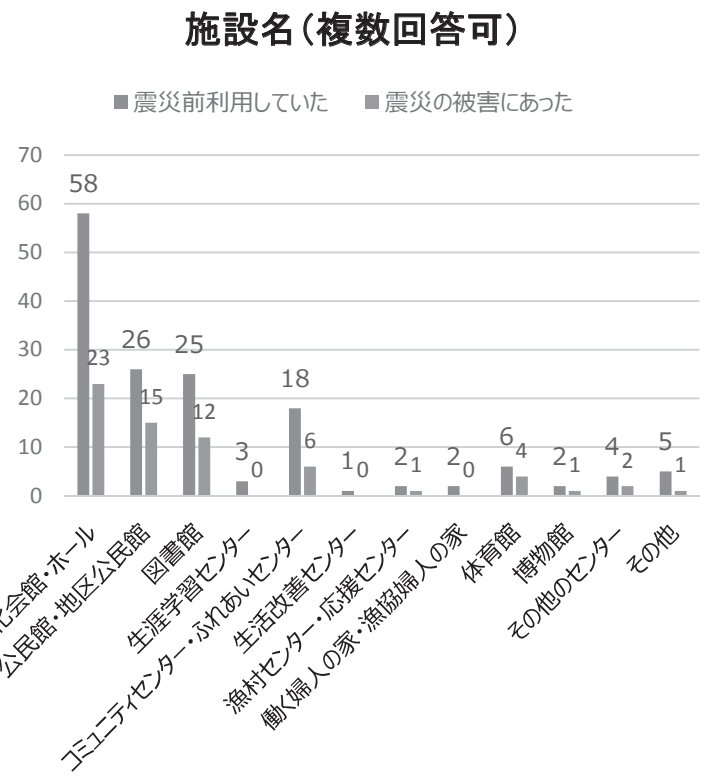
支　援	1)震災後、岩手県文化振興事業団の支援が全県に広まった
	2)震災後、ﾌﾟﾛの演奏家や芸術家の方々が慰問やコンサートに訪れ、生の演奏に触れる機会が多くなった…同3人
	3)被災地支援のような形で震災以前より手厚いように感じる
	4)他からの支援により多くの文化芸術鑑賞・体験活動に触れる機会が増えた…同7人
	5)無料でバレエの鑑賞等があったが、演ずる人の足首にタトウなど、子どもたちに見せたくないものがあった
	6)みやこ映画生協では震災直後から無料出前上映会の活動をしてきた。当初は子ども向けが中心で、その後老人向けも上映している
	7)被災地の小学校・中学校に演劇指導で成人アマチュア団体が教えに来てくれたという話を人づてに聞いた
	8)被災前にはふれあいセンターなどがあったが、とにかくばらばらになった。集まる場所がない。新しい場所は例えば(やる気商店街)では大学生などが家庭教師ボランティアをしている
	9)震災後は、多くの団体が復興支援で学校や応急仮設住宅集会所を中心に、芸能文化の講演や指導を行なっており、子どもたちは震災前と比べると多くの様々な芸術文化に触れることが出来ているものと捉えている
	10)震災により市民文化会館が使えなくなり、代わりに公民館や体育館を使用することになった。音響面など、なかなかカバー出来ない問題があった。ただ、たくさんのボランティアや支援の公演があったのは子どもたちの大きな経験になった
環境の変化	11)文化芸術体験の機会が増えた。やる気も出ている…同2人
	12)震災前より選択肢が増えたと思う
	13)体験機会の減少、場の減少
	14)集まる場所や道具等が流されたりで、以前のような活動は暫らくの間は無理かと思われる
	15)発表の場が流され、活動が思うように出来なかった…同3人
	16)家の流失で他の市町村に移り住むなどで以前は参加していたが参加出来なくなった子どもが多数
	17)本来あった集落がなくなったにも関わらず、祭りのためにお囃子に借り出された
	18)学校行事として(神楽)先生が先頭に立って進めてきたが学校閉校により地域で進めている
	19)親の関係でこの地をやむを得ず去らなければならない等の事情で子どもたちの人数が減り、文化を伝えられる絶対数が減っていく様な気がする
	20)生まれ育った地域に伝わる郷土芸能を発表する場や道具がない。また継承活動が行われていない
	21)中学校の文化祭で郷土芸能の発表があり、震災前は夜とかの練習も出来ていたが「夜は危ない」とか「親が子どもの送り迎えが出来ない」とのことで、夜練習が出来なくなっている…同2人
	22)楽器(自分の持っていた)の流出や住居の移動、転居などで、通うのが難しくなった。交通が不便になり自力では不可能になっている子どももいる
	23)地方に住んでいて都市部と圧倒的に違うのは、文化情報・文化イベント(コンサート、展覧会など)、交通機会の少なさと思う。そのような意味でいえば今回の震災後、様々な分野の方々が被災地に来て下さり、被災地の青少年と交流して下さっているので間違いなく青少年を刺激していると思う
	24)ある高校では、いつも文化会館で発表していたが壊れたため学校の体育館で発表し、お客様なしでのステージとなった、生徒の気持ちも違ったと思う
心の変化	25)絵などの表現に変化が見られた
	26)音楽・芸能等、子どもたちは文化に飢えていると思う。学習支援にも参加が多くなっている

質問Ⅲ　文化施設・生涯学習施設のあり方について

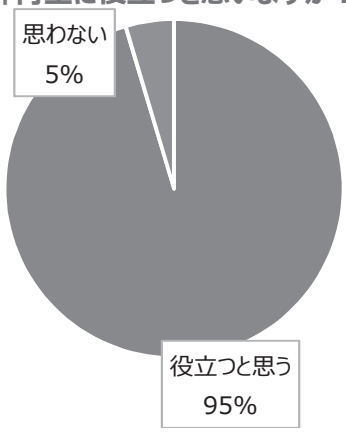
岩手県における文化施設・生涯学習施設は深刻な被害を受け、宮古市、釜石市、陸前高田市では文化会館を流出または破損し、陸前高田市の市民会館、中央公民館、図書館では職員も犠牲になっています。また、幸い被害を免れたところは、避難所として或いは支援センターとして、支援公演の受け入れ会場として大きな役割を担いました。そこで、これら文化施設や生涯学習施設の今後のあり方についてお尋ねします。

問１．あなたが震災前に住んでいた地域には、よく利用していた文化会館・ホール、図書館、公民館コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設がありましたか？





● ＜問１であったと答えた方へ＞これらの施設はコミュニティ再生に役立つと思いますか？



＜役立つと思う理由＞

1)人が集まる場所は欠かせないものだと考える…同８人
2)住民の集いの場所である。催し等を行う場所である。コミュニティの再生には必要な施設である…同7人
3)地域のコミュニティや人口減少をとめるのに大切だと思う
4)発表、練習の拠点となる…同４人(現在は場を確保するのに苦労している)
5)とても役に立つ。利用するものにとって生きがいにつながる場所
6)何かを立派に行う、あるいは話し合う場という意味で、役には立つと思う
7)大勢で集う場所がないのでとても重要な場所…同4人
8)防災センター等、地区での活動の場所がなくなり、この施設は役に立つ
9)＜市民会館の場合＞不特定多数の人たちがひ一つの催しに対して共通の感情等を持つことにより、一体感を得られる。これは絶対に必要なことだ
10)今夏「レクイエムコンサート」を近隣市町村のコーラス総勢50名と、関西関東の30名の有志により実施。感動的な良いコンサートになり、コミュニティの再生に大いに役立ったと思う
11)生産の場、商品を購入する場、人々が集い楽しむ場が揃わなければコミュニティの再生は出来ない
12)いろんな情報を知るのにも、お年寄りたちが集まれる唯一の場所になっている
13)市民が集い体を動かせる場所や文化を発表するような場所がないのは市民としてとても悲しいことだと思う
14)いろいろな活動を導入し実践している
15)芸能発表できる場所があると、発表する側、見る側の交流の場としていろいろな人と会い会話できる場所が増えること。良いと思う

16)発表や活動の場が少ないと思う。地域の施設は文化の中心
17)文化活動の拠点として常々利用されていた施設なので、ぜひ再建してもらいたいと思う…同4人
18)早期に新築して欲しい。震災後は市民劇場とか第九発表会など。高校、中学校の体育館で実施されているが、整った施設で本当の文化を味わいたい
19)市民の学習活動にはなくてはならないものである…同3人
20)伝承館、公民館は地域住民(子供から大人まで)が気兼ねしないで集まって話が出来る場所
21)企画されるイベントに参加、鑑賞することで住んでいるところの情報を得たり、時間を裕かに感じることが出来る
22)とにかく場所があること。ちなみに商店街の空きスペースは使える。あと、障害者の人が絵の展覧会を開いていた。ひまわりハウスというものである。こうしたミニ施設は良い活用があると思う
23)コミュニティの再生というより当町は継続をどうしていくかも大事である。あまり期待は出来ない面もある
24)市民の交流、体力向上、学力・知識面での向上
25)多くの住民が集いやすい(車がなくても行けた)場所だった。このような立地条件の良いところの施設での発表機会は演じる側、視聴する側双方に有意義である
26)地域活動や寄り合いといった文化のみならず社会活動における拠点である
27)再オープンにあたり、地域の人が活用しやすくなるような企画、施設設備の工夫が考えられていると聞いているので
28)みんなが集まる場所がないと何も出来ない
29)コンサートや地域のイベントも増えているのでこれからも役に立って欲しい
30)どの施設も人が感動したり安らいだりする。必要な場所だから

＜役立つと思わない理由＞

1)思わないというか、ものによる。「コミュニティ再生」が何をさすかによると思う
2)時間に制限がありすぎる
3)公民館使用時の手続きが面倒。多くの団体が使用するので時間を取るのが大変

問2. ＜役立つと答えた方に＞これからのコミュニティ再生に必要と思う文化施設や学習施設はどんな施設と思いますか？（自由筆記)
1)文化、芸術問わずいつ誰が行っても気軽に集まれる様な仕組のある建物で、指導者がいる。管理の厳しくない(規律のある)
2)形式的なものでなく臨機応変に対応できる拓かれた空間。用があるときだけ行くのではなく何か見つかる…ある
3)オールマイティーに使用できる、音響照明などの整った施設
4)舞台公演など一過性の事業と、体験することをベースとした継続的な事業を組み合わせることで町民から繰り返し利用される施設
5)費用がかからず、自由に人々が出入りできる施設
6)多くのどのような人も利用しやすい施設
7)集う場が住民の核になること(現在居住地さえ確定せず、ままならない。核が定まらない)
8)立派な建物は必要ない。大広間、和室、厨房があれば十分。気軽に集まれて、飲み食いできる施設
9)市民会館が再建されれば、発表の場は確保されるが、まだ普段の活動をする場所ではない。会場の使用料金も高額なので、気軽には使えない。駐車場も少ない。公民館を利用しているが午後9時で閉館となってしまう。せめて9時30分までにならないものか
10)大船渡のリアスホールがこれからも役に立つと思う。図書スペースもあるので学生の勉強にも使って欲しい
11)様々なジャンルの団体を呼び込めるもの。普段でも気軽に出入りできる場所(特に若い世代)。安い使用料で様々な団体が活用できる小部屋があると良い
12)各種サークル活動が行えるスペース、文化会館や公民館等
13)各自、趣味や思考は違うと思うので、それらに対応できるスポーツや音楽など趣味を生かせる施設を作るといいと思う

問3.被災地の地域の文化交流、あるいは文化拠点としてこれからの施設に期待することは何ですか？（自由筆記)
1)一部の方の集会場ではなく、多くの方が自由に行き来できる場に再生していくことが大事だと考える…同2人
2)人々が集まりやすい施設、環境であること
3)地域の行事を再生することができる。敬老会や夏まつりなど住民の交流が取り戻せる
4)交通の便の確保。集まりやすい場所にあること。誰でも使えること(料金的なことも含め)…同4人
5)相当の期間、利用料を低額に抑えて欲しい。市内の人、外の人によって利用料の差をつけないで欲しい。管理運営の経費を抑制するため、ボランティアを募り維持費を抑える

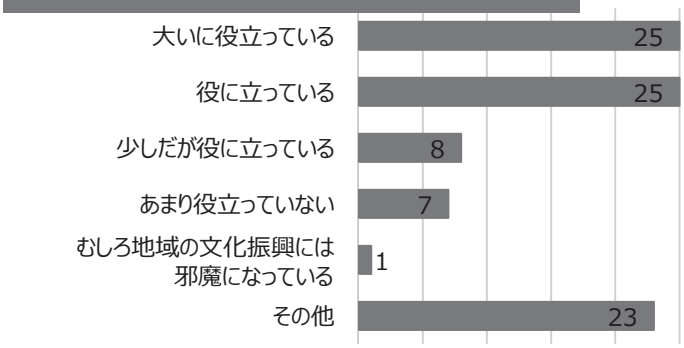
6)今まで行われていたことにプラスαが期待出来そう。使い方を市民目線でと期待している
7)ボランティアで人形劇をしているが、町の中心部に練習場所がない。施設を設けるなら、やはり中心部が良いと思う
8)被災自治体全てに数十億ものカネをかけて施設を造る必要性とは。疑問を抱く。拠点を絞り込んで、あとは公民館規模で良い。大船渡に立派なホールがあるのだから釜石は300人程度でも良いのでは？
9)文化交流と云えば、役員以上とか決めないで最初は各団体2・3名位参加として(事務局がとりまとめるとか？)
10)市民会館の大ホールは絶対に必要。なぜなら「生」の催し物を聞くこと、観ることはテレビやパソコンなどのメディアから得るものとは根底的に違うものだから
11)必ず目的があるからいく場所ではなく、気軽に立ち寄れる交流が出来る場、意味のある施設
12)静かに寄り添うこと
13)誰もが制限なく排除されず集える。管理者によるうるさい制限がない
14)気軽に足が向く会館があるといい
15)絵画を展示するスペースがない
16)地域内でお金がよく回らなければならない。生活に必要な消費活動だけでは地域に活力は生まれない。文化活動でお金を地域内で回すことが出来れば、地域に活力を呼び戻す一助になると思う。そのような仕組みを考えていきたい
17)施設を生かすスタッフの体制が必要
18)若い人たちの意見を積極的に取り入れている施設があっただろうか？例えば音楽スタジオ、映像スタジオ、映画製作、劇団活動、etc
19)地域の文化交流の大切さは分かっているが、住む所もまだまだ定まらない状態でこの問いにまともなお答えは出来かねる
20)誰もが参加出来、見学出来る。住んでいる街に誇りが持てるような場所であることに期待する
21)人が集まりやすい施設(複合型)イベント事だけではなく、常に様々な世代が集まれる場所…同2人
22)文化会館が使えないというのはとても不便。ただ他の市町村のようにいつでも集まれる、いろんなことに気軽に使えるような場所になったらいいなと思う
23)郷土芸能に関する資料、道具等を保管する施設があれば良い。練習、公演も出来ればなお良い
24)地域の人々が交流できる施設の早期再開を願っている
25)利用料を安くして誰でも使えるように。公民館の整備、図書館の建設
26)それぞれの町に合った文化事業等行う上でなくてはならないコミュニティだと思う。文化継承においても必要不可欠
27)いろんな活動は少しずつ始まっているが、集まる場所がないことが困る。心のケアのためにはいろんな場所や文化交流等は早く出来ればと願っている
28)様々な集会、公演、発表、展示の場として活用する…同2人
29)地域住民が以前の人の交流が難しい。だからこそ集う場が必要
30)大震災後3年の穴を埋めるには、人と人との交流を強化し、芸能面にしても参画型イベントを取り入れて欲しい
31)楽しく集えること。発表の場を早く
32)公民館、祭り屋台倉庫を建てる場合に助成金を出して欲しい
33)様々な用途に活用できる施設や世代間交流が活発に行える事業の工夫が必要と思う
34)孤独者を減らせるといいと思う
35)ハード・ソフトの両輪の再生を期待する。どちらかといえばソフトだ。今後公営住宅などがあるので、その一室を借りて交流スペースを活用するべきなのではないか・コミュニティの位置にもつながるのではないだろうか
36)管理だけでなく運営を積極的にして欲しい
37)心の復興
38)箱物だけにならない様に地域の人々が進んで参加できる行事を開催して欲しい
39)文化施設を貸し館にしている面が文化会館や公民館のようで、もっと民間団体を育成すべきである。館独自の事業(その地域の特色ある)を積極的に推進すべきである
40)利用者が受動的になりながちなので自ら考え行動しながら喜びや楽しみを見出すような事業を実施して欲しい
41)地域の芸能等に加え、郷土の歴史を再発見できるような施設
42)地区や地域の住民がバラバラになり再開する機会が失われた。交流施設に集うことで住民の心身が豊かになる
43)例えば内陸で沿岸の物産展などを行う場合に演じる
44)学校は地域にとって重要な拠点だと思い知らされた
45)施設に期待することは、よりよい文化交流ができるように設備等がもう少し整っていくことを願っている

46)永続的な運営を行うためにも維持管理を行政任せにせず住民も責任を持って行うことと、コスト面でも可能な限り受け皿負担の形にもっていくことが理想と考える
47)誰でも気軽に立ち寄れる場所、出来ることなら「郷土芸能館」のようなものが欲しい(町内全芸能団体がしようできて週末などには町民や観光客を招いて舞を披露できたら…)
48)市民が気軽に利用しやすい、人が自然に集まってくるような魅力ある場になることを期待する
49)安全な場所に建てること。格納庫が展示する場所
50)イベントなどを増やしていきたい
51大きな集会場所はみんなの知恵が多く出るところ
52)地域の文化は人と人との交わり、交流の中から生まれ育つもの。私のような地方の町でも核家族化が進み、人と人との結びつきが弱まっています。これからの文化拠点は人が集まり活動しやすい機能(ハード)を持つことと、人の交流を促進させるソフト面の力を備えた人的パワーを持つことが大事かと思う
53)地域のニーズにあった施設の確保
54)枠にとらわれないこと。枠を取り外すこと
55)早い復興
56)地域の文化交流はもちろん種々な企画をして実行してもらいたい
57)音楽会、講演会、作品展示会、発表会、サークル活動
58)今までは興味のある人や関係者だけが集まっていたように思う。震災後、心の復興はまだまだの方が多くいると思うので今までそういった場所に行ったことのない方々が気軽に行って楽しんだり出来るような施設になって欲しい
59)有料でもPM10時まで使用出来ること。駐車場が明るく広いこと。住宅地から近いこと。当日でも使用申込が出来る
60） 文化交流や文化拠点として期待することは、安らげる雰囲気のある施設、音楽ホールや喫茶店、談話室などを作るといいと思う

質問Ⅳ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

被災地の文化芸術の振興は、表現者、行政、民間団体、鑑賞者などが一帯となって進めなくてはなりません。とりわけ指定管理制度の適応拡大により、市民の目線に近いNPOの存在が大切になります。こうした行政やNPOとの市民協働を進める上で、重要な役割を担うのが中間支援(コーディネーター)といえましょう。地域の多様なニーズに適応するコーディネーターを担う、NPOの役割についてお尋ねします。

問１．あなたの地域では、文化振興にNPO活動が役立っていますか？



<その他の回答>

1)プラス面、マイナス面あるかと思う…同3人

2)活動が見えない…同2人

3) 地域にNPOはない…同2人

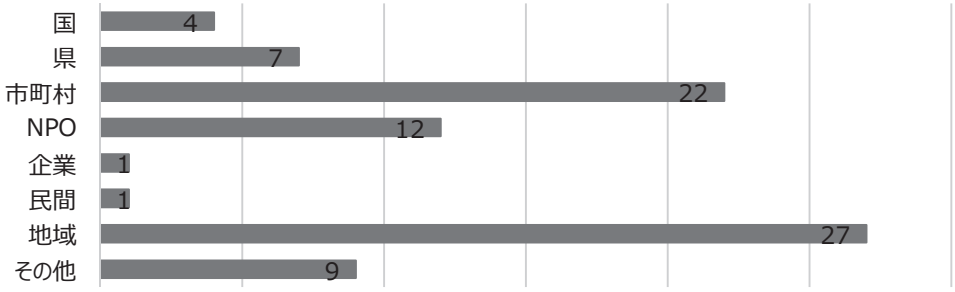
4)NPOはない…同2人

5)詳しくは理解していないのでわかりません

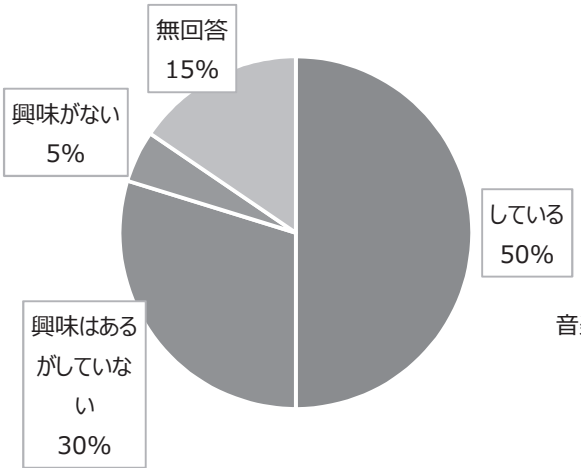
6)そもそもそういうNPOが存在しているのか分からない…同2人

7)町芸術文化協会が活動しているが事務局は町教育委員会が担っている

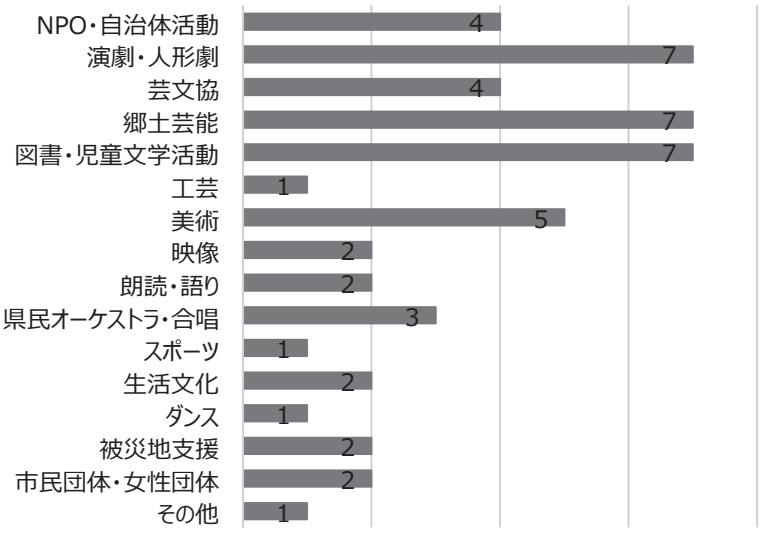
問2.＜役立っていると答えた方へ＞あなたの活動で協働するパートナーは誰ですか？（複数回答有)



問3.現在、文化活動にかかる市民活動やNPO活動に参加していますか？



どんな活動をしていますか？(複数回答有)



＜興味はあるがしていない理由＞

1)経済的・精神的に余裕がない。先の見えない復興状況であり心に余裕がない
2)共通のテーマを持つ人が殆どいない。単独でもある程度は出来る
3)仕事の関係で。活動時間があわない。年齢的にも無理…同2人
4)活動方法がわからない。情報がない…同2人
5)ＮＰＯの存在がよくわからない
6)今の活動、仕事、生活におわれ余裕がない日々…7人
7)体調が思わしくない。老人介護をしているので…2人

8)参加はしていないが臨時的に参加している
9)なかなか参加できない…同2人
10)出来る環境におかれていないため

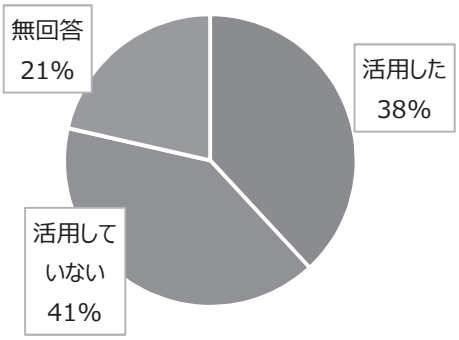
問4.東日本大震災で文化活動にかかるNPO、あるいは市民活動が果たした役割は何だと思いますか？

1)柔軟でスピーディーな対応
2)分からない…同４人
3)市民劇場の復活、ジャズフェスの開催などイベントなど楽しみや客員数増加など
4)被災者に寄り添い孤立させなかった。草の根活動(被災者に寄り添ったニーズに応じた活動)
5)行政の行き届かないところに、きめ細かに対処した。借りられる会場で演奏会等をしてくれた。被災した人、そうでないものにも等しく潤いのときを与えた
6)震災で離れ離れになった方たちを結びつけるきっかけを作ってくれたのでは。生きがい、目標が出来たのでは
7)活動の継続と市民の皆さんの元気な姿をアピール出来たこと
8)ＮＰＯと市民活動はまったく別物だと思う。市民活動は必要だがＮＰＯ(特によそから来る者）は役立たずばかりだ。単なる自己満足のために来ているだけ
9)財源としての役割は大きい。実際失ったものが復活している。ただそれに甘んじてしまってＮＰＯの功績を称えるためにイベントを開いたり、言うがままのお祭り騒ぎで終わってしまう体質が組織の弱体化を招くことにもなっている
10)壊滅的大災害を受け生存にかかることは行政が中心になることは当然で、その後の価値ある生活の再建の途中には様々なニーズがあり、その対応にはＮＰＯや市民活動が欠かせなかった
11)普通の目線での支援
12)国や行政で手の回らないところに手を回して必要だと思うところを補うのが震災後のボランティアの役割のように感じた
13)いろんなところでいろんな援助があってとても助かった。本当に倒れてしまわないうちに是非手助けお願い致したい
14)我々のところには何もない
15)心の癒し、友との交流…同3人
16)元気づける。支える…同3人
17)役に立ってる部分もあったと思うが大きな事件となったのでわからない…同2人
18)震災で皆心が落ち込んでいたときに私たちに絵手紙を送ってくれたりコンサートを開いてくれたりたくさんの支援があり、少しずつだが心が和めるようになり、その活動は今も続いている
19)NPOや市民活動が果たした生活基盤の強化は感謝する。今後、生活が安定してきたら芸術文化に力を入れて欲しい
20)補完とか包摂性の確保。あとは社会の活力の維持。たとえば俳句、川柳の会などはやらなければ生きる意味、イベントの重要性を見失うことになった
21)交流の場の建設…同2人
22)NPOの存在価値は高いものと思う。ありがたい！
23)町芸文協は震災の年も町民芸術祭を開催し、来場者に芸術文化に触れる機会を提供するなど自らの技術や活動によって安らぎと癒しを与えた
24)住民のコミュニケーション活性化、必要物資の供給
25)被災後、数多くの芸術団体が被災地を訪れてくれた。それもNPOや各団体のつながりによるものだと思う
26)震災によって失ったものはあまりにも大きく、物質的な支援を受けた方でも精神的なﾀﾞﾒｰｼﾞを回復するまでにはかなり困難なことだと思うがNPOの芸術・文化の支援は大きな力となったと思う
27)「生存」には役割が有りませんでしたが「生活」においては様々な形で関わったことが役割といえると思います。それがどれほどのものかは途上でもあり、いまだ分からない
28)地域の声として今まであまり興味がなかったが震災の後、音楽やその他の文化活動から大変な「癒し」を受けたと言われている。特にも私は図書館を復元したのをきっかけに子どもたちに読書の楽しさを伝えているが、震災前より図書館の稼働率が上がっているので嬉しい
29)参加者や観客共に笑顔元気を与えた(市民活動)。芸術に触れる機会を与えてくれた(NPO)
30)たくさんの団体が支援で訪れてくれた。本物に触れる経験は勿論のこと、進んで来てくれたという気持ちが大きな励ましになった
31)仲間がいること。郷土を見つめ直したこと
32)伝統芸能、継承、保存活動支援。地域住民の伝統活動に対する意識高揚促進運動…同2人
33)震災によって停滞しつつあった活動を食い止めてくれたと思う
34)震災で傷ついた人々の心を温めたり慰めたり癒したり勇気付けたり、明日また一歩踏み出そうとする気持ちのお手伝いが出来たのではないか

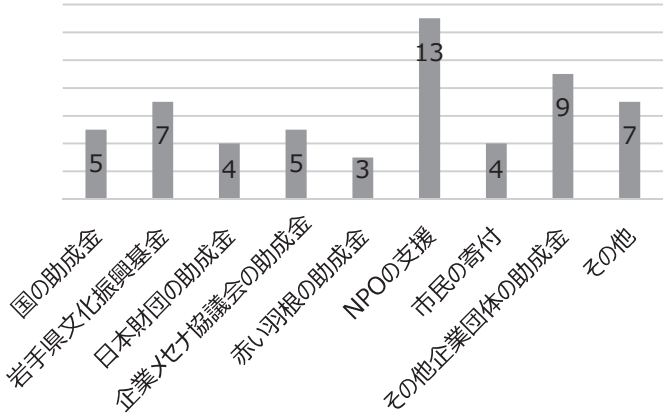
質問Ⅴ　文化芸術活動への助成と評価について

震災後、岩手県文化振興基金は、震災の被害を受けた民俗芸能等への備品等の助成と復興支援の文化イベントへの助成制度を新たに設け、基金を取り崩して資金を調達しました。また、企業メセナ協議会や各種の団体助成金を活用して沿岸被災地で数多くの文化イベントが実施されました。

問１．あなたの参加している文化芸術活動に助成金を活用しましたか？



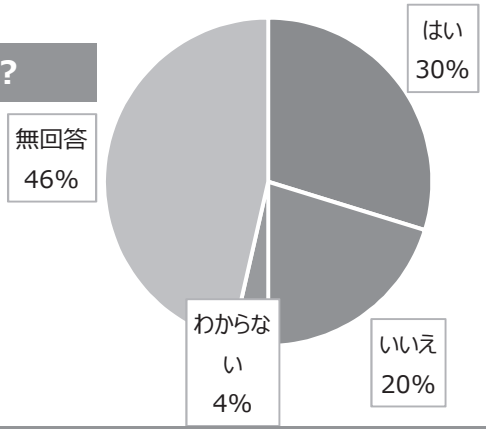
●活用した助成金の種類



＜助成金を活用していない方へ＞ 理由をお聞かせください

1)助成制度があることを知らないことと、あったとしても書類を作成する体力が団体にはない
2)(活用したかどうか)分からない…同4人
3)特に理由はない。特に必要を感じていない…同3人
4)団体に属していないので…同2人
5)私個人の活動には必要ないと思う。但し「レクイエムコンサート」の果たした役割は大きく助成金が必要だと痛感した
6)活用方法が分からない
7)小学校の中での活動のため、まず学校から活動のための金額があるので、その中でやりくりした
8)助成制度なし…同2人
9)沿岸、被災地を応援する企画だが民俗伝統芸能以外は、助成出来ないと断られた
10)助成制度を知らなかった。情報がなかった…同4人
11)現在活動していない…同2人
12)被災地で被害がないと受けられないから…同3人
13)高田災害FM、SAVE高田の方からCD(番組)をもらっている
14)対象外だったため…同3人

問２.あなたの活動ニーズと助成制度はマッチングしていますか？



＜マッチングしていると答えた方の理由＞

1)被災した小学校へNPOが支援のため入り、子どもたちに演劇の指導等してくれた
2)「レクイエム・プロジェクト・コンサート」を開催するのに経費が係るので。地元の人たちに希望や勇気を与えるものであったから
3)被災地に映画を届けるという活動目標に沿った助成を受けている
4)復興支援の助成制度により芸能団体の発表イベントを行った。地域の包装設備を持った業者の機材がすべて流され助成制度により開催のための費用が手当てされ、感謝している
5)音響等、業者委託が出来た

6)備品等購入と活動・運営に役立った…同4人
7)震災で流出してしまった道具類の際購入、入手不足で不足している活動費の助成。活動再開の動機づけにもなった…同4人
8)活動範囲内で行っているので
9)被災支援として必要と考えた活動を計画、申請した内容に対する助成であったから
10)楽譜の支援や演奏会への招聘などきめ細かく対応していただいた
11)同じロータリーの仲間同士なので意思の疎通がしやすくマッチしやすい
12)必要なところへ適切な支援。資金の面では大変助かる…同2人

＜マッチングしていないと答えた方の理由＞

1)マッチングする助成金の制度があるのであれば、情報を提供していただきたい
2)きちんとした組織活動計画でないと助成しないという制度設計になっていること(助成を得るために活動の仕方を合わせることはしなかった)
3)わからない。金がないと言われると自腹を切ってまでも準備することがある
4)団体から要望があれば手伝う意味があれば
5)活用方法が分からない。どのような助成制度があるかわからない…同3人
6)小学校の中での活動のため、まず学校から活動のための金額があるので、その中でやりくりした
7)助成制度にマッチングしていないと言われた
8)使用出来る部分が限定されたり、ヒモ付きだったり。小額でありながらも事務処理的な作業が多い
9)必要とするものと助成要件がミスマッチング。またどうして助成制度があるのか分からないものもあるし、説明会場や申請が県庁であったりして不便
10)文化協会の中の運営資金
11)大半の助成内容が用具整備であり、活動の継続化や団体の運営に資するものが少ないと感じている

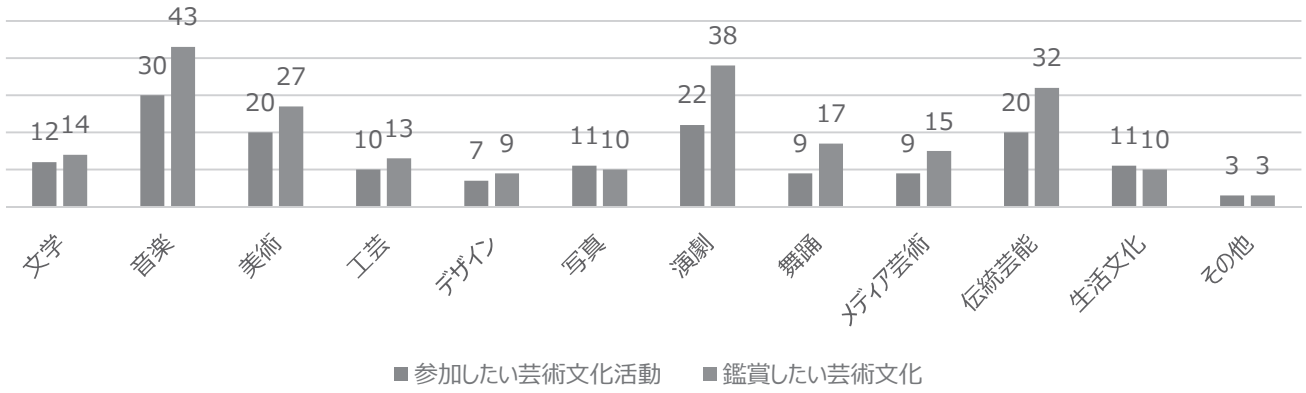
問３.今後の文化芸術活動の復興に向けて、必要とする支援は何ですか？（自由筆記）	
資　金	1)資金…同4人
	2)活動資金(助成金を含)が先に立つ。何をしようにも資金不足で働けない…同２人
	3)何をするにもお金がかかる。入場収入だけでは賄いないきれないところも多い
	4)市民団体等のホール利用時の使用料を安くして欲しい
	5)まだ被害にあった着物が準備出来ていないので助成金を出して欲しい
	6)地域の人たちに良い(優れた)音楽、又は演劇鑑賞をしたいと思うが高額な資金がいるため、なかなか実行できない。ついてはそういうところに助成金、又は支援があれば大変助かる
	7)各種団体の助成、助成金等
場　所	8)活動や発表する場所の確保や活動しやすくするための環境を整えること…同7人
	9)場所、施設、会場までと会場のアクセスと駐車場
	10)会場を無料で借りられること
	11)今後２～3年、市民文化会館建設まで待たなければならない。文化芸術を発表する場がない。また練習場所の固定化。廃校体育館の活用と充実化
ひと・人材育成	12)専門の指導者
	13)人材(財)の育成に関する支援(財を生かすのは人)…同3人
	14)後継者育成に取り組むための研修を行って欲しい
	15)中心となって活動していく人とそれをサポートしたり資金面ではないかと思う
	16)施設整備費の助成と指導者の養成(亡くなった人の後継者を育てる)
その他の支援	17)表現をしたい若者たちに、助成金等を仕える手立てを教える、または助成金の申請の手続きをしてあげる
	18)申請の簡単な助成金制度。支援内容が一覧となった団体リスト
	19)理解と具体的な支援

その他の支援	20)イベント開催の助成制度に加え、他地区開催のイベントに研修に行ける費用の補助があれば、さらに活動が活発になる
	21)イベントや上映会の周知広報について、無料だと行政サイドの支援を受けられるが、有料となると収益事業とみなされ、行政サイドの支援をうけれなくなる。今後文化イベントも無料から有料になっていく中で、周知広報コストは大きな壁になるので周知広報について特別な支援が欲しい
	22)正直に言えば、コンサートを開いても少人数しか来ない。いつも決まった人しか来ない。スピッツが来たが、凄い人だかり。でもタダ(多分)。お金を取るなんかもってのほか。なんかコストを払ってても芸術活動したいという人は限られる(泣)芸人さんが来ても集まらない。悲しい…
	23)失われた機会、失われた交流スペースの復活のための資金的な援助はもっとも大事なことと思うが、復旧に際してその文化活動の歴史的背景などを資料としてまとめ、その文化的価値を地域住民が自ら再確認することが大切だと思う。東京文化財研究所が大船渡市末崎町の民族誌をまとめたのが良い例と思う
	24)地域内外での活動機会が欲しい。地域外に出るには移動費がネックになるので、移動費滞在費の支援が欲しい
	25)コミュニティの再生支援
	26)行政の理解と支援
	27)郷土芸能の保存活動は、発表するために要する装束を揃えることではなく、伝承されてきたものを途絶えさせず後世に伝えることにこそ本質があり、支援団体は、その本質について支援すべきものと考える。例えば、限界集落に伝わる芸能を保存しようとしても、それを継承する後継者がいなければ忽ち消滅してしまう。自分たちで保存伝承に努めなければならないにしろ何とか捻出できることとなる。むしろ、その過程にこそ、団体やコミュニティを育てる要素が内在しているのでは、と思えてならない
	28)民俗芸能の発表の場が遠くであればバス代やらの経費がかかる。今年からバス料金も3万近く値上がりし、地元での活動は良いが遠くのときがこれからは大変になる
	29)経済的助成はもちろんのこと私たちは「手づくり岩手」の同志の集まりで現在活動している
	30)活動記録や芸能の指南となる本やDVDを作成するための支援 <金銭＋方法論(人)>
	31)技術
	32)活動が安定するまで今まで通りの支援をお願いしたい
	33)ジャンルを問わず、出来れば一流の方々の舞台を拝見したい。もしくは一流でなくとも子どもたちが一生懸命にする舞台は感動する。一生懸命な方の舞台を拝見したい
その他	34)支援など当てにせず自立すること
	35)もっと地域ぐるみで活動出来ればやる気も変わってくるように思う
	36)私の所属する短歌会では今年25周年を迎え合同歌集を作ることにしたが、助成を受けないで作ることになる。20周年記念誌の場合も私たち会員が資金を出しあって作った。そして県立図書館等からの寄贈依頼により贈呈しており、まあ好きでやっているといえばそれまでだが
	37)支援について…本当に必要なものは点滴ではなく患者の気力と自発性です。例えは悪いですが患者に親身になって相談に応じてくれる立場になっていただけたら、場合によっては発破をかけていただければ、付き合ってもらえるのが支援だと思う
	38)自分たちのやる気
	39)こまめに要望を聞くこと
	40)個人的には文化芸術活動は本来、支援を受けてやるものではなく(もちろん支援はありがたいのだが)人々が生活を営んでいる上で自然発生的に起こるものだと思っているので…ちょっと難しい。豊かな施設・機材がなくても出来るものだし、それらがあってもやらないところはやらない

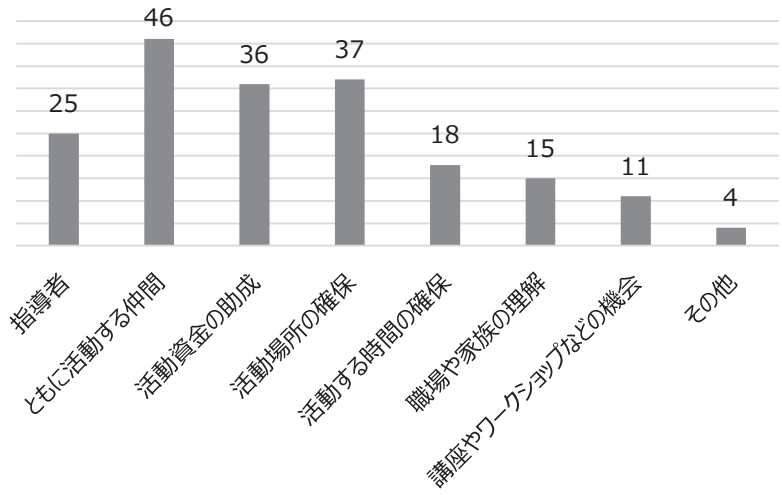
質問Ⅵ　地域文化･芸術について

コミュニティの文化を自らの宝物として継承していくことは、持続可能なコミュニティの形成に欠くことはできません。震災で祭りや芸能が人々の心の絆を深め、地域愛を育んできたことが明らかになりました。地域独自で築かれる文化は地域づくりの柱の一つです。生涯学習的な部分もありながら地域の誇りを保持するための大切な装置でもあり、観光文化資源と連動する貴重な活動でもあります。

問1.あなたは、どんな芸術文化に興味がありますか？（複数回答有）



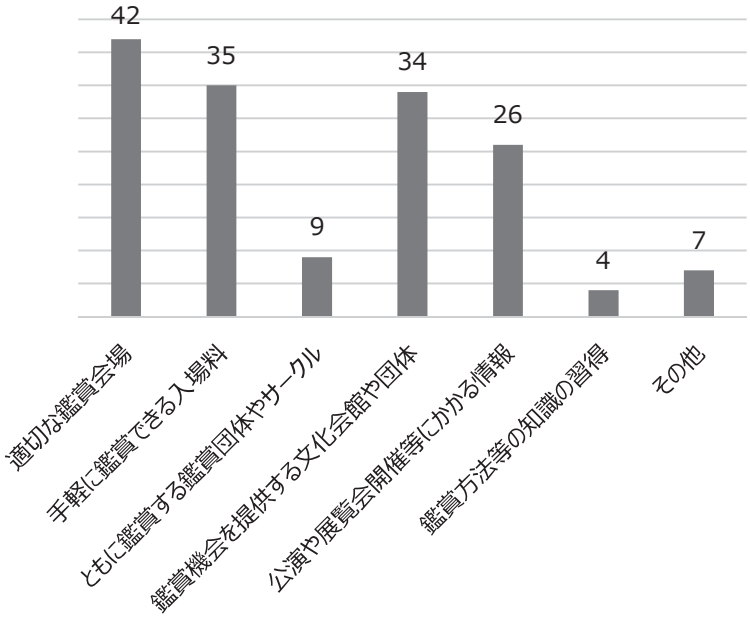
問２.あなたが回答した芸術文化活動について、実際にあなたが活動する上で、これから何が必要と思いますか？



＜その他の回答＞

1)健康　2)高齢でも教えられることがあれば関わってみたいと思う　3)道具・衣裳　4）生計不安の払拭

問3.あなたが回答した芸術文化について、実際にあなたが鑑賞する上で何が必要と思いますか



1)生活範囲内の地域での鑑賞の機会

2)別に身近になくても仕掛ければよい

3)地域みんなの「やる気」と「元気」これに尽きます

4)時間

5)文化施設、担当者の充実と資質

6)町での鑑賞機会、回数、種類

7)身近な文化芸術も大切だが、ハイレベルな機会にも多く触れたい（地方は少ない）

質問Ⅶ　文化復興によるこれからの10年について

問１	10年先の被災地の文化復興を考える上で大切なことは何だと思いますか（自由筆記）
基盤整備・復興	1)文化の前に生活再建
	2)特に来年以降は気仙地域で見れば、かさ上げで計り知れない影響がある。人の集まる場所とチャンスが必要
	3)伝統芸能の立場から。伝統芸能は地域の「生活」そのもの。しかし現代では責任感、使命感、そしてある意味で余裕のある人しか活動に参加できない。復興は文化復興というくくりだけでなく、地域の総合的な復興がなされれば自然とついてくると思う
	4)地域コミュニティの維持発展が不可欠と思うが、人口減少により地方都市の消滅の危機が叫ばれる中で、地域コミュニティの維持そのものが困難だと日頃痛感している。先ずは地方の都市をどのようにしたら存続できるのか、抜本的な施策が必要と思う
	5)今、復興が予定よりだいぶ遅れている状態で人口減少がかなり進んでいる。老人ばかりの町になるんじゃないかと不安。若い人たちがたくさんいて子どもたちが賑やかな元の町なってくれることが一番だと思う
経済・くらし	6)文化復興の前に経済の復興である。ご飯が食べれなければ、文化復興もない。心に余裕が生じない。全てこれに尽きる
	7)人口減少の歯止めとなる政策、経済活動の確保…同2人
	8)一日も早く仮設から出て、震災前の生活に戻らないことには回答が出来ない
	9)先のことはよく分からないが、まず生活の安定を望む。そして心豊かになって文化を楽しめればな～と思う…同2人
	10)被災地におけるコミュニティの再生、及び人材育成。そのための生活保障(ゆとりある生活)と活動の場の保障
	11)経済面での豊かさが伴ってこそ初めて文化面に余裕が出ると思う。若い人たちが安心して住めて家庭を築けることを祈っている。また指導者の育成にも力を入れて欲しい
	12)「衣食足りて礼節を知る」のことわざがあるように、沿岸部で大切なことは仕事があること。暮らしが成り立つことが一番だと思う
	13)そもそも芸術など個々の感受性の問題である。被災地というカテゴライズで「復興」と論ずる類の話ではない。人々の暮らしが変わればそれに伴って変わっていくもの
地域・まちづくり	14)地域に専門家をこまめに導入すること
	15)今までの伝統を重んじたものも新しいものも総てを受け入れる風土づくり
	16)未来を担う子どもたちがスムーズに活動できるような基盤を作っておきたいことと、誰もがここにいたいと思う魅力ある文化的な設備、環境を作りたいと思う
	17)地域がまとまりがあり活動の輪を広げていくこと
	18)その地域にあった方法や地域人たちと共に作り上げること
文化	19)市民の文化度を育てる(無料に慣れすぎた)
	20)文化復興のため、中心となって活動する人が大切だと思う。そして文化に興味、関心を持つような環境を築くことだと思う
	21)震災から逃げないで常に震災を意識し、防災をからめた芸術文化を推進して欲しい
	22)被災地だからといって、何でも無料公演してしまうと、そこの芸術文化振興は大変なことになってしまう。芸術を鑑賞するということは、本来、身銭を払って行うものであり、だからこそ観客は真剣に鑑賞することになる。無料公演は常態化してしまうと、有料公演では集客できない自体となってしまう、被災地の文化振興は大変なこととなる。（長期にわたって不振に陥ってしまうだろう）それは、生活物資など他の支援であっても同じことが言える。被災直後にあっては支援物資・被災地の地域商業経済を破壊することにもなりかねない
	23)ただで受け取るのではなくそれなりの負担をして楽しむべきだと思う。するにしても見るにしても。好きな祭りを続けるにしても自分たちでできるだけ金を集めて行うべきと思う
	24)みんなは文化復興よりも手に職をつけたり利益になる方へ行きたがる。10年先、子どもの数は少なくお年寄りは多い、それぞれがその人の個性を生かした文化芸術があると思う。町にはスーパーと食堂と薬局と…もっと文化や芸術の施設が欲しい
	25)都市部でソールドアウトするイベントを被災地に持ってくれば、必ず交流人口が増える。そのような大胆な発想で、新しい文化を創る気構えがあれば、地域は必ず再生していくと思われる
	26)当町の文化施設にはほとんど被害がなかったようなので、種々な種類を鑑賞できれば良いがそれらを鑑賞できる人が少ないので、それらの育成が必要でないだろうか
	27)市民会館が市民にもっと有効に活用され質の良い音楽が楽しめるようになってもらいたい
	28)文化施設、担当者の充実と資質
継承・人材育成	29)後継者の育成…同2人
	30)人材(在)育成…同4人
	31)組織力の強化、チームワーク
	32)活動資金及び後継者育成(後継者育成には地域に残る若者の数によると思う)
	33)被災地の人口減は明白となっており、子どもたちに文化継承していく方々の育成者の支援が必要

継承・人材育成	34)人口減少の続く市町村において、芸術、文化の生き残りは難しい。地域に根ざした伝統文化を細々でも良いが絶やさない努力が必要
	35)当町の文化芸術団体の多くが後継者不足に悩んでいる。若者の取り込みが出来ず(地元にいる若者自体も減少している)見通しは厳しいと思われる
	36)拠り所なので復元出来る限り、もとの形にして継承していければ良い
	37)薄らいでいたもの、忘れかけていたものを今一度見つめ直した震災だったかもしれない。どうあれ継続していくことが大切。そして多くの人に浸透させていくこと
	38)もともと過疎化が進んでいた町が震災により、町外に移り住む人々が増え、さらに深刻さを増した。各地域ごとに継承されてきた郷土芸能も、継承者を他地区や町外からも受け入れるなど柔軟さが求められると思う
	39)学校教育、特に中学校、高校生の後継者育成を考えて欲しい(特に郷土芸能について)
	40)とにかく細々でも活動を継続していくこと
	41)やはり継承者次第で文化復興の将来が決まると思う。限られた継承者ではなく大勢の方々が支え、伝えていくこと。まだ10年。高齢者が居るうちにしっかり伝承してもらう活動も大切なのでは
子ども・若者	42)今回の震災を風化させないことであり、次の世代へ伝えていくことだと感じている
	43)意味を作ること。子どもたちの記憶に残ること。つまりボランティアの人々との長い意味での人間関係を作ること。絆。つながり。そうした心の関係性を作ることのために行政はバックアップすべき
	44)高校卒業を期に多くの若者が故郷を離れてしまうため、それ以前の段階で多くの芸術や郷土に係る文化に触れ、体験する機会を作ること
	45)20代、30代の若い世代が仕事以外にも生き生きと活動できる団体づくり、時間、場所の提供が必要であると思う。それが次の世代へつながっていくと考える
	46)自分たちの活動が地域の文化である自覚と、子どもたちが将来、自分の体験が貴いふるさとの想い出として心に残るような交流活動となるような運営を心がけているが、新たな町づくりの核となるのは伝統芸能でもある。コミュニティー再生の正念場が今後10年
	47)日本は自然災害の多い国土である。とりわけ三陸は繰り返し大津波の被害に遭ってきた。しかし我々の祖先は逆境からそのたびに立ち上がってきた。大震災に遭遇した私たちは歴史の当事者と言えるだろう。祖先から受け継いだものを大震災の経験を加え子孫に残していく。そういう姿勢が大切だと思う
	48)これからの地域を担っていく子どもたちに文化的な教育をしていくことだと思う
市民(住民)意識	49)時間はかかるものの文化復興の意味をもっと市民に知らせるべき。そのことが地域の活性化につながるようなことでなければ文化の消滅、人々の減少になりかねない
	50)市民のための会館。管理は他人任せにしない。いつでも人が立ち寄れる雰囲気のあるもの
	51)住民の底力(無理にとはいえませんが)
	52)地域みんなの「やる気」と「元気」、これに尽きる
	53)無理にさせられる活動は続かない。住んでいる自分たちが地元の良さを認識して継続していくことが大切で、外部団体の良いものを見る機会が良い刺激になれば良いとは思うが基本自分たちが楽しめることであると思う
その他	54)10年先のことなど考えたことがない
	55)劇団青い海第46回、釜石市民劇場第28回、地元釜石市。子どもたちも多数(小中学生)参加してほほえましい！
	56)息切れしない程度に持続できることを見つける～少し強くなる今までの型に捉われない
	57)震災前通りで十分
	58)現在は少しずつ前向きに歩み始めてきているが、高齢化が進み、どのようになるのか考えることしばし

問２　　10年先の被災地の文化復興を考える上で、要望することはありますか？（自由筆記）
①国へ
1)地域再生の事業・人が集まる事業を地方で重点的に実行していただきたい
2)文化会館の早期着工。早期に皆が集まる施設の建設。施設の充実
3)(活動者)地元での自由度のある財政支援
4)資金返還のないものでの交付金、オリンピックも大事だが復興に力を。一日も早い復興
5)国が先頭に立って地方(被災地)に目を向け大型予算をもって活性化して欲しい。県も市町村も国次第。目線で見下さないで真剣に考え、目を向けて欲しい
6)文化の継承も地方分権としてしっかり理解し認めること
7)地域の特性を大事にして欲しい
8)地域の生業である漁業、農業を大切にして欲しい

9)助成制度のうち、出演団体の謝金が補助対象であれば、イベント開催が継続できるし、盛んになると思う
10)地方創生が今までとどう違ってくるのか
11)きちんとしたお金の流れで、正しい復興のためにそのお金を使って欲しい
12)国政をしっかりとあやまった方向へ進まぬように
13)20年程前、郷土芸能等に関する法律が出来たはずだが活用が見られない
14)伝承芸能保存に対して長期の支援
15)人的資金的支援。
16)各学校で民俗芸能にかかわる子どもたちを一緒に育てていける体制をとって欲しい
17)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする。心のケアは一番大切
18)学校教育で郷土芸能を考えて欲しい(指導については私たちが協力致します)
19)各県への積極的な支援
20)中央でばかり事業を展開しないで地方でも多くして欲しい。特に市町村
21)被災地での文化芸術活動を長期的に支援して欲しい
22)文化復興への予算措置をお願いしたい
23)活動の励みにもなる無形文化財への指定促進
24)生活再建及び市町村、芸文協、民間団体への助成等財源保障
25)ハードの復興も大事ですが、ソフト(地域文化)の復興も大事です
26)文化復興に対して紋切り型でなく各地域を理解したうえで支援して欲しい
27)地方の人口流出を食い止める抜本的な施策
28)芸能を次世代に伝えるにあたり、まだ最低限の道具しか揃っておらず数年先が見えないため、土地などの盛土など早めの計画
29)公共の交通機関の整備を進めて欲しい。人の移動手段があると活動も活発化すると思う
30)心の豊かな国づくり
31)高台造成等、早く家を建てられるようにして欲しい。
②県へ
1)職務として実施していただける文化コーディネーターを配置していただきたい
2)文化会館の早期着工。早期に皆が集まる施設の建設。施設の充実
3)(活動者)地元での自由度のある財政支援
4)使い道を限定しないで市町村に一任できる体制
5)国の顔色ばかり伺わず文化多彩な岩手の誇りを持ってもらいたい
6)市町村の個性を大事に。地域の特性をもっと外のＰＲすべき
7))地域間の芸能の交流の場の提供。地域の芸能についてのライブラリーやアーカイブの作成
8)きちんとしたお金の流れで、正しい復興のためにそのお金を使って欲しい
9)有形、無形文化財をもっと掘り下げてもらいたい
10)伝承芸能保存に対して長期の支援
11)人的資金的支援
12)もっと子どもたち同士が発表できる場所を作って欲しい
13)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする。心のケアは一番大切
14)学校教育で郷土芸能を考えて欲しい
15)各市町村への積極的な支援
16)ハードの復興も大事ですが、ソフト(地域文化)の復興も大事です。一日も早い復興
17)芸術文化協会に対する助成が少ないのではないか
18)文化芸術振興基本条例が策定されたものの沿岸＝被災地市町村には効果が見えない。具体策を提示して欲しい
19)活動の場、鑑賞の機会を作って欲しい
20)活動の励みにもなる無形文化財への指定促進
21)生活再建及び市町村、芸文協、民間団体への助成等財源保障
22)指導者の派遣や講座の開設、楽器の支援など
23)文化振興事業団から出る補助金の範囲を広げて欲しい

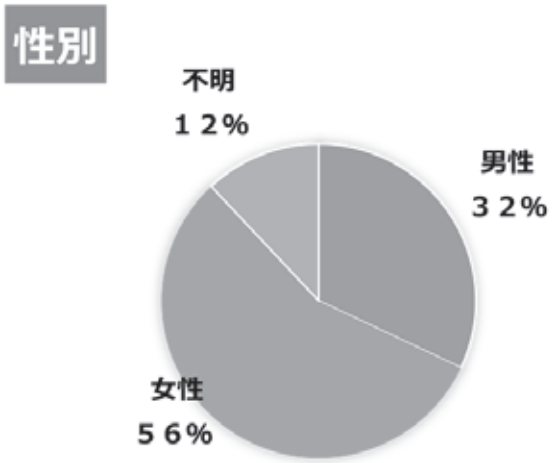
24)道路の改良。公共の交通機関の整備を！進めて欲しい。人の移動手段があると活動も活発化すると思う
25)県を一つのテーマパーク化へ
③市町村へ
1)若者を中心に支援をする仕組みづくりが進んでいるので、このまま継続していただきたい
2)文化・芸術の興味関心をもたせること
3)(活動者)地元での自由度のある財政支援。助成金
4)財産登録一覧表の作成(除去と再申請の手続き)
5)地域の伝統文化の研究をもっと詳細に、そしてアーカイブス化
6)10年先、100年先を見据えて、芸術文化の復興は心の復興になると思う。自由な気質が育まれる土壌づくりが必要
7)発表の場の提供、イベント等の周知広報への支援。備品購入の支援
8)市民へ文化の持つ意味をもっとお知らせすべき(広報紙だけではダメ)
9)きちんとしたお金の流れで、正しい復興のためにそのお金を使って欲しい
10)特に町単位では積極的に推進すべき。積極的な支援、事務局
11)職員、担当者の資質の向上をお願いする
12)伝承芸能保存に対して長期の支援
13)文化施設、地域のコミュニティの充実。早期に皆が集まる施設の建設
14)学校の先生の文化復興、民俗芸能に対する考え方をもう少し良いものにして欲しい
15)文化活動は被災地復興の中で低く考えられている気がする
16)早く市民会館、図書館等を建設して。市民会館を市民が使いやすい会館に
17)具体的な活動をする。
18)被災した郷土芸能が残るための方法を考えること。学校教育で郷土芸能を考えて欲しい
19)十和田市に行った。近代美術館に行った。街全体がアートになっていた。参考にして欲しい
20)若い世代への文化の浸透
21)文化振興に地域に対し指導力を発揮して欲しい。文化復興に関心のある職員を養成して欲しい。文化復興の実現
22)復興のビジョンを持ち示すこと(ハードのみならず地域再生に向けてのプログラム)
23)文化活動に対するやる気が今ひとつ感じられない
24)津波の被害のない場所へ市民会館を移転すること
25)国・県からの情報を一般住民にこまめに周知して欲しい
26)文化協会への助成金を考えて
27)国や県職員に比べ職員の資質が低く、モラルも低いと感じる。多くの地方では市町村の役場は地域一番の企業なので、高い資質を持って欲しい
28)様々な団体の活動をもっと取り上げて欲しい
29)コミュニティの再構築するための人材育成
30)七夕保管用の建物、または製作用の建物が必要
④県や市町村の芸術文化協会へ
1)所属団体の利益だけでなく、文化団体の組織が無い若者が自主的に行う文化活動にも支援できるような仕組みを構築していただきたい
2)文化・芸術の興味関心をもたせること。地域内外への活動状況の広報、PR活動
3)支援交流を多くして欲しい。発表機会の設定。活動団体支援
4)芸術文化(郷土芸能)を盛り上げるように口にはしても、この団体には資金がない。芸術・文化で活気づけようとするならば助成が必要
5)国・県からの情報を一般住民にこまめに周知して欲しい。情報共有
6)芸術文化は遊び心を持って
7)どういう活動をしているかわからない。より開かれた活動と情報発信を心がけて欲しい。存在を知らないのでアピールして欲しい
8)いつまでも被災者ではなく復興者として前に進んでもらいたい
9)文化芸術活動の復興
10)親身になってサポートする。手助け
11)企画の窓口
12)活動も以前に戻りつつあり、頑張ってもらいたい
13)指導者を増やす。後継者育成。地域住民に対する指導が大切では

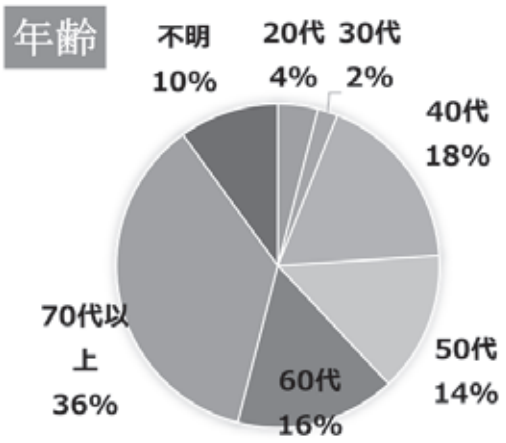
14)出演料をもっと上げて欲しい
15)もはや大物ライブゲストしかない。福山雅治、サザンのコンサートだ。難しいだろうけど、ネットワークづくりして欲しい
16)現役の活動中の若者に多くの機会を与えて欲しい
17)県芸文協によるNPO法人化に向けた研修を実施して欲しい
18)今までの芸文協主催の音楽活動は場当たり的で芸術とは程遠い。もっと計画的に。レベルアップを！
19)異なる分野であっても横のつながりを保ち刺激しあう関係
20)今まで通りで良いが資金が足りない
21)芸術文化活動をしている団体同士の情報交換、交流の場を設けて欲しい
22)みる人、みる目を養う活動
⑤文化芸術活動支援NPOや民間団体へ
1)支援が必要な小さな団体は手を上げることすら出来ないので、足を使って苦しんでいる団体の情報を各種機関に伝えていただきたい
2)地域内外への活動状況の広報、ＰＲ活動。イベント周知
3)沿岸は3～4年でないと落ち着かない、それまで支援を願う(目標到達点設定と達成までの支援)
5)国の理解が不足しているのでは。アピール度引き上げを
6)今まで通りの活動を継続して欲しい。「3.11絵本プロジェクトいわて」には継続して活動して欲しい
7)一緒に活動してくれるのは良いが、単発で実際やってくる人たちに迷惑することもある
8） 高い志の持続力が必要、財政面の強化。人材育成
9)いつまでも被災者ではなく復興者として前に進んでもらいたい。
10)文化芸術活動の復興。いろんなところで活発な文化活動がなされている
11)他の団体へのつながりをもちたい。個々の活動を連携させた面的な活動に期待したい
12)助成金の申請をもっと簡単にして欲しい
13)多くの機会を与えて欲しい
14)他県などの方々との交流に大きな役割を果たした。今後も期待
15)存在を知らないのでアピールして欲しい
16)支援の内容を具体的に知らせた上で活動して欲しい
17)市民と行政ほかをつなぐ仲立ち役。各種団体の連携支援
18)情報と人員の提供、サポート
⑥地域の会社や住民へ
1)どこの地域にも優れた文化はあるので、あきらめずに地域の文化を盛り上げていっていただきたい
2)復興に関して経済活動のみが優先される傾向が見られるが文化面も含めて様々の面で総合的なバランスをとりながら考える心構えが必要
3)参加意欲と元気になれる様、発展に頑張ろうという気持ち。イベント周知、参加要請
4)地域を盛り上げ活性化させるためには他人事ではない住民一致団結である。そこに団体組織も協力することであると思う
5)中央文化に依存が濃いのは否めないがお互いもっと話し合う場が必要
6)身近なものとして触れる機会を
7)自分が動く、関心を持って努力する。他人まかせではだめ
8）「若者がいないことの将来について」真剣に考える機会が必要
9)いつまでも被災者ではなく復興者として前に進んでもらいたい。共に頑張りましょう…同3人
10)互いの理解。興味関心を持ってもらいたい
11)文化芸術活動の復興
12)積極的な参加要請(義務免制度の導入)
13)伝統を受け継いでいく意識を高めていく
14)たくさんの人に参加して欲しい。もっと仲間を増やしたい…同4人
15)スポーツだけではなく、もっと郷土芸能を考えて欲しい
16)上映の入場者を増やすこと(もっと足を運んで映画を見て欲しい)
17)会社や地域ぐるみでの参画を模索して欲しい
18)現在の活動している人たちがこの方たちも一緒にやりたいと思えるような実践することで、参加の輪が大きくなるものと思う
19)参画・協働意識及び行動。地域再生への活力そのものです。自主・主体性を

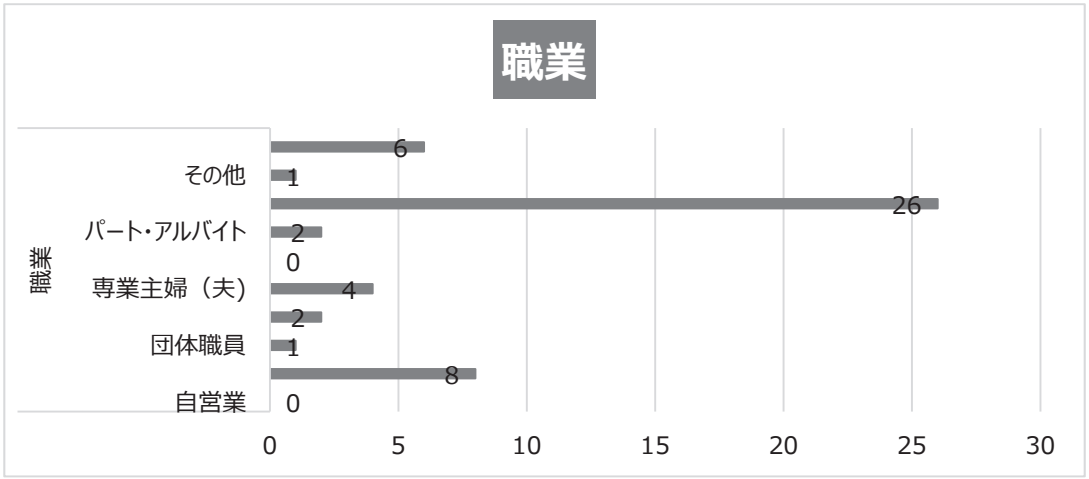
20)要望はほどほどに。子どもたちに恥ずかしくない行動をしよう。大人は背中を見られているから
21)自分たちの住むところは自分たちで作り上げるという意識を高めて欲しい
22)地域の催し物に参加する(空席を減らす)
23)地域密着型。
24)利益の直結には遠いけれど、人々や地域の物心を支えて欲しい
25)全国展開している企業はなかなか地域の活動へ力を貸してくれることが少ない。せめてチラシを置くとかポスターを貼らせてくれるとか何かしら支援して欲しい
26)支え続けること
27)制作から参加又は金銭的な協力
その他
1)国やら県やらＮＰＯやらがどうこうする話ではない。文化に復興という言葉をあてがうのも10年という時の区切りを設けるのも、その意図がよく分からない
2)とじこもっていないで大いに参加してみんなで交流を…
3)私は国や県などに要望することを書ける立場にないし、上手く書けない。でも文化復興は絶対そうなって欲しい。どんなに規模しい現実があっても夢をもてる、夢がみられる、夢を追いかけられる、夢を見続けられる、そしていつか夢をかなえられる、そんな未来を夢見る人たちが10年先いて欲しい。そういう人たちを育てて欲しい。お願いします

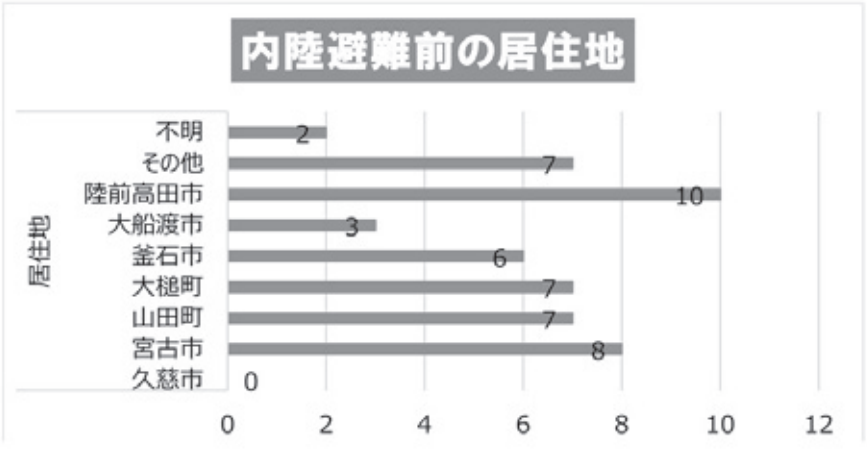
岩手県内陸避難者の
文化芸術活動における市民意識
調査

回答数　50 人/配布 720 人（回収率 7%）









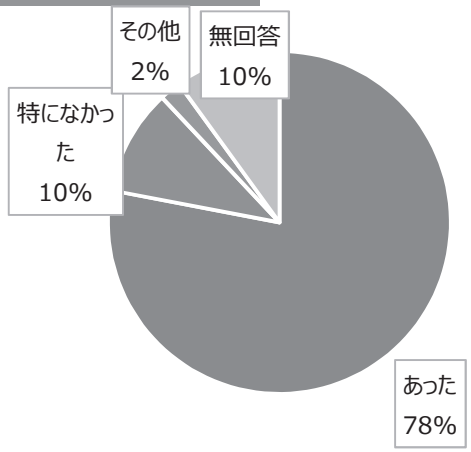
質問Ⅰ　祭り芸能の復活と今後について

震災後、民俗芸能や祭りが被災地の心の復興に大きな役割を果たしてきたことは言うまでもありません。それは、コミュニティの再生の願いであると共に、死者への鎮魂、祈りでもあります。そこで、被災地の祭り芸能の復活と今後についてお尋ねします。

問1.あなたが震災前に住んでいた地域には、継承されている祭り芸能がありましたか？

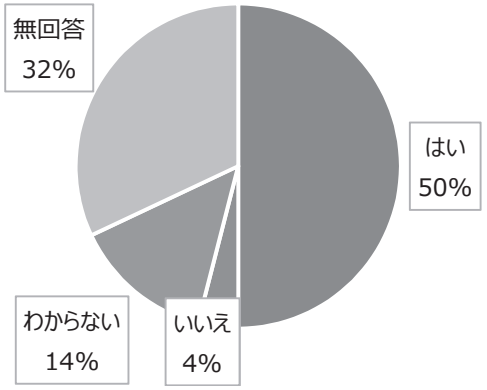
＜それは、どのような祭りでしたか？＞

宮古市	なもみ、神楽、宮古夏祭り、宮古大漁祝い唄、神社の祭典時、神輿巡回時、部落ごとに伝承されている発表の機会があった、宮古市熊野神社大祭における鍬ケ崎上町子ども神輿の巡行
山田町	山田祭り、山田八幡神楽、大杉神社、虎舞、山田八幡宮例大祭…2人
田野畑村	大神宮祭典（感謝祭）
釜石市	虎舞…４人、神楽…2人、釜石よいさ、七福神
大槌町	大槌まつり…２人、虎舞…3人、いなかの祭り
大船渡市	赤沢鬼剣舞、虎舞、笹崎獅子踊、平七福神
陸前高田市	けんか七夕…３人、仲町町内会七福神、権現様、黒埼神社5年祭り…2人、七夕祭り、動く七夕まつり…2人、太鼓フェスティバル
県外	わらじ祭り、気仙みなと祭り、鹿折虎舞（気仙沼）
その他	あったと思うが震災にて気絶しており、いまだ記憶があるようでない。思い出せない



問2.＜問1で①と答えた方のみ＞その祭り芸能は、震災の影響を受けましたか？

宮古市	1)住民の分散、集会場も失った
	2)町内はじめ鍬ケ崎地区一帯が壊滅状態になった
山田町	3)笛太鼓、衣裳等全てにおいて被災したと思う
	4)道具類の流失、人的被害。神輿が流された
	5)踊る人がまちまちになったようだ
	6)大杉神社の神輿等の祭りの神具を津波で失う。それでも震災の年に祭の芸能パレードは復活した。多くの人々の義援金で震災後４年目で祭りは復活した
釜石市	7)頭が流された。住人がバラバラになった
	8)虎頭、神楽、屋台の流失
	9)釜石尾崎神社の例大祭にともない御神体を守る神楽等とともに御通りに加わっていた。海の神の祭りと思っている。震災後は港から島へ出られなかった。舞い手の多くが海側に住んでいたため、場所、人、気力がなくなった。交通手段も悪い
	10)お祭り道具が流された。その他多くが流出
	11)道具の流失、及び舞い手の被災
大船渡市	12)赤沢鬼剣舞は、道具は保存になったようだが踊り手が分散したため中学生が踊っているようだ
	13)笹崎獅子踊りは地域全体が流出したのでわからないが中学生が伝承
	14)平七福神は大船渡中学校の生徒たちが文化祭に伝えているようだ
	15)地域の公民館が全壊したので大変だった
陸前高田市	16)町民が少なくなり、小さな祭りになった
	17)祭りに関わる市民、祭具が全てなくなった
	18)メンバーの半分は津波で流され、町内は壊滅。町内会も解散した
	19)権現様本体、太鼓等が流される



陸前高田市	20)七夕祭の数が少なかった
	21)山車の流出、住民(町内会）の離散
	22)図書館、博物館、体育館、すべて津波で流された
	23)七夕に必要なものが全部津波で流されてしまった。全町の家々がほとんどなくなり、人々は全国に散らばってしまった。悲しい状態！
その他	24)海での祭りでの楽しみが減った

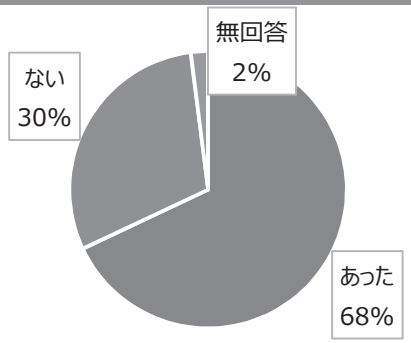
問3.祭り芸能の今後の活動に必要なものは何だと思いますか？（自由筆記)

復興	1)早めの地域の復興
	2)地域のコミュニティ再生が必要
	3)住居が定まって欲しい。コミュニケーションの場
	4)その地域に住む人々の強いコミュニケーションと、地域の伝統文化を末永く続くよう守ろうとする意識の高まり
	5)環境が整えば、たとえ人数が少なくてもやる気が住民にはあると思うので、まずは復興計画が進むこと
	6)祭りには人が大切だと思う。まちが出来なければ活動も継承もできないと思う
	7)定住できる環境、職場づくり
継承・育成	8)学校の行事で伝統芸能の授業の時間を組み込み、地域の大人と子供が触れ合うこと
	9)世代間の交流
	10)次世代に伝承しなくてはならない。またその意義を明確にしなければならない
	11)中心になる人
	12)口伝や実動の伝承は勿論だが、きちんとしたマニュアルが必要。記録として残すことも、担い手の育成には必要。大切なことと思う
	13)町内そのものがもうないのだから町内の枠を越えてやりたい人、やってみたい子どもたちを大々的に募集するなどするしかないと思う
	14)子どもが少なく部落だけでは継承するのはむずかしい
	15)若い世代が郷土芸能に関わったり見知ったりする機会が必要だと思う
	16)若手の育成や継承していく子どもたちの育成、支援が必要だと思う
	17)お囃子の音が故郷を思い出される。何歳になっても自分の体の中に湧き上がる情景を忘れたくない。孫たちにもあなたたちの生まれたところと伝えられるよう芸能保存して欲しい
	18)復興とともに虎舞等、目にすることもあったが、虎の頭の作り方や胴、人が履くズボンが以前の虎のものではないと感じる。まず衣裳の復元を望む。継承には芸能が受け継がれてきたことの意味を伝え、虎舞にしても年齢の低い子どもの役(踊り)もあったので、大人が礼儀を重んじた上で継承していくことが大切だと感じる。芸能祭の踊りを見ていても以前はもっと勇壮だった。若い力の踊りに加えて、以前の虎の胴の動き、足の動きは生きている虎そのものだった。踊り手も汗だくだったが、今のは虎に人が入っている
	19)人と人の絆だと思う。山田町も人口の流出があり、高齢化がさらに深刻になっている。若い人たちに、伝承の思いが続くことが大切だと感じる
その他	20)より多くの人に知ってもらえるようなアピール
	21)転勤地で被災したため、私自身は被災地出身ではないですが、地元の人たちは自分たちのために頑張って欲しいと願っている
	22)神社は高台にあり、危ういところで無事だった。その前に神輿等を入れていた倉庫が流出、全壊。神輿は高額なものだったが、3年で宝くじ助成等で購入して祭りを復活した。部落の人たちが高台に移転したので神輿を担ぐ人が少なく、これからの課題だと思う
	23)鍬ケ崎地区一帯が壊滅状態だから住民が皆ばらばらになり、旧来の場所に戻るか否かも不明だから何とも言いようがない。平成23年7月盛岡に移住、郷里宮古市に戻ることはないと思う

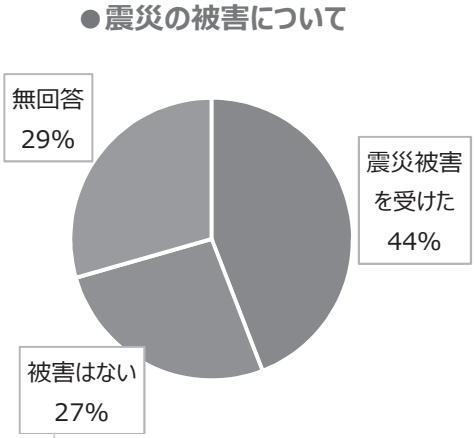
質問Ⅱ　文化施設・生涯学習施設のあり方について

岩手県における文化施設・生涯学習施設は深刻な被害を受け、建物の流失または破損、職員が犠牲になった地域もあります。また、幸い被害を免れたところは、避難所としてあるいは支援センターとして、支援イベントの受け入れ会場として大きな役割を担いました。そこで、被災地・内陸部共に地域の文化施設や生涯学習施設の今後のあり方についてお尋ねします。

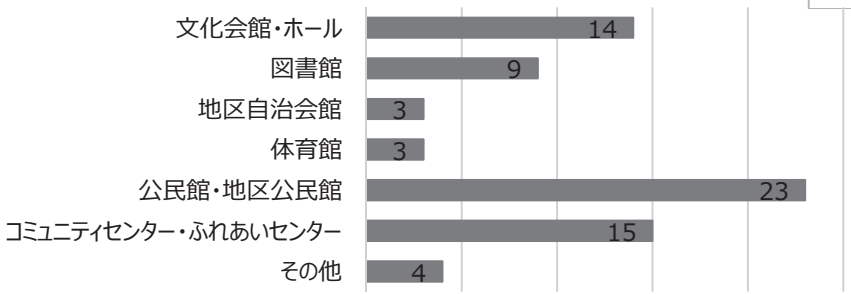
問１．あなたが震災前に住んでいた地域には、よく利用していた文化会館・ホール、図書館、公民館コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設がありましたか？



●震災の被害について



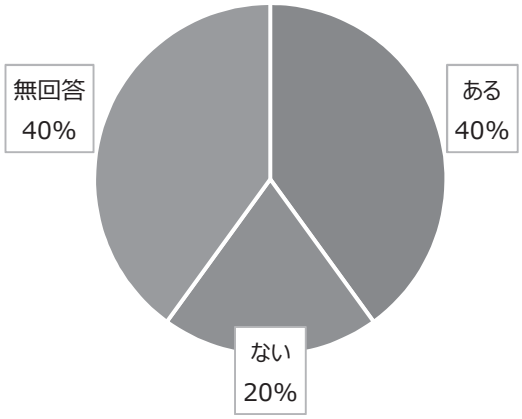
●どんな施設がありましたか？



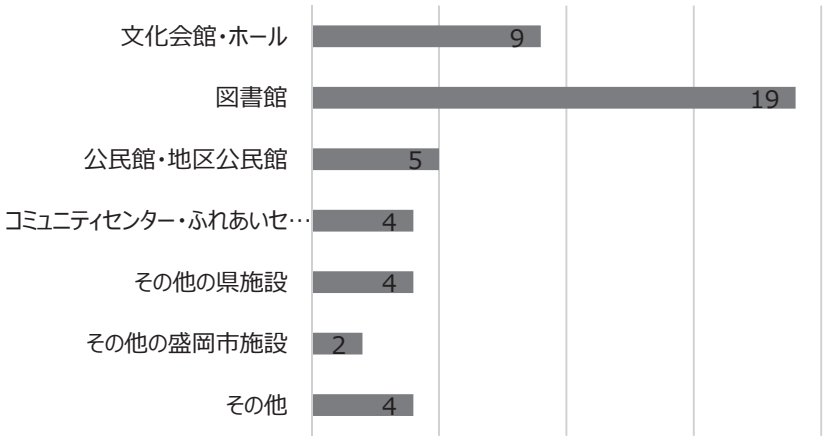
※青葉ビル、漁業集落センター、防災センター

※小学校、博物館

問２．現在あなたが住んでいる地域でよく利用する文化会館・ホール、図書館、公民館、コミュニティセンター等の文化施設や生涯学習施設がありますか？



●どんな施設を利用していましたか？



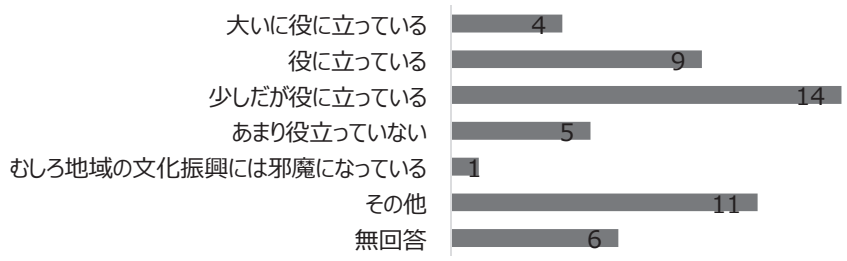
※その他の意見…公民館はあるようですが近所とのお付き合いはしていない

問3. 震災前に住んでいた地域の施設、または現在利用している施設に対してあなたの考え、または感じていることをご記入ください（自由筆記）
1)公民館・図書館は地域ごとに必要。集約化しないで欲しい
2)近くにそのような施設があるのかないのかすら知らない
3)あまり利用していないのでわからない
4)震災前に済んでいた地域の施設が早く出来るように。その前に町が早く出来て、仮設住宅に住まなくても良い状況になるように
5)足が悪くて行かない
6)地区の自治会館がないので近所の人との接触がない。内陸に来てからは地元の人との接触は全然ない。情報がない
7)盛岡では主に県の公共施設を活用しているが、身近な地区の施設については情報が少ないし、住所も地元のままなので利用するのに遠慮がちになっている
8)現在地に自治会単位の集会所がない(他はあるようだが)。仕方なく近くの生協を有料で借用している(一回午前午後各500円)。助成いただけないか
9)震災前に住んでいた土地は、バス等足になるものの本数が少なく、なかなか利用しずらい(不便な)状況だった。しかし、今住んでいる土地は利便性がよく、図書館もバスですぐ行けて便利
10)様々な物事に触れることが出来、自分が豊かになれる様な気がする。必要だ
11)釜石市の文化会館については、今どのような使われ方をしているのか分からないが、「安心で安全な」とはいかなくても、立ち寄れば安らぐような、多方面に避難している方々が気軽に立ち寄れる場、迎えてくれる場、待っていてくれる場としてアピールして欲しい。活発な情報の発信をして欲しい
12)盛岡市内における文化施設の充実は、沿岸のそれらとは比較にならない。震災前まで住んでいた沿岸地区でのそれらの貧弱さは一岩手県民としていかに今まで恵まれていなっかたか痛感せざるを得ない
13)コミュニティーを作るきっかけが欲しい

質問Ⅲ　文化振興における市民協働とNPOが果たす役割について

岩手県内においても指定管理者制度の適応拡大により、市民の目線に近いNPOの存在が大切になります。地域の多様なニーズに適応するコーディネートを担うNPOの役割についてお尋ねします。

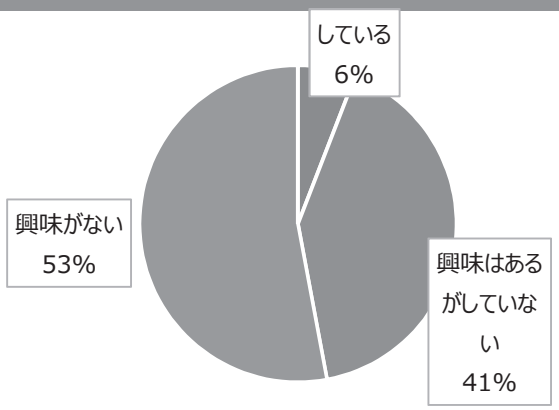
問1.あなたの地域では、文化振興にNPO活動が役立っていますか？



＜その他の回答＞

※わからない、無駄な遣い方をしている、老齢のため実感がわかない

問２.あなたは現在、文化活動にかかる市民活動やNPO活動に参加していますか？



＜興味はあるがしていない人の理由＞

・仕事が忙しい

・震災による病気・怪我の治療中のため

・仕事でかかわっているから

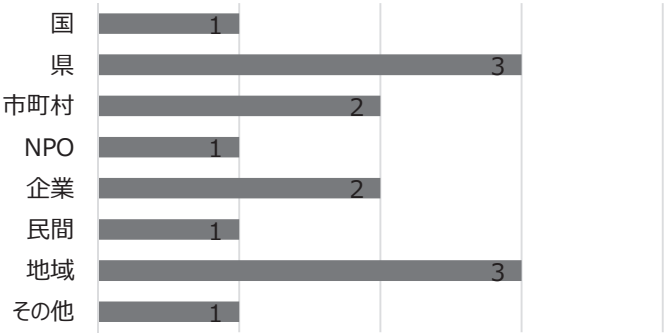
・地元から来ている数少ない知人

・興味はあるが現在病のため出来ない、健康でないので…同２人

・NPOのことがよく理解できていない。今まで関心を持ったことがなかった

・試験が間近なため

問３.＜問1で①と答えた方のみ＞あなたの活動で協働するパートナーは誰ですか？（複数回答可）

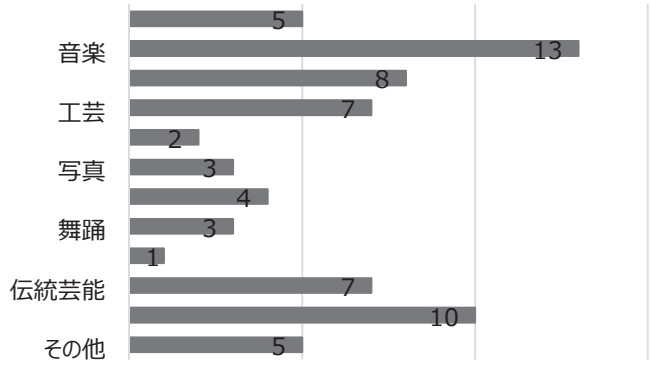


問４．東日本大震災で文化活動にかかるNPO、あるいは市民活動が果たした役割は何だと思いますか？
1)具体的にどのような活動をしているのかあまり知らない。よくわからない…同３人
2)初めて(復興支援)センターからの連絡が来てか、ら外に出て人と会える機会が出来た。センターの方に笑顔で迎えてもらえるので安心感がある
3)ボランティア活動の体系化、組織化がスムーズに行われたと思う
4)ここ数年で増えたNPO、そして震災で問題になったNPO、よく分からない。山田のNPOはひどいと思う
5)生活の中に潤いを感じるときがあった
6)震災で追った傷を癒す。コミュニティ形成。人とのつながりの強化
7)本当に声にならない人に、もっと手を差し伸べて欲しい
8)震災等の心の支え…同3人(人によっては少し救われた人もいると思う)
9)人の関わり方の大切さ
10)物資提供の世話、お茶会、趣味の会の世話、イベント(劇、コーラス、舞踊、歌舞伎、演奏会)の案内やチケットの提供、軽体操の世話等
11)復興への支援、人間参加(人間の強さ)
12)ストレスからの開放
13)途絶えさせてはダメだという思いのつなぎ役。心が萎えてしまった人々のかわりの心。行動出来ない人々に代わり行動
14)地域のことを考えて欲しい(NPO)
15)生きる力をくれたと思う

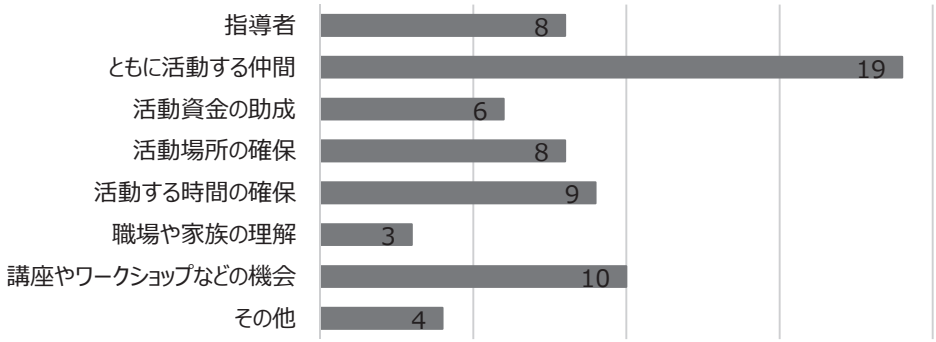
質問Ⅳ地域文化・芸術について

震災で祭りや芸能が人々の心の絆を深め、地域愛を育んできたことが明らかになりました。そして地域の「ことば」もまた地域独自で築かれる文化であり、地域づくりの柱の一つです。また地域から離れてもなお、文化芸術は地域の誇りを保持するための大切な資源であり、連携・交流するための装置です。

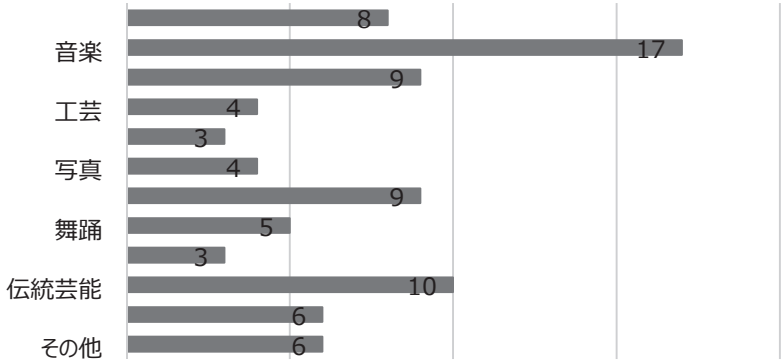
問１.あなたは今後どのような芸術文化活動に参加したいですか？



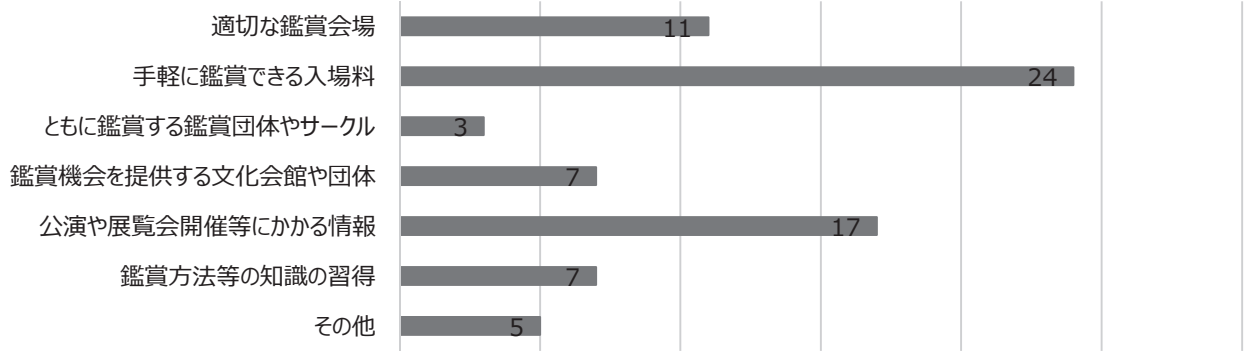
問２.問１であなたが回答した芸術文化活動について、実際にあなたが活動する上で、これから何が必要と思いますか？



問３.あなたは今後どのような芸術文化を鑑賞したいですか？



問４．問３であなたが回答した芸術文化について、実際にあなたが鑑賞する上で何が必要と思いますか



質問Ⅴ　文化復興によるこれからの10年について

問１	10年先の被災地の文化復興を考える上で大切なことは何だと思いますか（自由筆記）
復興	1)行政の働きかけによる教育の場の建設
	2)地域の早い復興、市民文化会館の再建
	3)国がその地域の人々の意見を聞き、必要としているものをもっとスピーディに実現させること
	4)文化復興に情熱をかけるエキスパートが必要
経済	5)ある程度の経済的ゆとり
	6)文化復興の財源
	7)個人が相互に自由に研鑽、発表できる場と多少の援助(資金)があればいい
地域・まちづくり	8)県都盛岡に住んでみて、いかに自分たちが住んでいた所は文化面にも遅れていたのかと気づき、同じ岩手県人なのに、と残念に感じた
	9)今は住宅再建が中心だが、併せて公共施設も含めた町づくりが計画されるのがベストだと思う
	10)国と県や地域の考えに差があるように感じるので認識や方向性を統一していくこと
ひと・交流	11)地域ごとに集まりやすい場をつくること
	12)相当数の人が入れ替わり、少なくなるなかで、人間関係を大事にしたい
	13)人口を増加させること(人がいないと活動が出来ない)
	14)交流を密にすること。伝承すること
	15)地域と地域の交流(同じ地域の交流)
	16)人と人が心を結び付けることだと思う
子ども・若者	17)世代をこえた交流が必要だと思う。例えば学校などでの取り組みも必要か
	18)若者が文化に触れる機会が必要だと思う。そのためには魅力的な街づくりを含めて、若者がその地域にとどまる工夫が必要だと思う
伝承・継承	19)祭りや芸能は昔から意味のあること。次世代への引継ぐことは大切であり当然のことだと思う。例えば農業なら収穫、漁業なら大漁等と、そして共に地元ならではの「食」がある
	20)伝承していくことは大事だと思う
	21)高齢者が増え、人口減少による参加者が少なくなるので、後継者の育成が必要
	22)存続する限りの資料を一つの芸能の足跡として展示。過去にさかのぼり、現在まで検証しながら展示を見た人々が誤った継承に気づき、「そうではない」部分に胸をはって声をあげること
その他	23)健康になり10年生きたい。お世話にはなりますけど
問２	**今後、内陸部と沿岸部の文化交流を構築する上で課題は何ですか？（自由筆記）**
基盤整備	1)地域格差をなくす沿岸部への予算強化。職場を増やす、定住しやすい環境をつくる
	2)交通の利便、時間がかかりすぎる
	3)文化交流だけではなく計画するときはいつも交通の便(移動手段)が課題になる
	4)広大な岩手県では移動時間にどうしてもハンディがある。交互交流がどうしても必要になる
	5)遠く感じるので身近に行き来できる交通手段
	6)沿岸の活動資金や施設設備への助成。動ける若者がいない。交流人口の減少、内陸部の被災地への関心の薄さ
	7)文化交流といっても、住居が定まっていないこと、復興の差、様々なことで生活が安定しないので考えられないのが本音だと思う
意識	8)内陸部の人は現状沿岸部に行きたいとは思わないと感じるので、沿岸部は安全面やその他のアピールが必要だと思う
	9)意識の差
交流	10)文化交流ではなく普段の生活、暮らしにおいての交流が必要。相互訪問
	11)交流を続ける。内陸、沿岸で協力できることがあればお互い助け合いたい
	12)コミュニケーション技術を高めることだと思う
	13)市民団体等の交流、行き来しやすい環境を整える

交流	14)なかなか難しい問いである。私の住んでいる所は映画もない。沿岸の子どもたちがスキー、スケートを経験が出来るようだと楽しんでもらえるのでは。どこかの内陸の町と交換留学生制度など
	15)文化交流の窓口はどこなのか？私はまだよく理解できていないのだと思う
	16)その場所に行って環境まるごと文化に接したい
その他	17)岩手県内の祭りと芸能、食ルーツをマップにする等、観光戦略も出来るのでは？今回の震災で、沿岸に多く古墳が発見された。南部藩のルーツも紐解くなり、「原敬はどうして東京駅で刺殺されたのか？」等、岩手県民だからこその目線で様々な角度から展開出来るのでは？正直内陸と沿岸での文化交流の構築する上での課題も多少あるかと思う。少子高齢化、安定した県民の生活等を考えるなら「オール岩手」で取り組めば良いことでは？内陸・沿岸、それぞれのコンセプト等があったほうが良いのではないだろうか
	18)昔の歴史的なもの
	19)文化交流は必要？
問３	**文化交流を構築する上で望むことは何ですか？（自由筆記）**
基盤整備	1)出来るだけ早く施設などを整備し、町づくりに力を入れないと、文化交流できる段階まで到達していない
	2)「県土の均衡ある発展」とよく耳にするが、沿岸部はどうしても施設そのものが不足がち。まずそれを進める
	3)お金の心配をさせないでほしい
意識	4)意識の差をなくする
	5)それらの活動を人に知らしめること
	6)内陸中心に考えるのではなく、別々に活動したらいい。独自の道を拓いた太鼓フェスタはすごいと思う
	7)幅広い年代の方(特に若い世代)が興味を持って参加すること
継続	8)支援を続ける、又は参加する。継続すること
	9)震災をきっかけに多くのボランティアさんや催しが行われた。そのことで被災者もたくさんの元気や癒しをいただき、その交流からさらなる交流も生まれた。それが続くことが大切かと思う
教育	10)大人は良しとして、子どもは同じ岩手の大切な宝物なので格差のない文化、教育の充実を計って欲しい
交流	11)発表者、鑑賞者相互の声が紹介されるような交歓会などあればよい
	12)いろいろな世代が楽しめるような文化交流になること
その他	13)この年になり本や芸術文化なんて見ることも聞くこともない。ただ働いて食べること、母のことだけ看てきたものだから、字も下手、漢字もわからないこともある
	14)スポーツだけではなく、芸術とみるかは人によると思うが、盛岡のスケート場が完成した初日に金メダルの羽生選手に「花は咲く」をお願いする。被災者のみの大イベント！人の気力を出させる事業の実施